熊本県文化財調査報告第109集

上片町水田遺跡

（かみかたまち）

九州縦貫自動車道（八代（やつしろ）～人吉（ひとよし）間）建設に伴う埋蔵文化財調査

1989年10月

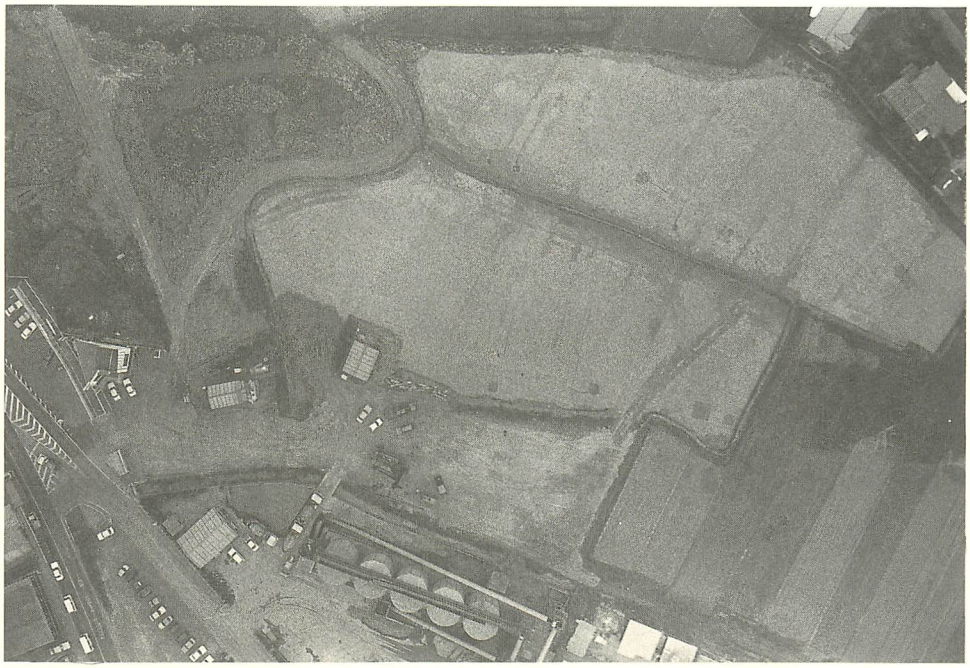
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第109集

上片町水田遺跡

（かみかたまち）

熊本県八代市上片町字辺田の前所在の上片町水田遺跡



1989年10月

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の依頼を受けて、「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行いました。

ここに報告する『上片町水田遺跡』（ 八代市上片町字辺田の前所在 ）は、昭和58年８月から昭和59年１月にかけて発掘調査を実施し、昭和63年度と平成元年度に整理・報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、九州山地の西端麓・八代に拓かれた現水田の下層から、江戸時代中期（ 18世紀前半 ）と思われる埋没水田址や、江戸時代末期（ 文久年間 ）から明治時代の初期に焼かれた近世瓦の粘土採掘跡が確認され、貴重な資料を得る事が出来ました。

この報告書が、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、日本道路公団福岡建設局八代工事事務所から御配慮を賜り、整理に関しましては、九州陶磁文化会館と八代市教育委員会の協力を得ました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成元年10月31日

熊本県教育長　松　村　敏　人

「九州縦貫自動車道(八代～人吉間)」宮地工事について

当工事は、八代インターチェンジより南に向かう起点部であるとともに、南九州の尾根を横断する山岳道路への玄関口でもある。八代インターチェンジまでの既供用区間が、主に平地部、又は丘陵地帯を通過しているのに対し、当地を境に、V字谷連続の山岳に入り、道路の構造はトンネル及び橋梁が大部分を占める事になる。

当地区は八代平野の南東部に位置し、標高はほぼ4～5mである。地質としては、球磨川・氷川・砂川等の河川による沖積作用によりできたものである。下部は洪積世の砂礫・砂・粘土等からなり、最上部付近は沖積世の粘土・シルト・砂よりなる。

道路構造としては、八代インターチェンジより約1kmは構造物が主体の橋梁工事であり、一般国道3号線を横過すると長さ 314mの盛土となる。さらに、長さ64mの切土を経て、大平山トンネル（L＝1,195 m）に入る。なお、盛土部分の内、長さ約 100m分が発掘調査区域となった。

本工事は、昭和59年1月に熊本県教育庁文化課の発掘調査を終了し、昭和61年10月に竣工した。

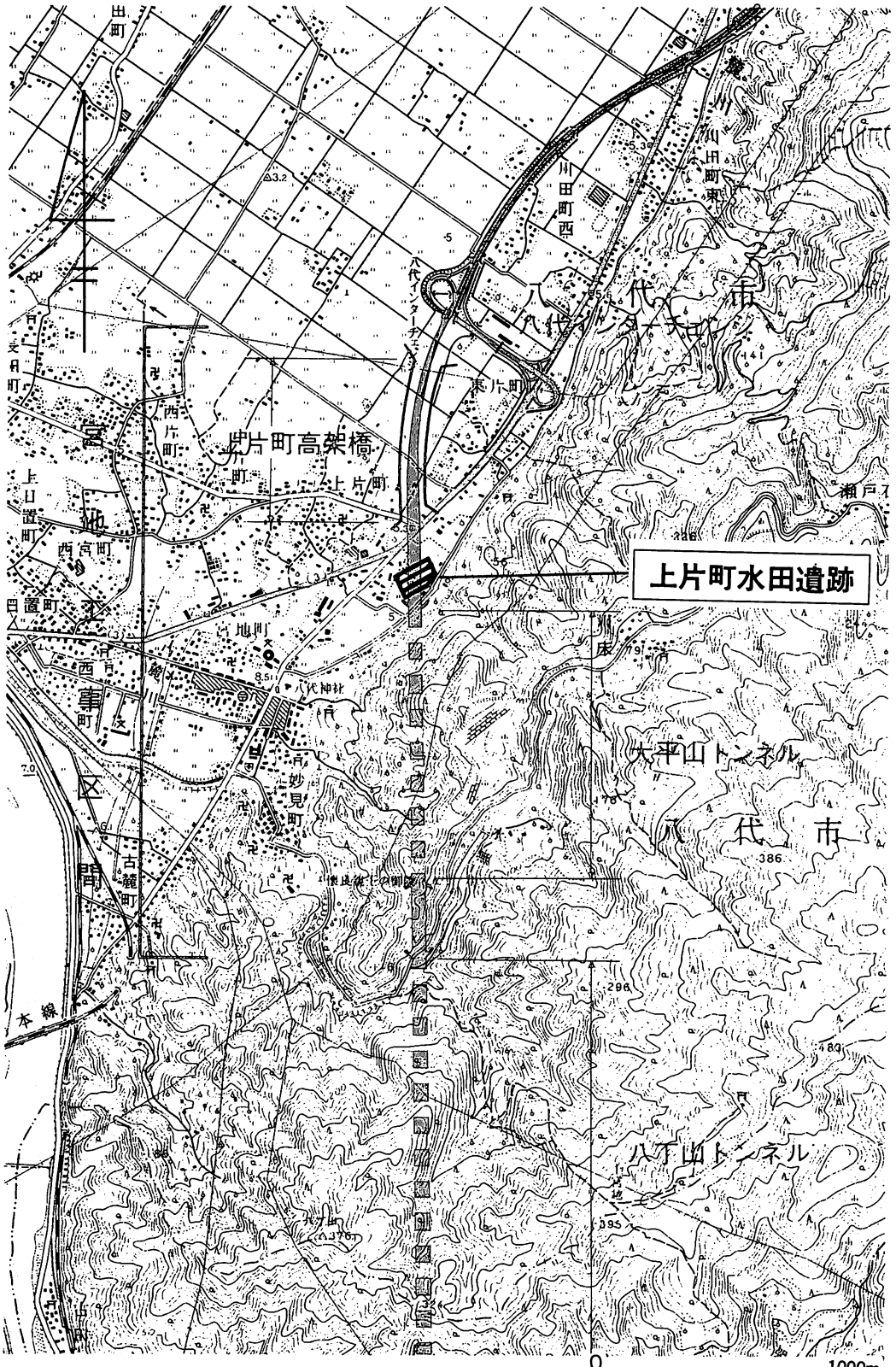
平成元年10月4日

日本道路公団福岡建設局

八代工事事務所　副所長　　小　原　　明

工　事　概　要

(1)	工　事　名	九州自動車道　宮地工事
(2)	路　線　名	高速自動車国道　九州縦貫自動車道　鹿児島線・宮崎線
(3)	工事箇所	自）熊本県八代市東片町大字岡神（ＳＴＡ１８２＋３６.753） ０－　43.2
		至）　〃　　〃　妙見町大字八丁（ＳＴＡ　２１＋９４.0）
(4)	工　　期	昭和５８年１２月１日から （１０２０日間）
		昭和６１年９月１５日まで
(5)	請負代金額	2,988,000,000 円
(6)	請　負　人	西松建設（株）・（株）森本組　共同企業体
(7)	連絡等施設	なし
(8)	休憩施設	なし



「九州縦貫自動車道」宮地工事区間

工種別延長

工　　種	細　目	延長（m）	百分率（%）	備　　考
総　延　長		2,237.0	100.0	（下り線）
道路延長		378.0	16.9	切土部はトンネル入口
	切土部	64.0	2.8	盛土部の内 100m分が
	盛土部	314.0	14.1	発掘調査区域
橋梁延長		664.0	29.7	
	長大橋	73.0	3.3	水無川橋
	中小橋	42.0	1.9	片町橋L＝25.0m 観音橋L＝17.0m
	高架橋	549.0	24.5	片町高架橋
トンネル延長		1,195.0	53.4	大平山トンネル

構造及び線形

項　目	設　計　規　準
規　格	第一種3級（B）
設計速度	80km／h
本線幅員 （暫定時）	9.88 m（土工），9.0m（橋梁），8.25 m（トンネル） （用地4車線，　工事2車線）
平面線形	最小曲線半径　　R＝4，000m
縦断線形	最急縦断勾配　　i＝2.53 %

工事数量内訳

工　種	細　目	単　位	数　量	摘　要
切盛土工	道路掘削	m^3	約19,900	
	構造物掘削	〃	〃22,600	
のり面工	特殊のり面工	m^2	約 1,200	コンクリート吹付工
	メーソンリー工	〃	〃 4,200	コンクリートブロック積工
構渠工	ボックスカルバート	箇所	1	
長大橋		箇所-m	1- 73.0	橋台2基，橋脚3基
中小橋		箇所-m	2- 42.0	橋台4基 場所打ぐい（φ1.2m）573 m
高架橋		箇所-m	1-549.0	橋台1基，橋脚9基 場所打ぐい（φ1.0m)2,298 m RC連続ラーメンボックス 11連
トンネル工	トンネル掘削	m^3	約93,600	大平山トンネル
	鋼アーチ支保工	基	〃 460	
	巻立コンクリート	m^3	〃10,500	
	ロックボルト工	本	〃14,300	
	コンクリート吹付工	m^2	〃26,300	

凡　例

1．出土遺物の鑑定に際しては、九州陶磁文化会館の大橋康二氏に指導を受けた。遺物観察表に記載した窯名や年代については同氏の示唆を参考とした。

2．土層断面図に使用した記号の意味は下記の通りである。

①　A＞B　　Aの土壌を基本としてBの土壌が混入する。

②　A≫B　　Bに比べてAの土壌の影響が非常に大きい。

③　A＞B＋C　①の中に少量のC土壌が混入する。

3．第4図の条里地図は、『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告第25集に記載されたものを基に、今回、再編集を行った。

例　言

1．本書は、日本道路公団「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」の宮地区間建設工事に伴い、事前に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県八代市上片町字辺田の前に所在する『上片町水田遺跡』で、日本道路公団福岡建設局から委託を受けて、熊本県教育庁文化課が発掘調査を行った。

3．当遺跡の発掘調査は、昭和58年度に試掘・本調査を実施し、整理・報告書作成は昭和63年度・平成元年度に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。

4．発掘調査は大田幸博・黒田裕司がその任にあたった。

5．発掘調査過程の写真撮影は大田・黒田が行い、整理後の出土遺物の写真撮影は大田が行った。

6．出土遺物の実測には、岩崎充宏・山下志保の協力を得た。遺構及び遺物の製図は、石工みゆき・溝口真由美が行った。

7．本書の執筆は大田が担当し、第Ⅱ章(4)は菖蒲和弘が執筆し、付論は名和達夫氏（八代史談会員）の執筆による。

8．「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」宮地工事区間の概要文は、日本道路公団福岡建設局八代工事事務所の小原　明副所長の執筆による。

9．本書に使用した地形図・字図は国土地理院発行のものと、日本道路公団福岡建設局八代工事事務所と八代市教育委員会からの提供によるものである。

10．出土遺物の整理は、仮設の熊本県教育庁文化課人吉調査事務所で行った。なお、調査事務所の敷地については、熊本県衛生部と人吉保健所の協力を得た。

11．本書の編集は大田が行い、溝口の協力を得た。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の概要・・1
　第１節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第３節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第４節　遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第５節　遺跡及び調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第Ⅱ章　遺跡の概要・・14
　　遺跡の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第Ⅲ章　調査の結果・・18
　第１節　埋没水田址について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　第２節　埋没水田址の土層について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　第３節　近世瓦の粘土採掘跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第Ⅳ章　出土遺物・・29
　第１節　洪水層及び埋没水田址からの出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　第２節　瓦粘土採掘跡からの出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　第３節　埋没水田址及び瓦粘土採掘穴から出土の古銭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第Ⅴ章　「片の川」刻印瓦と旧片野川村について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第Ⅵ章　総　　括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
付　論　「八代地方の災害年表」 ――名和達夫――・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

挿　図　目　次

第１図　九州縦貫・横断自動車道路線図・２
第２図　上片町水田遺跡位置図・・・・・５
第３図　遺跡周辺地形図・・・・・・・・６
第４図　八代平野条里分布図・・・・・・８
第５図　字辺田の前　地籍図・・・・・・11
第６図　周辺地形図（圃場整備前）・・・12
第７図　周辺地形図及び字図・・・・・・13
第８図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・15
第９図　調査区域図・・・・・・・・・・・19
第10図　水路㋐水溜まり箇所実測図・・・・20
第11図　調査区全体図・・・・・・・・・・21
第12図　水路土層断面図・・・・・・・・・24
第13図　埋没水田址土層断面図・・・・・・25
第14図　瓦粘土採掘跡実測図・・・・・・・27
第15図　瓦粘土採掘穴土層断面図・・・・・28
第16図　出土遺物実測図　①・・・・・・・35

第17図　出土遺物実測図　②・・・・・・38
第18図　出土遺物実測図　③・・・・・・40
第19図　出土遺物実測図　④・・・・・・41
第20図　出土遺物実測図　⑤・・・・・・44
第21図　出土遺物実測図　⑥・・・・・・48
第22図　出土遺物実測図　⑦・・・・・・51
第23図　出土遺物実測図　⑧・・・・・・56
第24図　出土遺物実測図　⑨・・・・・・58
第25図　出土遺物実測図　⑩・・・・・・60
第26図　出土遺物実測図　⑪・・・・・・62
第27図　出土遺物実測図　⑫・・・・・・64
第28図　出土遺物実測図　⑬・・・・・・65
第29図　出土遺物実測図　⑭・・・・・・・67
第30図　出土遺物実測図　⑮・・・・・・・68
第31図　出土遺物実測図　⑯・・・・・・・70
第32図　出土遺物実測図　⑰・・・・・・・71
第33図　出土遺物実測図　⑱・・・・・・・73
第34図　出土遺物実測図　⑲・・・・・・・74
第35図　出土遺物実測図　⑳・・・・・・・75
第36図　出土遺物実測図　㉑・・・・・・・77
第37図　出土遺物実測図　㉒・・・・・・・79
第38図　出土遺物実測図　㉓・・・・・・・80
第39図　出土遺物実測図　㉔・・・・・・・81
第40図　〔参考〕八代松江城跡出土の瓦・・82

表　目　次

第１表　九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設地の埋蔵文化財包蔵地一覧表・3
第２表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・14
第３表　水路土層観察表・・・・・・・・・24
第4-1表　埋没水田址共通土層観察表　・・25
第4-2表　水路㊧土層観察表・・・・・・25
第５表　瓦粘土採掘穴計測表・・・・・・27
第6-1表　ＳＥ－０１土層観察表・・・・28
第6-2表　ＳＥ－２４土層観察表・・・・28
第6-3表　ＳＥ－１８土層観察表・・・・28
第７表　出土遺物観察表　①・・・・・・36
第８表　出土遺物観察表　②・・・・・・37
第９表　出土遺物観察表　③・・・・・・39
第10表　出土遺物観察表　④・・・・・・40
第11表　出土遺物観察表　⑤・・・・・・42
第12表　出土遺物観察表　⑥・・・・・・43
第13表　出土遺物観察表　⑦・・・・・・45
第14表　出土遺物観察表　⑧・・・・・・・46
第15表　出土遺物観察表　⑨・・・・・・・47
第16表　出土遺物観察表　⑩・・・・・・・49
第17表　出土遺物観察表　⑪・・・・・・・50
第18表　出土遺物観察表　⑫・・・・・・・57
第19表　出土遺物観察表　⑬・・・・・・・59
第20表　出土遺物観察表　⑭・・・・・・・61
第21表　出土遺物観察表　⑮・・・・・・・63
第22表　出土遺物観察表　⑯・・・・・・・66
第23表　出土遺物観察表　⑰・・・・・・・67
第24表　出土遺物観察表　⑱・・・・・・・69
第25表　出土遺物観察表　⑲・・・・・・・72
第26表　出土遺物観察表　⑳・・・・・・・76
第27表　出土遺物観察表　㉑・・・・・・・78
第28表　出土遺物観察表　㉒・・・・・・・81
第29表　片野川村の変遷一覧表・・・・・・83

写真図版目次

図版　1　(1)　調査区基本土層　(2)　畦畔Ｇ検出状況

図版　2　(1)　水田０５検出状況　(2)　畦畔Ｏ検出状況

図版　3　(1)　畦畔Ｓ検出状況　(2)　畦畔Ｅ検出調査風景

図版　4　(1)　埋没水田址出土の寛永通宝　(2)　水田０４より検出の瓦粘土採掘穴

図版　5　(1)　瓦粘土採掘穴の半裁状況　(2)　瓦粘土採掘穴出土の瓦層

図版　6　(1)　瓦粘土採掘穴の検出調査風景

(2)　瓦粘土採掘穴（ＳＥ－１０）出土の文久永宝

図版　7　洪水層及び埋没水田址出土の遺物

図版　8　洪水層及び埋没水田址出土の遺物

図版　9　洪水層及び埋没水田址出土の遺物

図版　10　(1)　洪水層及び埋没水田址出土の遺物　(2)　瓦粘土採掘跡出土の遺物

図版　11　瓦粘土採掘跡出土の遺物

図版　12　瓦粘土採掘跡出土の遺物

図版　13　瓦粘土採掘跡出土の遺物

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調査の主体　熊本県教育委員会

調査責任者　文化課長：米村　嘉人（昭和58年度：調査）

江崎　　正（昭和63年度・平成元年度：整理）

調査総括　〔調査〕　隈　　昭志（昭和58年度・文化課文化財調査係長）

〔整理〕　桑原　憲彰（文化課文化財調査第２係長）

発掘調査　大田　幸博（文化財保護主事：試掘・本調査）

黒田　裕司（昭和59年度文化課嘱託：試掘・本調査）

報告書　大田　幸博（文化財保護主事）　菖蒲　和弘（嘱託）

岩崎　充宏・山下　志保（昭和63年度・熊本大学考古学研究室）

石工みゆき・溝口真由美・宮崎　敬子（臨時職員）

調査事務局　文化課長補佐：林田　茂一（昭和58年度）　林田　敏嗣（昭和63年度）

中川　孝幸（平成元年度）

主幹経理係長：大塚　正信（昭和58年度）　松崎　厚生（昭和63年度）

上村　忠道（平成元年度）

参　　事：松崎　厚生（昭和58年度）

主　　事：上村　祐司　泉野　順子（平成元年度）

日本道路公団福岡建設局八代工事事務所（昭和58年度：発掘調査時）

柳井　　賢（前所長）　杉本　一宏（前八代工事長）　坂本　孝二（技師）

俵積田　仁（技師）

平成元年度報告書作成時：豊永　盛喜（技師）

日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所（平成元年度：報告書作成時）

近藤　俊一（所長）　岩永　一男（前庶務課長）　石丸　　裕（庶務課）

協力者　吉永　　明（八代市教育委員会）

発掘作業員　中田　好則　田中スソ子　宮川　邦子　白浜レイ子　森田　重子　上村ヤサメ

村山　祐子　浜田　教子　鶴田チクエ　早川　好子　岩本　　茂

整理作業員　〔人吉調査事務所〕尾方　信子　迫田　洋子　林　　枝三

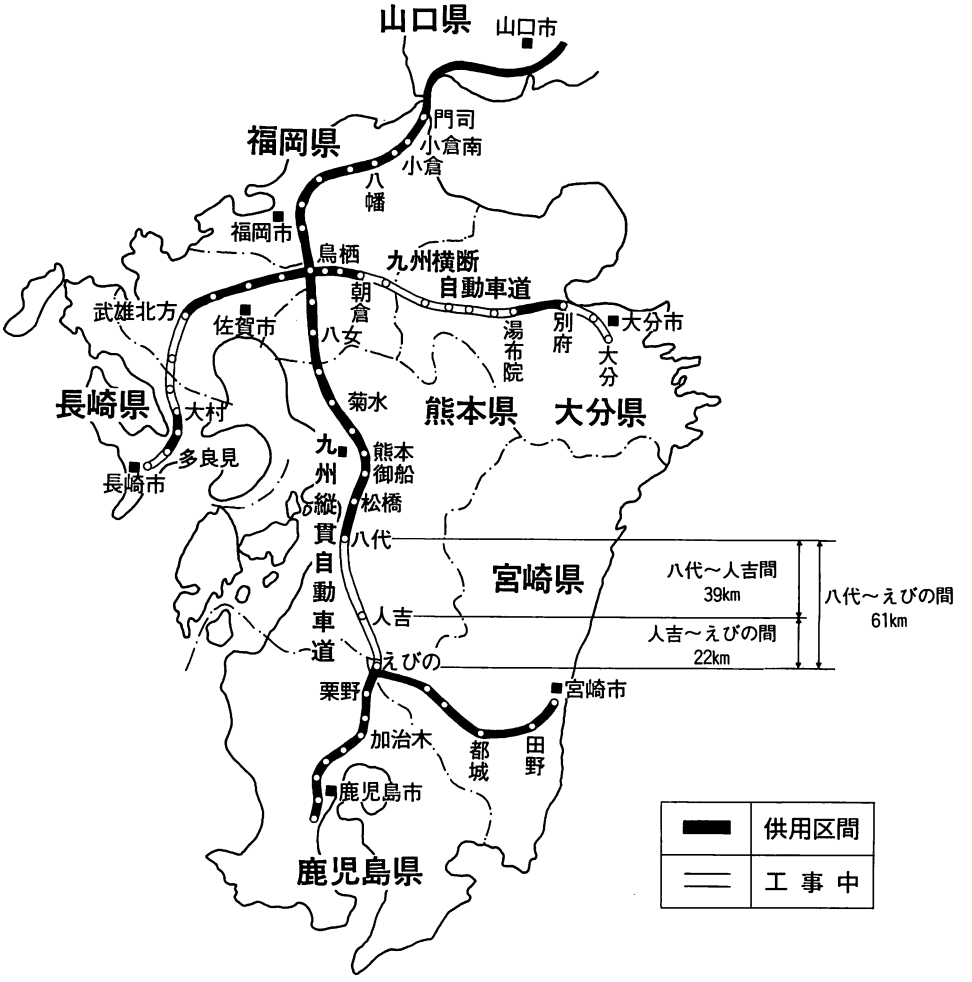
〔熊本県文化財収蔵庫〕笠間いつ子　吉永都美子　渕上　慶子　水本寿美子

重永　照代　永広　絹代　塩田喜美子

第２節　調査に至る経緯

「九州縦貫自動車道（八代～えびの間）」の着工を前に、昭和52年３月29日付けで日本道路公団福岡建設局（局長：大城金夫）から、熊本県教育委員会（教育長：林田正恒）宛に道路建設予定地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼があった。

県教育庁文化課ではこれを受けて、同年８月４～６日・10～12日の２回にわたり、隈　昭志文化財調査係長をはじめとして杉村彰一技師・島津義昭学芸員・田添夏喜文化課嘱託の計４名で、文化財遺跡台帳と照合の上、重要と思われる箇所については、現地に赴き踏査による調査を行った。その結果、八代市には東片町古墳群・**上片町条里遺跡**、球磨郡山江村には淡島遺跡・狸谷遺跡・本城遺跡・高城跡・大丸遺跡、人吉市では笹栗山遺跡・梢山遺跡・佐無田狩所遺跡・岩清水遺跡・七地条里遺跡・尾丸横穴群・原城遺跡・尾丸古塔碑群・七地遺跡・人我胸遺跡・昼子遺跡など、計18ケ所に及ぶ遺跡の存在が考えられた。



第１図　九州縦貫・横断自動車道路線図

No	遺　跡　名	所　在　地	分布調査時の所見	試掘	本調査	報告書	備　　考
1	東片町古墳群	八代市東片町	古墳群及び古墳時代の住居跡群。	○	×	−	
2	**上片町水田遺跡** (上片町条里遺跡)	八代市上片町	八代平野の東片町・西片町・中片町・上片町に条里制地割の残存が考えられる。	○	○	○	**(本書)**
3	淡島遺跡	球磨郡山江村 万江字淡島	淡島神社の西側丘陵上に、石器や石材片が散布している。	×	—	−	工法により保存
4	狸谷遺跡	球磨郡山江村 山田字狸谷	山江サービスエリア予定地内に、縄文時代早期の押型文土器・石器・石材が散布している。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第90集**
5	本城遺跡	球磨郡山江村 山田字本城	台地上に土師器片が散布する。	○	×	−	
6	高城跡	球磨郡山江村 山田字城・本城	地名と遺構から、中世城跡である。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第95集**
7	大丸・藤ノ迫遺跡 (大丸遺跡)	球磨郡山江村 山田字藤ノ迫	周辺は切り落とし状の急斜面で、城跡の可能性がある。台地上に古墳時代の住居跡が考えられる。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第80集**
8	笹栗山遺跡	人吉市 北願成寺町字笹栗山	弥生式土器片・土師器片が散布し、住居跡と水田跡の可能性がある。	○	×	−	
9	梢山遺跡	人吉市 北願成寺町字梢山	土師器片が散布する。	○	×	−	
10	鼓ケ峰遺跡 (佐無田狩所遺跡)	人吉市 北願成寺町字鼓ケ峰	土師器片が散布するほか、相良氏第四代頼俊の居館関連の遺構が存在すると予測される。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第96集**
11	岩清水遺跡	人吉市 南願成寺町字岩清水	縄文式土器（市来系）・石器や石材片が散布する。	○	×	−	工法により保存
12	七地水田遺跡 (七地条里遺跡)	人吉市 七地町字原畑	条里遺構で、付近に「大坪」の地名が残っている。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第 101集**
13	尾丸横穴群	人吉市 七地町字天道ケ尾	台地の北側崖面に凝灰岩が露頭し、古墳時代後期の横穴が存在する。	○	×	−	一部、周辺を試掘。
14	天道ケ尾遺跡 (原城遺跡)	人吉市 七地町字天道ケ尾	人吉城関連「原城」の一部をなす城跡と推定される。多量の土師質土器片が散布する。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第 103集**
15	尾丸古塔碑群	人吉市 七地町字尾丸	板碑や五輪塔の残欠が積んであり、中世～近世の墓地があったと思われる。	○	×	−	
16	七地遺跡	人吉市 七地町字七地	縄文・弥生・古墳時代の土器、中世の土器・陶磁器が散布する。	○	×	−	
17	人我胸遺跡	人吉市 赤池水無町字人我胸	弥生式土器・土師器片が散布する。	−	—	−	人吉～えびの間へ持ち越し。
18	昼子遺跡	人吉市 上漆田町字昼子	微細な土器片が散布する。	−	—	−	〃
19	山田城跡Ⅰ	球磨郡山江村 山田字大王谷	山田城跡の南側部分が路線内となる。	○	○	○	**熊本県文化財調査報告第 102集**
20	山田城跡Ⅱ	球磨郡山江村 山田字城山・下城子	地名と遺構から、中世城跡である。	○	○	○	平成元年度作成予定

(注) ① 19・20の山田城跡Ⅰ・Ⅱについては、昭和60年度に調査を追加。
② 遺跡名変更・・・2．上片町条里遺跡→上片町水田遺跡　10．佐無田狩所遺跡→鼓ケ峰遺跡　14．原城遺跡→天道ケ尾遺跡
7．大丸遺跡→大丸・藤ノ迫遺跡　12．七地条里遺跡→七地水田遺跡

第１表　九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設地の埋蔵文化財包蔵地一覧表

本報告書で取り上げる上片町条里遺跡の所見は「八代平野の東片町・西片町・中片町・上片町に条里制地割の残存が考えられる」であった。

この結果を昭和52年９月９日付けで、日本道路公団福岡建設局へ回答した。その後、日本道路公団から、昭和53年４月11日付けで文化庁長官あての協議書が提出され、これに熊本県教育委員会の意見を付けて同年５月19日付けで文化庁長官あてに具申した。

文化庁からは昭和53年６月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上、事前に発掘調査を実施すること。なお調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること」という通知があり、昭和53年６月20日付けで日本道路公団あて通知した。

熊本県教育委員会は日本道路公団の調査依頼を受け、昭和57年度から58年度にかけて各遺跡の試掘調査を行った。八代市の上片町条里遺跡については、昭和58年７月に実施し、これには県文化課文化財保護主事：大田幸博、同課嘱託：黒田裕司があたった。

試掘調査の結果、県文化課が比定した上片町条里遺跡の現水田下からは、一部区域について、近世と中世遺物を包蔵する洪水層に覆われた江戸時代中期の埋没水田址が検出された。

そこで、県文化課では日本道路公団と協議の上、本格的な発掘調査を同年８月から実施することとなった。本調査は試掘調査に引き続いて、大田と黒田が担当した。

なお、遺跡名については、報告書作成時に**上片町水田遺跡**と改めた。

第３節　調査の方法と経過

「九州縦貫自動車道（八代～人吉間）」の建設に際し、条里の遺構が予測される八代市上片町字辺田の前の水田地に調査区を設定した。

調査区は、東西の最大値95ｍ×南北の最大値 120ｍ・総面積 7,000㎡を測るものであった。

発掘調査の経過

昭和58年７月14日から29日まで試掘調査を行い、引き続いて同年８月８日より昭和59年１月31日まで本調査を実施した。以下、調査日誌の抄略である。

昭和58年７月14～29日　遺跡比定地の水田に計10ケ所の試掘溝を入れる。その結果、水田の北側区域を除く計７ケ所から、現水田の下層に埋没水田層が検出された。但し、条里には無関係で、出土遺物から江戸時代中期のものと推察された。

８月　重機類を導入して、現水田層を剝ぐ。調査区の中央部を南北に水路が横断しているため、作業は困難を極める。

調査区外の水田からしばしば水が流れ込む事があり、作業能率は極めて悪い。

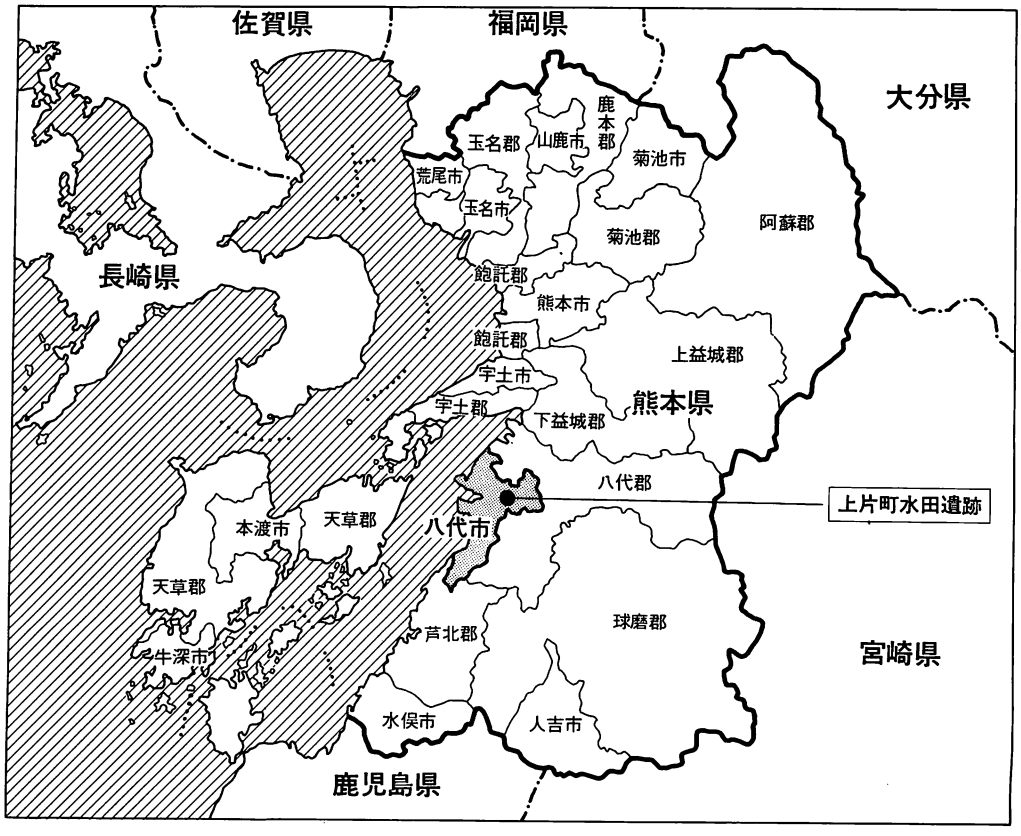
９月　現水田と埋没水田層との間に堆積した間層を掘り込む。土層は硬く、発掘作業は容易でない。さらに隣接地の生コン工場から風向きによって、大量の粉塵が舞い降りる事があり、頭が痛い。幾度となく「調査やめようか」とのグチを同僚の黒田君と交わす。

10月　調査区の東側区域から近世瓦の粘土採掘穴がいくつも検出された。埋土の中に特異な瓦製品が混じっており、遺物採集の意味からも全掘を行った。

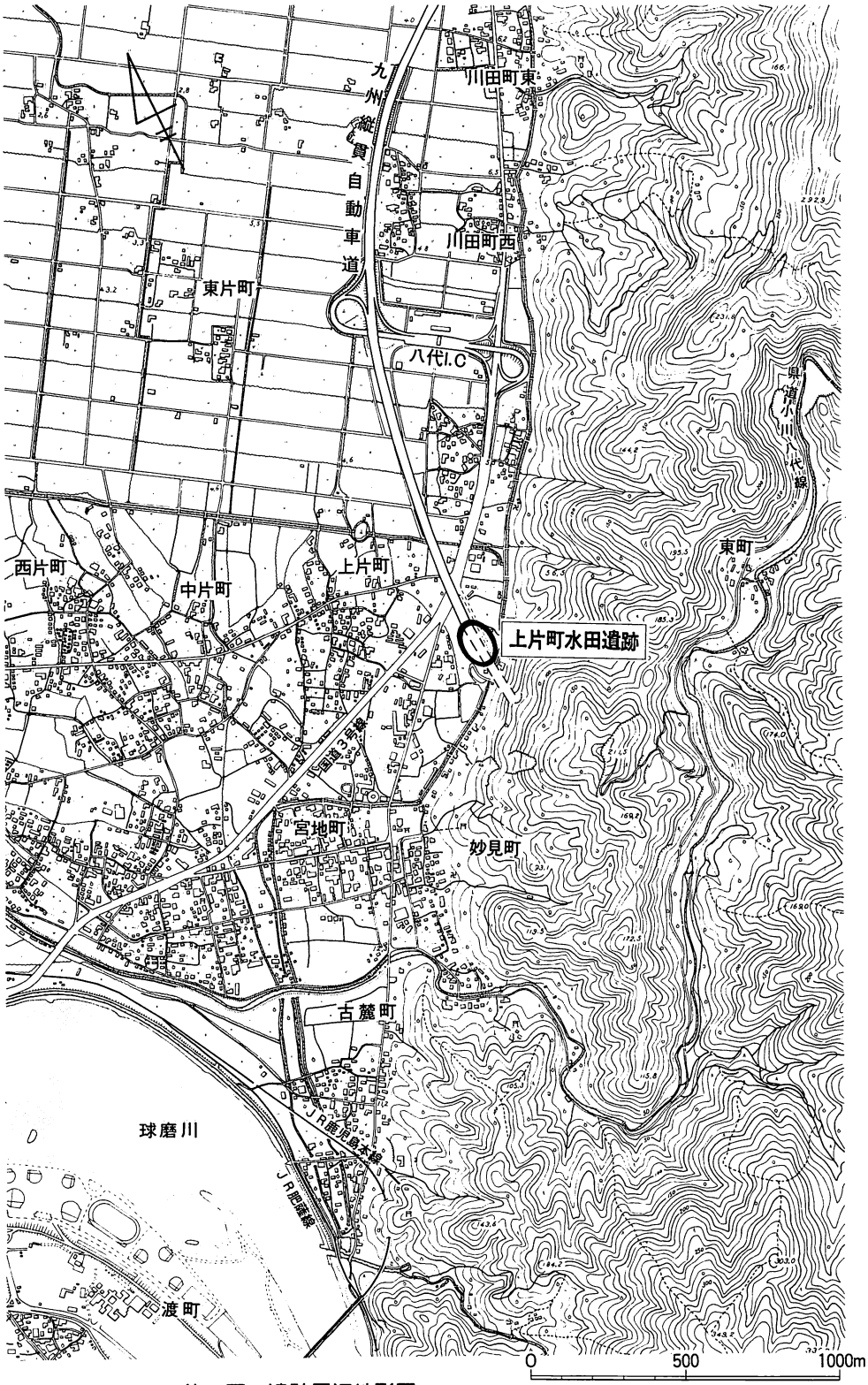
11月　調査区の東方向に位置する竜峰山一帯からの吹きおろしの風が冷たい。相変わらず生コン工場の粉塵が調査区に舞い降りる。まったく、この現場はうらめしい。

12月　あら方の埋没水田の畦畔が姿を表わす。アドバルーンによる全調査区の写真撮影を試みるが、強風のために出来は良くない。山からの吹き降ろしの風は肌を刺す。

昭和59年1月　実測調査に追われる。近世の埋没水田址や粘土採掘穴の調査ではあったが、黒田君と「いずれ、この資料が必要とされる時期がくるし、次の現場の七地水田遺跡調査の際に、この経験はきっと役に立つ」と話し合う。それにしても、つらい現場であった。機材撤去の際、現場に対し何の感傷もわかなかった。



第2図　上片町水田遺跡位置図


九州縦貫自動車道
川田町東
川田町西
東片町
八代I.C
県道小川八代線
東町
西片町
中片町
上片町
上片町水田遺跡
国道3号線
宮地町
妙見町
古麓町
球磨川
JR肥後大野線
JR肥薩線
渡町
0
500
1000m

第3図　遺跡周辺地形図

第４節　遺跡の位置と地理的環境

（１）　位　置

上片町水田遺跡は、熊本県八代市上片町字辺田の前の水田地に位置する。水田は標高 4.2～4.3ｍの低地で、国土地理院発行の５万分の１地形図「八代」に位置を求むれば、図幅南から1.1㎝、東から18.2㎝の所にある。地理的には九州山脈の西端麓にあって、広大な八代平野の東端、山際に開けた水田地帯の一部である。狭義的には、竜峰山から八峰山へと連なる山塊の西麓で、今日、山塊に沿う形で平野部の東域を国道３号線が走り抜けている。ここで言う上片町の家屋列はこの国道３号線を挟んだ西側にあり、国道より山付きの部分は、主に水田地となっている。

九州縦貫自動車道の宮地区間は、後者の水田地を高架橋と高さ５～６ｍの盛り土によって南方向に走り抜け、前述の山塊裾部を掘り進んだ大平山トンネルに入る計画である。

（２）　八代市

八代市は、熊本市の南方約40余㎞にあり、東西14㎞、南北23㎞、面積146.70㎢で、東南部は九州山脈の山間で占められ、中央部を球磨川が東方から西方へ貫流する。西方は八代海に面し、山間部との間に、八代平野と呼ばれる広大な平野の広がりがある。

ＪＲの鹿児島本線が平野の中央部を南北に走り、八代駅は、九州山脈を横断して宮崎・鹿児島方面へ通ずる肥薩線の分岐点となっている。

八代海沿岸の航路は、八代港を基点に天草諸港へ伸びており、水陸いずれも交通の要所となっている。

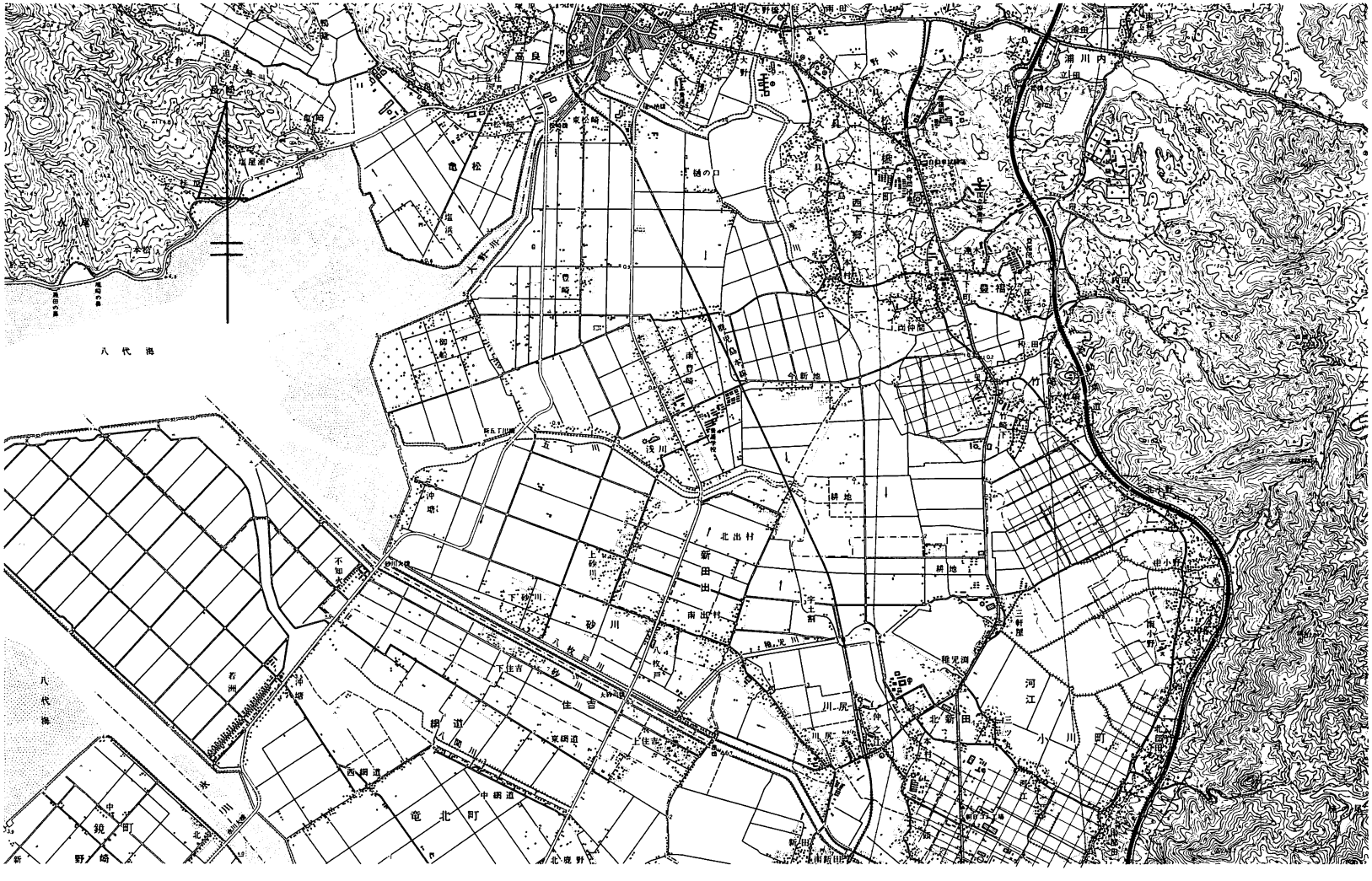
八代市における昭和60年の国勢調査人口は 108,790人である。

（３）　八代平野の条里について

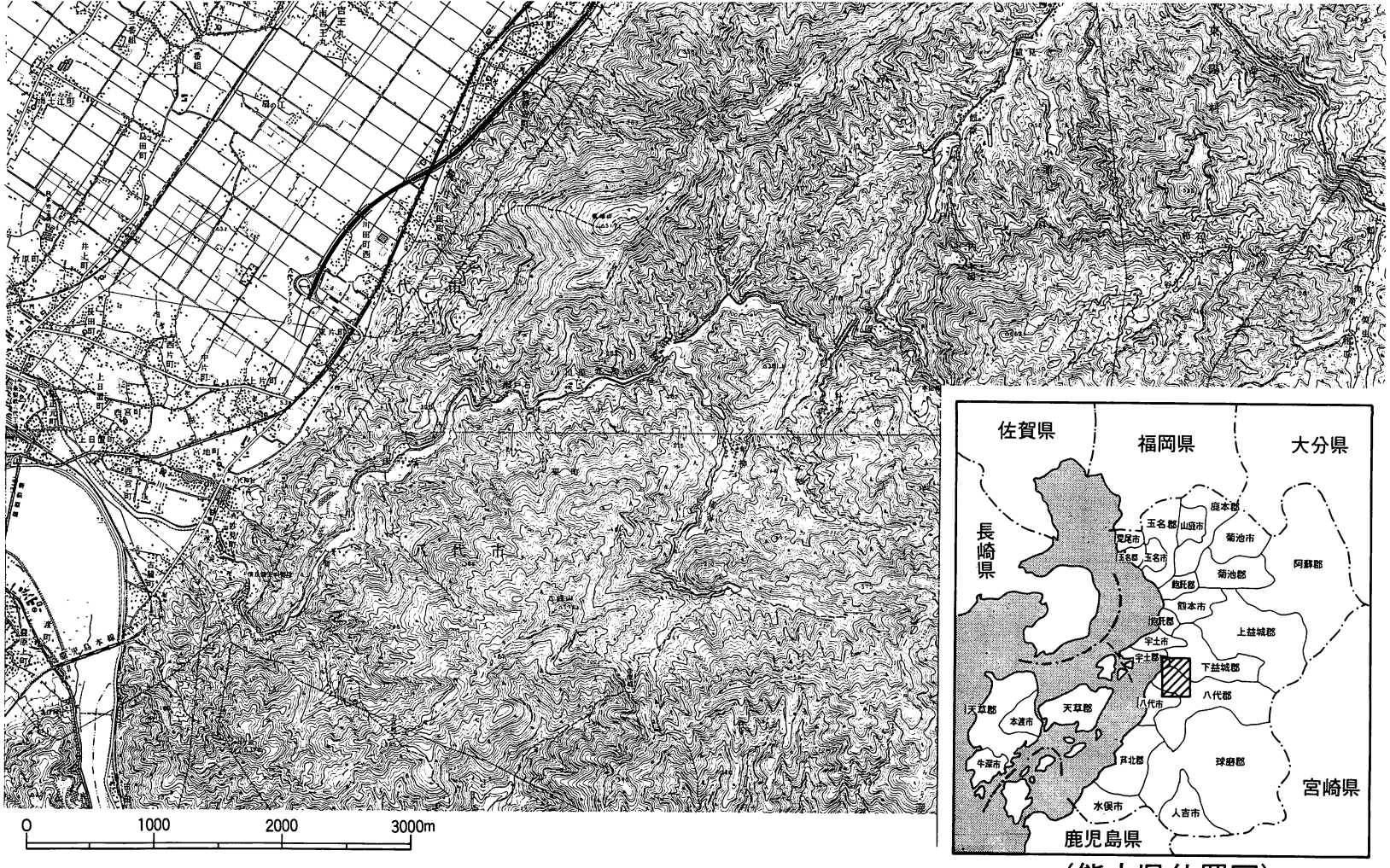
発掘調査の契機となった上片町を含む八代平野の条里については、『熊本県の条里』〔熊本県文化財調査報告第25集（1977）〕に関連事項が記載されているので、同書より主たる箇所を抜粋引用する。以下、引用文である。

「条里地割は、豊福の南付近から八代市の熊本労災病院にかけて、土地割の異なる多くの条里区が存在する。

１町方格の地割の連続性から考えてみると、豊福の南にＮ38°Ｅの条里、竹崎から南小野にかけてＮ30°Ｗの条里、北部田から小川にかけてＮ26°Ｅの条里、高塚から笹尾にかけてＮ30°Ｅの条里、竜北町の北川にＮ20°Ｅの条里、その西にＮ28°Ｅの条里、氷川の左岸、宮原から岡町にかけてＮ32°Ｅの条里、八代市の日置町にＮ32°Ｅの条里、片町付近に30°Ｅ、31°Ｅの条里、計10の条里区が考えられる。（第４図）」


八代港
竜松
大野川
浦川内
豊福
新田
北出村
南出村
砂川
住吉
竜北町
錦町
河江
小川町
北新田
稚児淵
八代港

鹿野
南鹿野
柳の江
下新田
新田
上新田
鹿島
上鹿島
鹿島地
野津
北野津
西野津
北町
西小川
柳野
寺
鳥屋
鳥屋戸
芝口
四丁目
三番町
横江
江向
宮田
銀町
上銀
中次郎
銀町
内田
下有佐
有佐
宮原村
宮原町
立村
下村
中島
北村
吉開出
千丁町
牟田
上外牟田
東牟田
西牟田上組
大鶴
貝洲
温泉
小田鶴
外出
石河原
高月
白之
北
畑中
九反
山口
岡町中
新屋敷
平島
大湯
北出
牟田場
大牟田
沙原
野崎
新出
東区
大池



(熊本県位置図)

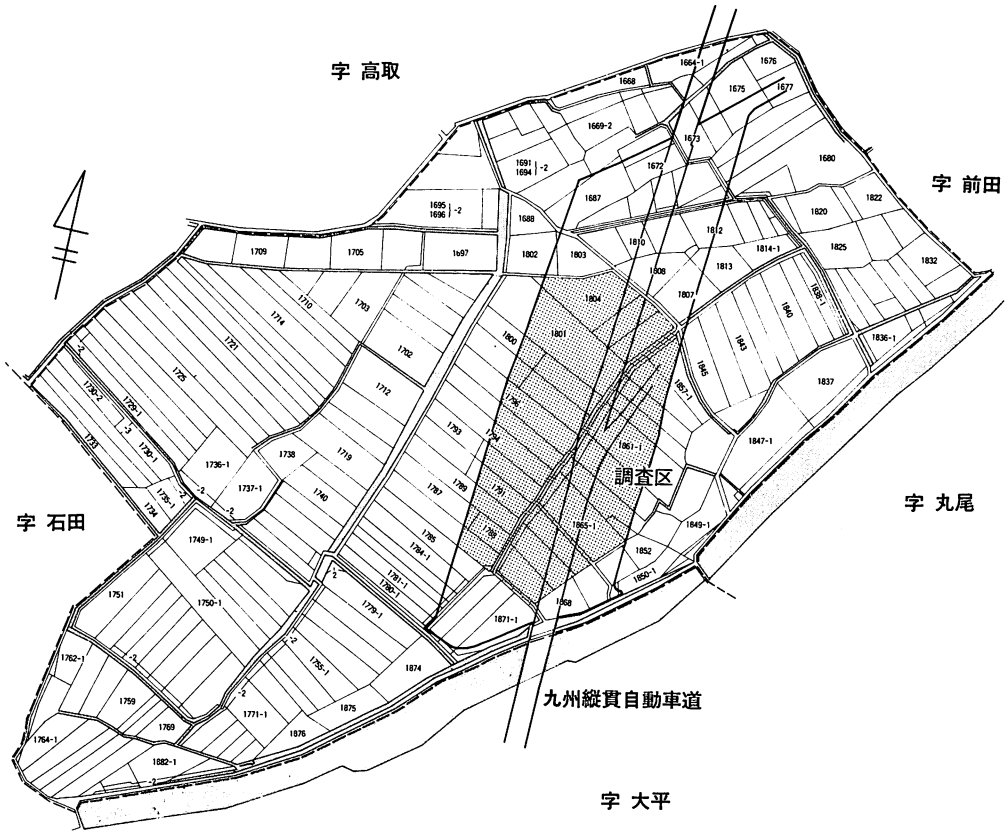
第４図　八代平野条里分布図

第５節　遺跡及び調査の概要

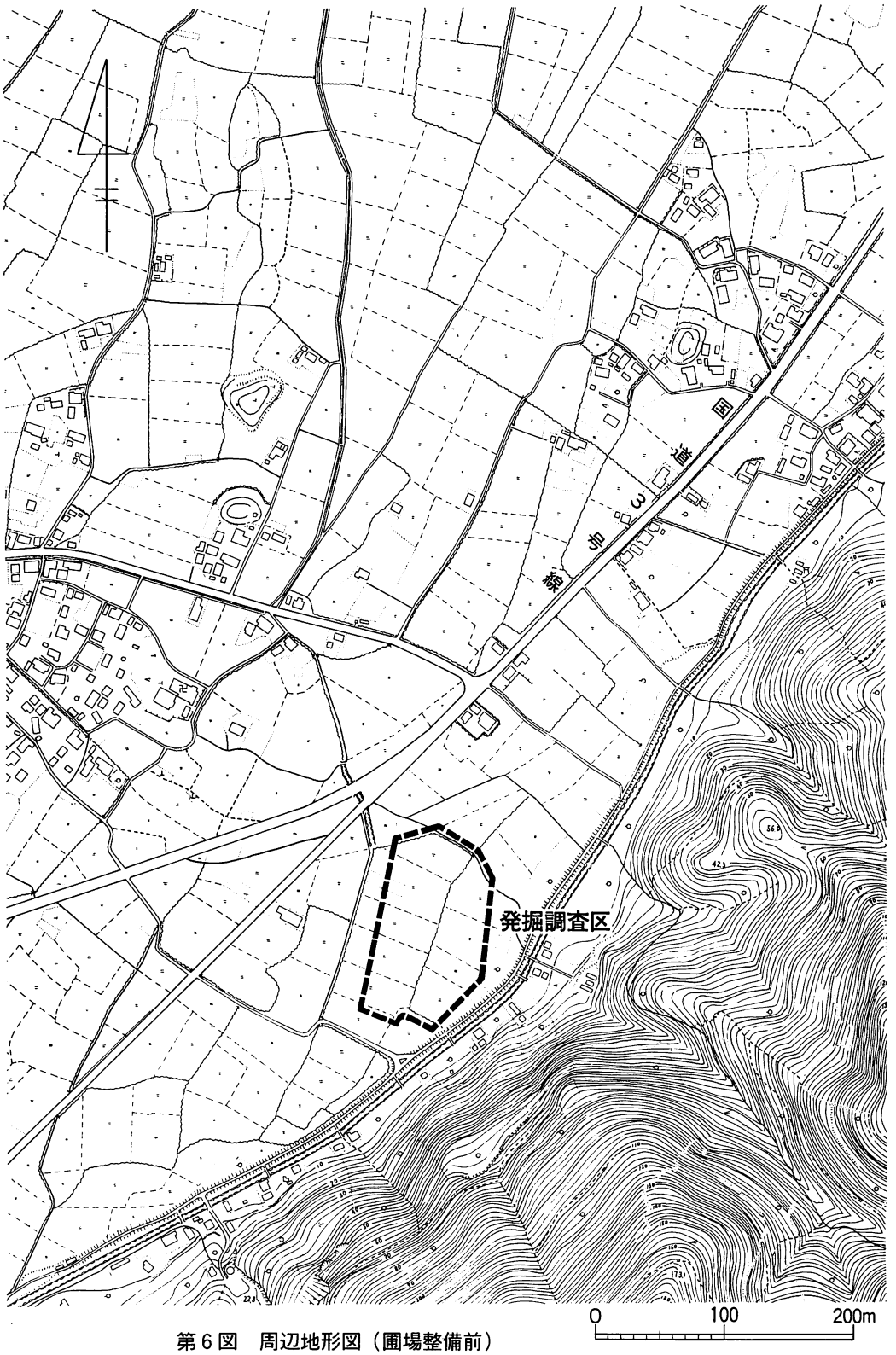
調査区は、東方の山付きと西方の国道３号線とに挟まれた水田地内にあり、長軸の向きは南北方向で、短軸の向きは東西方向にある。中央を水路が、北から南へ流れており、九州縦貫自動車道の工事では、南方の大平山トンネルの出入り口部分に該当し、宮地区間と称される。北方の縦貫道・八代インターからの高架橋に連続するため、この宮地区間では盛土工法がとられている。近年、周辺の水田地帯では圃場整備事業が進み地形が一変したが、調査区一帯に限り、第６図に見られる様に昭和30年代の旧地形がそのまま保たれている。

調査区は、第Ⅰ章第２節で述べた様に条里遺跡としての可能性がある（隣接の中片町に「口の坪」という条里関連地名が残る。）所から、「条里遺構の検出も可能である」として発掘調査を実施した。

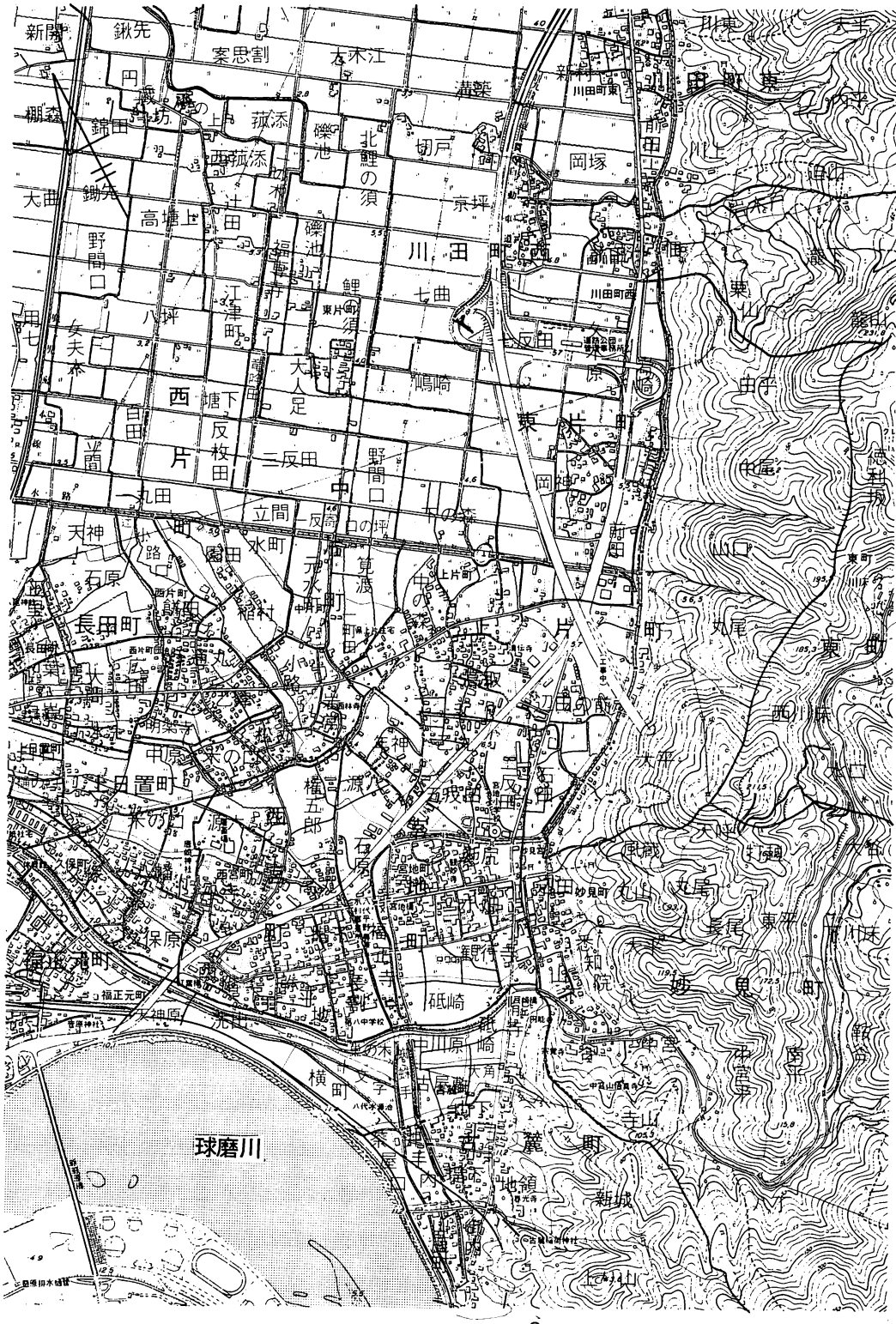
発掘調査の結果、条里遺跡とは無関係に近世（18世紀頃）の洪水層の下から、同一時代の埋没水田址を検出した。さらに一部の水田址からは、江戸時代末期から明治時代初期の瓦粘土採掘跡を検出し、埋土から数多くの近世遺物を採集した。



第５図　字辺田の前　地籍図



第６図　周辺地形図（圃場整備前）



第７図　周辺地形図及び字図

第Ⅱ章　遺跡の概要

遺跡の歴史的環境

（1）縄文時代

敷川内町の五反田貝塚から中・後期の土器が出土している。晩期の土器については、川田町西の小筑遺跡や井上町の鐘楼堂遺跡から出土した。

（2）弥生時代

日置町の白石遺跡から、黒髪式甕棺を伴う三体の人骨が出土している。

（3）古墳時代

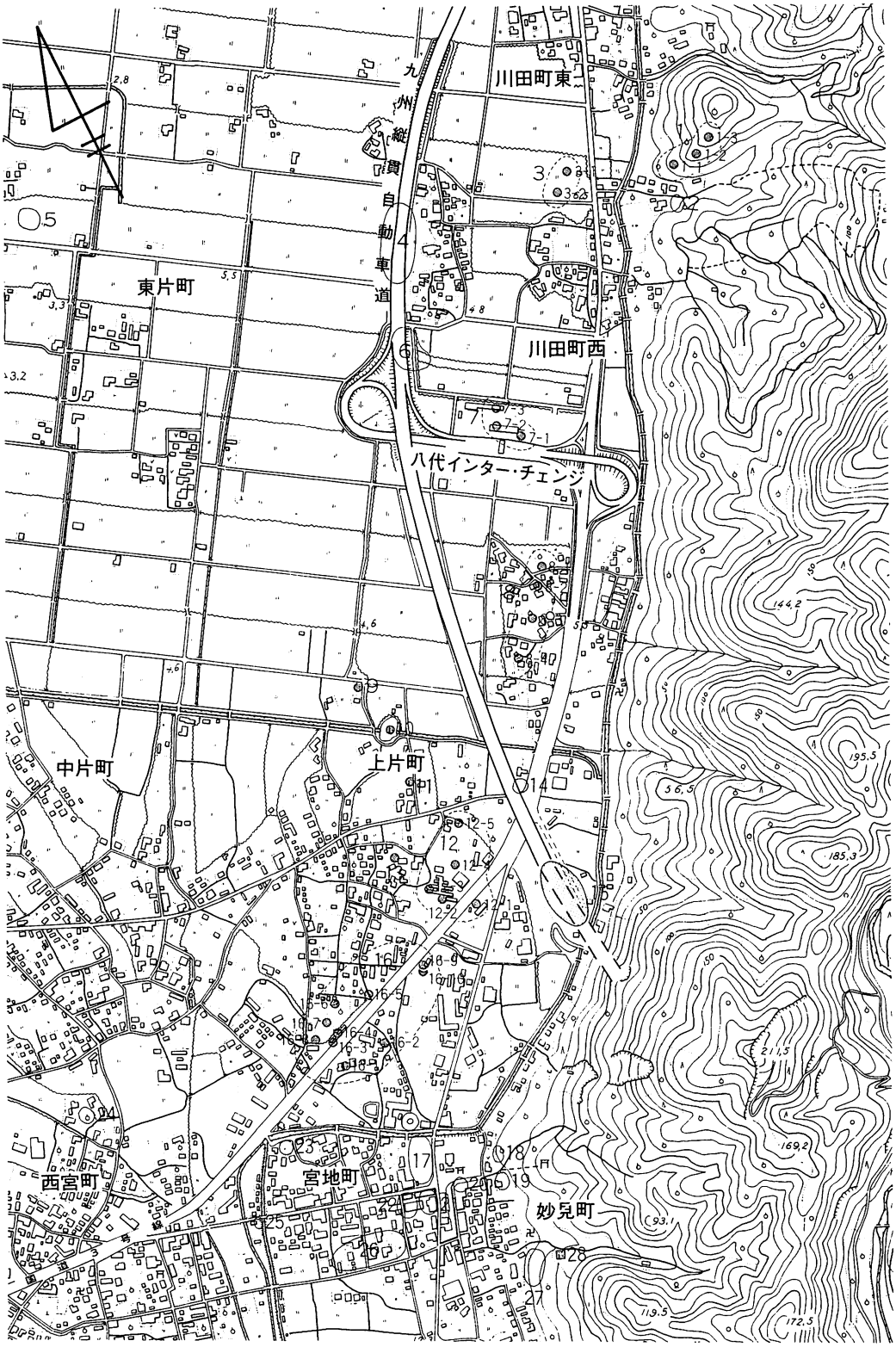
前方後円墳を中心とする古墳群と、装飾古墳群との二つに分けられるが、前方後円墳をもつ古墳群域は、更に細分される。一つは川田町で、車塚・川上・岡塚などの古墳がある。川上第1・2号墳については巨石が使われており、俗に「鬼の岩屋式石室」といわれている。

他方の分布域は上片町と東片町で、上片町・東片町・茶臼山・乙丸などの古墳がある。中心となるものは四基の前方後円墳（大塚・長塚・高取上ノ山・乙丸第6号墳）で、昭和42年には大塚古墳の発掘調査が実施され、女性人物の頭部や腕・家の一部と、その他文様を描いた象形埴輪が出土した。この分布域には、天神・御経塚・茶臼山・上片町鬼の岩屋古墳第5号墳のような円墳と、上片町鬼の岩屋古墳第1・4号墳の鬼の岩屋式石室を伴ったものとがある。

装飾古墳群は主に球磨川左岸に多く、鼠蔵町の大鼠蔵山古墳群、敷川内町の五反田古墳、日奈久新田町の田ノ川内古墳群などがあげられる。

	名称	時代	備考
1	川上古墳群 (1-1) 1号墳 (1-2) 2号墳 (1-3) 3号墳	古墳 古墳 古墳	鬼の岩屋石室 鬼の岩屋石室 ――
2	東川田遺跡	弥生	散布地
3	岡塚古墳 (3-1) 1号墳 (3-2) 2号墳	古墳 古墳	(消滅) 前方後円墳
4	川田京坪遺跡	弥生～近世	墓壙
5	沖片遺跡	弥生	散布地
6	川田小築遺跡	近世	溝・土壙
7	西川田古墳群 (7-1) 1号墳 (7-2) 2号墳 (7-3) 3号墳	 古墳 古墳 古墳	 (消滅) (消滅) (消滅)
8	東片町古墳群 (8-1) 天神古墳 (8-2) 岡ノ上古墳 (8-3) むかいやぼ古墳 (8-4) 御経塚古墳	 古墳 古墳 古墳 古墳	 円墳 (消滅) ―― 円墳
9	長塚古墳	古墳	(消滅)
10	大塚古墳	古墳	前方後円墳
11	茶臼山古墳	古墳	円墳
12	上片町鬼の岩屋古墳群 (12-1) 1号墳 (12-2) 2号墳 (12-3) 3号墳 (12-4) 4号墳 (12-5) 5号墳	 古墳 古墳 古墳 古墳 古墳	 鬼の岩屋石室 ―― ―― 鬼の岩屋石室 円墳
13	高取上ノ山遺跡	古墳	前方後円墳 横穴式石室
14	方見堂遺跡	近世	包含層
15	上片町水田遺跡	近世	埋没水田址
16	乙丸古墳群 (16-1～5) 1～5号墳 (16-6) 6号墳 (16-7～10) 7～10号墳	 古墳 古墳 古墳	 前方後円墳
17	神宮寺跡	中世～近世	寺院跡
18	池尻遺跡	中世～近世	散布地
19	符山焼窯跡	近世	(消滅)
20	宮前遺跡	近世	散布地
21	院主跡	中世～近世	寺院跡
22	一乗坊跡	中世～近世	寺院跡
23	村上河内屋敷跡	近世	屋敷跡
24	源六遺跡	古墳	散布地
25	荒神塚遺跡	弥生～古墳	散布地
26	観行寺跡	中世～近世	寺院跡
27	護国山願孝寺跡	中世	寺院跡
28	御小袖塚	中世	墓地

第2表　周辺遺跡一覧表



第８図　周辺遺跡分布図

（4）歴史時代

〔古　代〕　承平年間、源順（みなもとのしたごう）が編纂した『和名類聚抄』国郡の中に「夜豆志呂」と訓を付し、「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の五郷を載せている。この内「高田郷」が、現在の八代市に比定されている。

一方、『延喜式』の駅路に「片野駅（駅馬五疋・伝馬五疋）」が見え、木下　良氏は上片町字高取・中森を駅家跡に推定している。この周辺には、興善寺町の興善廃寺跡、妙見町の護神廃寺がある。中でも興善寺廃寺跡は郡寺跡に推定されている。

清水町の洗切遺跡からは、奈良三彩をはじめ墨書須恵器が1点、ヘラ描き文字の土師器が26点程出土した。墨書文字は「王成古」と書かれ、ヘラ描文字には「宣仲」「宣」「旦仲」「四郎」「五月」「高人」「寺坏」「六寺」「寺」「王」「芦」「丁」があった。

なお、川田町の川田京坪遺跡からは、「川大」とヘラ描された土師器が出土し、その報告書では八代五郷のうちの「高田郷」に関連あるとしている。また、近くの西片町の沖片遺跡、宮地町の池尻遺跡からは須恵器の円面硯が出土し、古麓町の御内遺跡からは瑞花双鳳八稜鏡が発見された。

これらから八代平野の東部、山麓地帯（川田町・東片町・上片町・妙見町・古麓町）が古墳時代から古代にかけて政治と文化の中心地をなす事がわかる。但し、今回の調査区からはその関連性を見出す事は出来なかった。

〔中　世〕　『公卿補任』仁安二年(1167)条によれば、平　清盛が大功田として「肥後国御代郡南郷土比郷等」を賜っており、この記事に関して「御代郡」は八代郡の誤りで、「土比郷」は『妙見社縁起』から「土北郷」の事とされている。

『吾妻鏡』建武三年(1336)十二月十四日条には、源　頼朝の妹・一条能保室が知行した平家沿官領の二十ケ所のうちに「八代庄」が含まれていた旨の記述があり、平安時代の八代庄は平氏の所領であった事がわかる。八代郡は当初、八代庄をはじめとして、豊福庄・小野庄・小河郷・小隈郷などに分かれており、中世になって高田郷（芦北郡川田郷のことで、現在の川田町）が八代庄に編入されている。従って、八代庄内には高田郷・太田郷・三箇郷・道後郷・小犬郷・道前郷などを数え、今回、調査を行った上片町水田遺跡の一帯は、地理的にも太田郷に含まれていた可能性が強い。

南北朝時代に入ると、建武元年(1334)に名和義高が八代庄地頭職に補任され、翌二年に代官として一族の内河彦次郎義真が下向している。

内河義真は、古麓を南朝方の本拠地として、新たに「内河の城」（古麓の城）を築城し、建武三年(1336)に一色範氏から攻められている。正平三年(1348)十二月廿三日の五條頼元書状写には「八代城事」と見え、古麓の城がこの時期、八代城と称された事がわかる。

一方、北朝方の小弐頼尚は相良兵庫允定頼に対し、貞和三年(1347)九月十二日に「為萩原城

料所々預置地」として八代庄三ケ村郷弥松等、田地 106町2反余を預け置いている。文中に見える萩原城は、南朝方の拠点である内河の城（古麓の城）に対する北朝方の向城と考えられる。

明徳二年(1391)九月日、深堀時弘軍忠状によると、元中七年(1390)に征西将軍宮良成親王は八代の名和顕興を頼ったが、翌年に今川了俊が八代へ侵入して、宮地原、八町嶽城、久良木城などで合戦が行われ、北朝方の勝利に終っている。南北朝合一後も、名和顕忠の八代支配に変化はなかったが、寛正六年(1465)に高田郡 350町を相良為続に譲っている。

文明十四年(1482)に、名和顕忠は旧領回復を図って相良為続へ背いた。しかし、為続の反撃により同十六年(1484)に名和氏は古麓の城を追われる事になり、八代庄の大半は相良氏の支配下へ入った。その後、相良氏は明応八年(1499)まで十六年の間、八代庄を中心に豊福をも手中に収め、球磨・八代・芦北の支配を続けた。

同八年には菊池能運の攻撃により相良氏は球磨郡へ退き、名和顕忠は旧領八代を回復したが、名和氏の再支配は永正元年(1504)二月までの五年間であった。

一方、球磨郡の相良長毎は阿蘇氏や天草衆から支援を受け、文亀元年(1501)から三度の攻撃により永正元年(1504)二月に名和氏を宇土へ下城させ、再度、八代を手中に収めた。

以後、相良氏は戦国大名として八代支配体制の中で成長していった。

天正九年(1581)に至り、相良義陽は響野原で阿蘇氏一族の甲斐宗運と合戦し討死にした。これを契機に、相良氏は球磨郡へ引退し、八代は薩摩の島津氏によって支配される事となった。『上井覚兼日記』天正十三年(1585)四月廿三日条に、島津義弘を守護代とした旨の記述がある。

〔近　世〕　天正十五年(1587)六月、豊臣秀吉は佐々成政を肥後の国主に任じ、その後は肥後国衆一揆を経て、領地は加藤清正・小西行長へ分与された。

小西行長には宇土・益城・八代の三郡が与えられ、宇土城を居城とした。しかし、八代郡の「八代十三人衆、三十人衆」達は加藤清正へ合宿されており、複雑な支配体制であった。また行長は古麓城に小西美作守行重を城代とし、麦島に新たな城を築き、五層の櫓を配置した。麦島城については元和元年(1615)「一国一城令」の際にも廃城を免れ、存続することになった。しかし、元和元年三月十七日の大地震で麦島城が崩壊した為、城代の加藤右馬允正方は幕府の許可を得て、海辺の徳淵・松江に新城（八代城）を築いた。元和八年(1622)八月の事である。

寛永九年(1632)に、加藤忠広は改易となり、遺領は豊前小倉城主の細川忠利へ与えられた。八代へは忠利の父・三斎宗立（忠興）が入った。領内支配では寛永十年(1633)五月に、加藤時代の郷組制を手永制に改め、惣庄屋を任命した。三斎は正保二年(1645)に没し、同三年五月には幕府の意向で、筆頭家老の長岡（松井）佐渡守興長が八代城代となった。以後、松井氏は明治維新の廃城まで代々、同城を守った。

そして、この時期に開墾や海辺の干拓を奨励し、耕地面積を増やすことに努めている。今回、調査区から検出された埋没水田址も、この事に関連するものである。

第Ⅲ章　調 査 の 結 果

第１節　埋没水田址について

現水田層と埋没水田址の間から間層の非水田土層を検出した。層厚は検出地点によりまちまちであるが、平均して20～40㎝で、土質は小礫の多く混じるキメの荒い山砂であった。瞬時に堆積している事が明らかで、水田層における一連の粘土層とはまったく異質であった。この土壌は人吉市の七地水田遺跡で検出された埋没水田址を覆う洪水層と極めて似かよっており、両者は同一性質のものと考えられる。以下、この層を洪水層として取り扱う。

洪水層の下位からは近世遺物が数多く出土し、中世遺物の出土も見た。これらは山砂が押し流した遺物で、この事により洪水層は近世のものと判断をした。

すなわち近世の洪水土によって、一旦、調査区一帯の水田が埋没し、その後、余り時をおかずして再び現地点で水田化が計られた事が推察される。これは調査区の東縁一帯が、九州山地西端域の山裾と隣接する所であり、大雨により山腹からの山砂等が水田に流れ込み易い環境にある事も理由の一つに挙げられる。

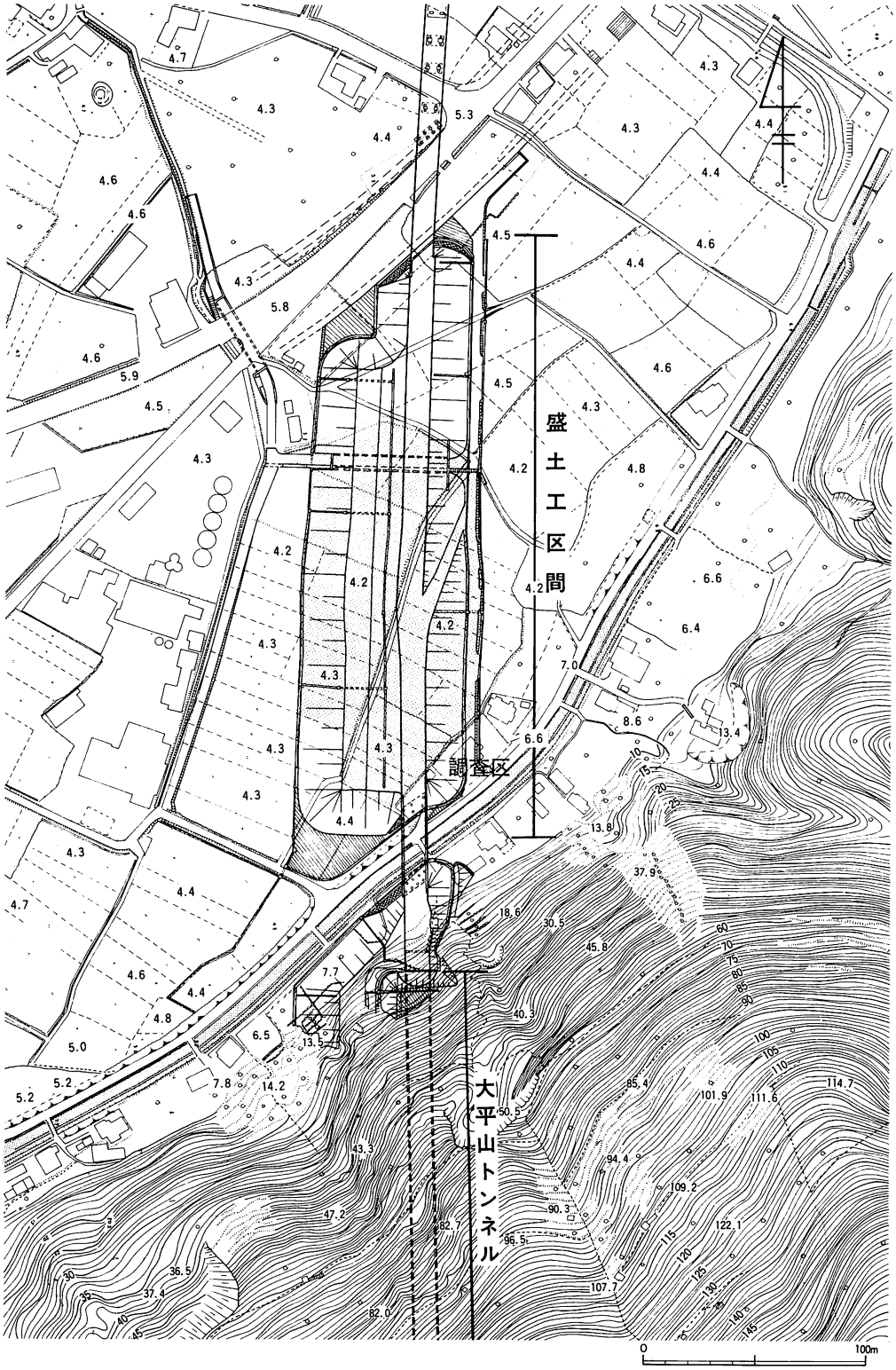
調査区内の現水田は27筆に分かれていたが、今回、検出された埋没水田の畦畔は18本で、水路は７本、水田の枚数は15枚であった。埋没水田の中位からは６枚の寛永通宝が出土した。

新旧畦畔はいずれもＮ50°Ｗで同一方位を示し、畦畔の南北方向のズレも非常に小さい事が判明した。従って、新旧水田の時期的な差異は少なく、旧水田の埋没後、洪水土の排土工事を行う事なく、ほどなくして現水田が、元の地割を戻すかのように再造成されたとの見方が出来る。

これについては、調査区一帯が今日においても周辺地形より明らかに低地で、これにより当時の埋没水田が山付きの低湿地を利用した水田であった事が伺われる。当然周辺地から土砂の流れ込みも多かった事が予想され、ある時期の洪水後に、それを契機として調査区一帯の水田を一旦廃田とし、全体的な地盤のカサ上げ工事が行われたものと思われる。もちろんその際に周辺では新たな水田の拡張工事も行われた事であろう。

検出された埋没水田址には01～15の番号をつけ、畦畔はＡ～Ｒ、水路はあ～きとし、これに加えて遺構の説明上、現畦畔をイ～ソとした。

調査の結果、埋没水田址も現水田と同様に、調査区を南北に流れる水路きによって東西に仕切られる事が判明したが、水路縁の畦畔は検出できなかった。



第９図　調査区域図

〔水田０１〕　畦畔Ａは長さ25ｍ、Ｂは35ｍを検出した。水田の西側幅は11ｍを測る。Ａは現畦畔イから北側へ１ｍズレている。Ｂは東側寄りでロから北側へ１.５ｍのズレがあり、中途で接し、西側寄りで北側へ 0.5ｍズレている。

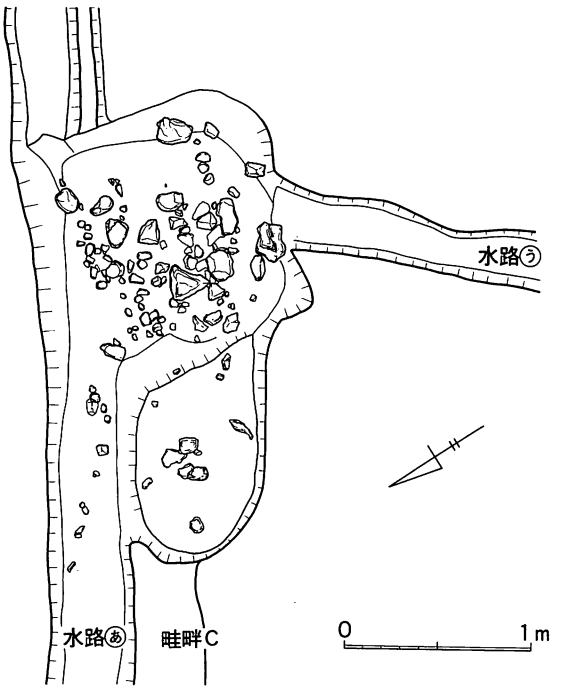
〔水田０２〕　畦畔Ｃは長さ34ｍで、北側に水路㋐が付く。水田の西側幅は18ｍを測り、Ｃは現畦畔ニより北側へ５～６ｍのズレがある。㋐については、東側部分に長円形状の水溜り箇所が検出された。東西の長さ 3.4ｍ、南北の長さ 1.6ｍで、底部は東西二段に分かれ、遺構切り込み面からの深さは西側で25㎝、東側で15㎝を測る。埋土中には石灰石の中・小礫が多量に含まれている。（第10図参照）

〔水田０３〕　畦畔Ｄは長さ32.5ｍの二重畦畔で、間から水路㋑が検出された。水田の西側幅は16.5ｍを測る。Ｄは現畦畔ホと、ほぼ重なり合っている。東側部分からは水路㋐と直交する形で水路㋒が検出されたが、畦畔は伴わなかった。

〔水田０４〕　畦畔Ｅは長さ28ｍでＤと同様に二重畦畔であり、水路㋓が検出された。水田の西側幅は10.5ｍを測る。ＥもＤと同様に現畦畔へに重なり合う。この水田址には、全面に近世瓦の粘土採掘穴が埋没していた。

〔水田０５〕　畦畔Ｆは長さ45.0ｍを測る。水田は東側で幅10ｍ、西側で幅８ｍを示し、Ｆはやや斜めの走行となる。

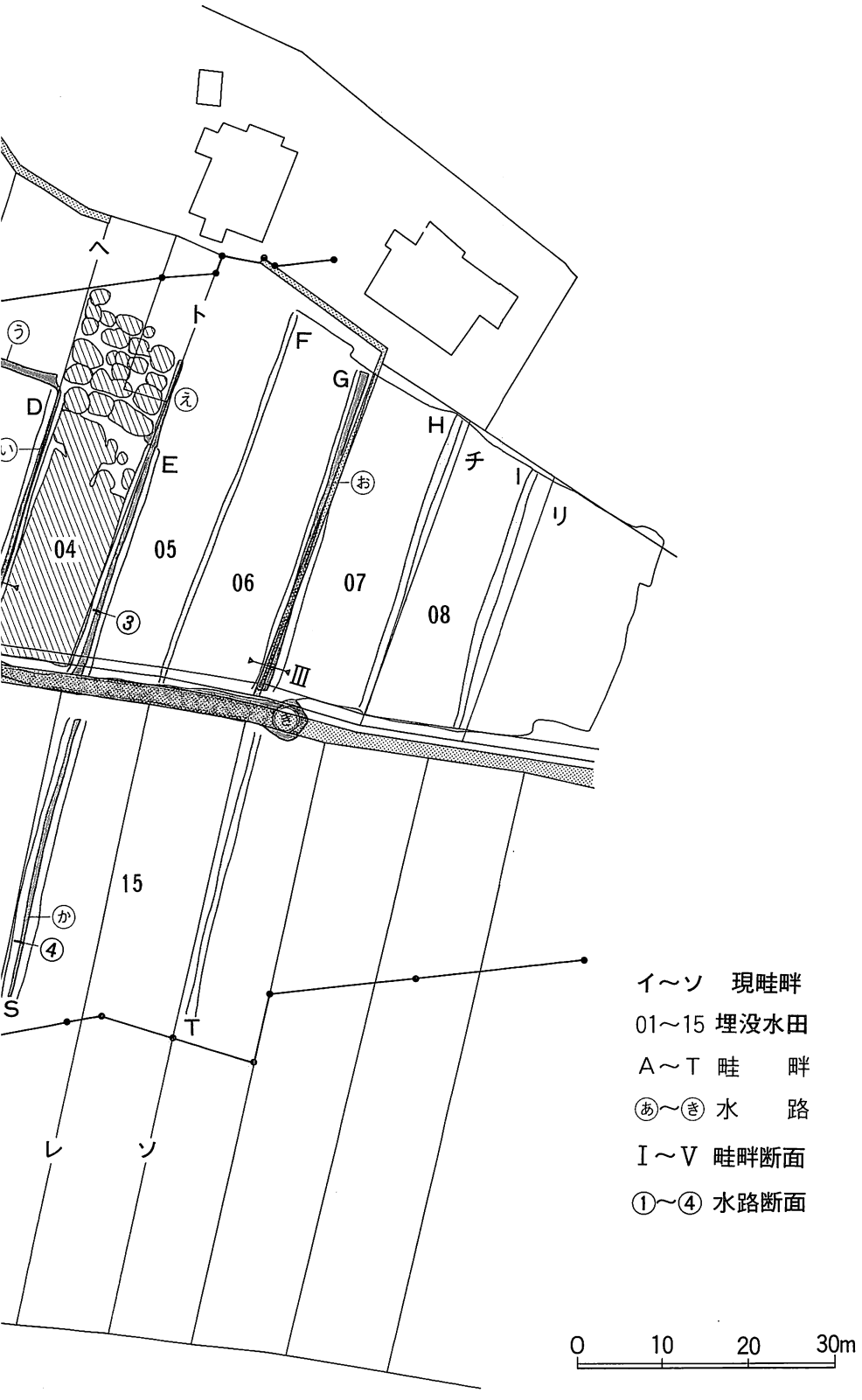
〔水田０６〕　畦畔Ｇは長さ38ｍの二重畦畔で、間から水路㋔が検出された。Ｇは現畦畔トと重なり合っている。水田の東側幅は９ｍ、西側幅は10ｍを測る。



第10図　水路㋐水溜まり箇所実測図

イ
ロ
ハ
ニ
ホ
A
B
C
②
あ
01
I
02
03
①
II
09
10
11
12
13
14
IV
K
L
M
V
J
カ
N
O
P
Q
R
U
16
V
17
W
18
ヌ
ル
ヲ
ワ
ヨ
タ

第11図　調査区



イ～ソ　現畦畔
01～15 埋没水田
A～T 畦　畔
あ～き 水　路
Ⅰ～Ⅴ 畦畔断面
①～④ 水路断面

0　10　20　30m

区全体図

〔水田０７〕　畦畔Ｈは長さ36ｍで、現畦畔チとは東側寄りで 1.5ｍ、西側寄りで 0.5ｍ程、北側へズレている。水田の幅は東西とも10.5ｍである。

〔水田０８〕　畦畔Ｉは長さ31ｍで、全体的に僅かながら弓状を呈する。現畦畔リに対し、北側へ東寄りで 2.5ｍ、西寄りで１ｍ程のズレがある。水田の幅は東西とも10ｍの長さを測る。

〔水田０９〕　畦畔ＪとＫは部分的な検出で、Ｊは長さ32ｍ、Ｋは28ｍ分を検出するに留まった。Ｊは現畦畔ヌに対し南側へ 1.5ｍ程ズレている。

〔水田１０〕　畦畔Ｌは長さ36ｍで、現畦畔ルとは東側寄りで２ｍ、西側寄りで１ｍ程、南側へズレている。水田の幅は東側で９ｍ、西側で10ｍを測る。

〔水田１１〕　畦畔Ｍは長さ30ｍで、現畦畔ヲとは南側へ 0.8～1.5 ｍのズレがある。Ｍの走行は大方、直線である。この水田からは、長さ 3.5ｍ分の西側畦畔Ｎが検出された。この事により水田の規模は、長さ37ｍ、幅10ｍ、面積 370㎡(112坪) を測る事がわかる。

〔水田１２〕　畦畔Ｏは長さ39ｍであるが、中途の４ｍ分を検出できなかった。現畦畔ワとは南側へ 0.5～0.7 ｍのズレがある。西側畦畔Ｐは長さ10ｍで、現畦畔カとほぼ重なり合っている。水田の面積は 390㎡(118坪) で、東側寄りから粘土採掘穴が検出された。

〔水田１３〕　畦畔Ｑは長さ40ｍで、現畦畔ヨとほぼ重なり合っている。西側畦畔Ｒは長さ10ｍを測り、水田の面積は 400㎡(121坪) である。

〔水田１４〕　畦畔Ｓは二重畦畔で、検出分の長さは33ｍを測る。間からは水路㋕も検出された。現畦畔タに対しては、南側へ東側寄りで 1.5ｍ、西側寄りで 0.5ｍのズレがある。水田の幅は東側で 9.5ｍ、西側で 8.5ｍを測る。

〔水田１５〕　畦畔Ｔは長さ33.5ｍで、現畦畔レより南側へ 1.0ｍ程ずれがある。現畦畔ソに対比する埋没畦畔がなく、水田の幅は東西両側とも19.5ｍを測る。

〔その他〕　水田１６・１７・１８の東側寄りの一部が検出されている。検出分の畦畔の長さはＵが６ｍ、Ｖが 7.5ｍ、Ｗが３ｍである。

〔水路について〕

埋没水田址の中から６本の水路が検出された。

（水路　㋐）　断面形は皿型で、上場幅0.77ｍ、深さ0.25ｍを測る。

（水路　㋑）　断面形は皿型で、上場幅0.75ｍ、深さ0.20ｍを測る。

（水路　㋒）　断面形はややＵ字形で、上場幅0.70ｍ、深さ0.33ｍを測る。

（水路　㋓）　断面形は船型で、上場幅0.54ｍ、深さ0.17ｍを測る。

（水路　㋔）　断面形は若干、細長の船型で、上場幅1.50cm、深さ0.52ｍを測る。

（水路　㋕）　断面形は箱型で、しっかりした掘り方である。上場幅0.95ｍ、下場幅0.30ｍ、深さ0.50ｍを測る。

第２節　埋没水田址の土層について

〔１〕　間層（洪水層）について（第13図）

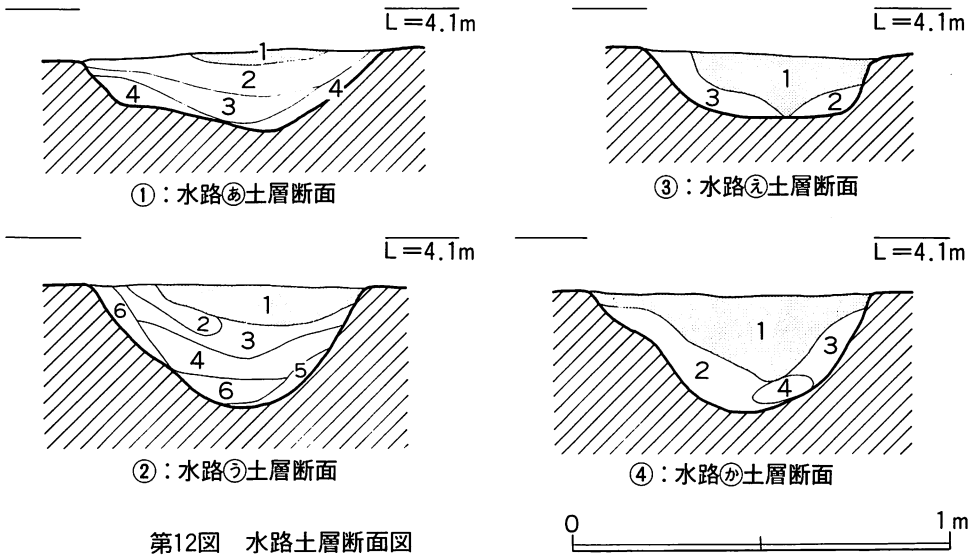
第３層の黄色山砂（薄いスクリーントーンで表示）で、粟粒大からウズラ卵大の細礫及び小礫が混入する。東側の山腹から流れ出したものと思われる。近世遺物の磁器類などを混入しており、洪水層と考えられる。この場合、近世瓦は一片たりとも出土していないので、この時期に周辺には瓦製造工場はなかったものと思われる。層厚は第13図－Ⅱ：畦畔Ｄ土層断面が最大で、40cm近くに及ぶが、他は、平均して20cm程である。

〔２〕　埋没水田址について（第13図）

第５・６層の土層で層厚20～25cmを測り、灰白色粘土層である。下位部分には若干の黄色山砂の混入が見られる。部分的には地盤（第８層土）との境に、水田床土の赤褐色鉄分土層（第７層土：濃いスクリーントーンで表示）が残っている。

〔３〕　水路について（第12図）

洪水層に比定される黄色山砂（薄いスクリーントーンで表示）が、水路を塞ぐ様に混入している事がわかる。①～④の土層断面図も、明らかに洪水が発生した事を今に伝えている。



第12図　水路土層断面図

①：水路あ土層観察表

層	土　　色
1	細礫（粟粒大からピーナツ大）
2	灰褐色粘土＞黄色山砂＋赤褐色鉄分土
3	灰褐色粘土＞黄色山砂＋赤褐色鉄分土（斑点大）
4	灰褐色粘土＞黄色山砂

②：水路う土層観察表

層	土　　色
1	黄色山砂＞細礫（粟粒大）
2	灰色粘土＞黄色山砂
3	黄色山砂＞灰色粘土＋赤褐色鉄分土
4	灰色粘土＞赤褐色鉄分土
5	灰色粘土＞黄色山砂＋赤褐色鉄分土
6	黄色山砂＞灰色粘土

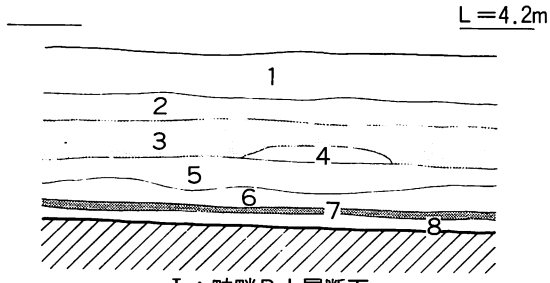
③：水路え土層観察表

層	土　　色
1	黄色山砂＞小礫（粟粒大からウズラ卵大）
2	灰色粘土（粘着性大）
3	灰色粘土＞黄色山砂＋赤褐色鉄分土

④：水路か土層観察表

層	土　　色
1	灰色粘土＞黄色山砂
2	黄色山砂＞灰色粘土
3	灰色粘土＞黄色山砂＋赤褐色鉄分土
4	灰色粘土＞赤褐色鉄分土

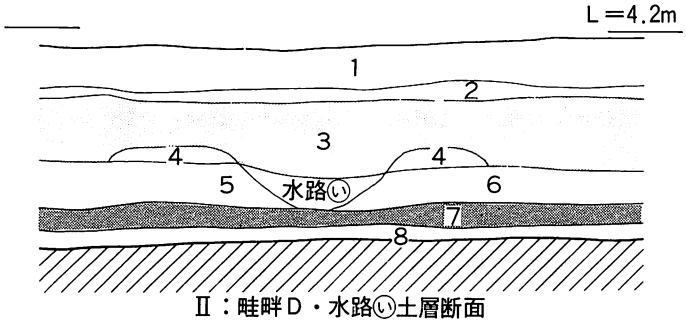
第３表　水路土層観察表



Ⅰ：畦畔Ｂ土層断面

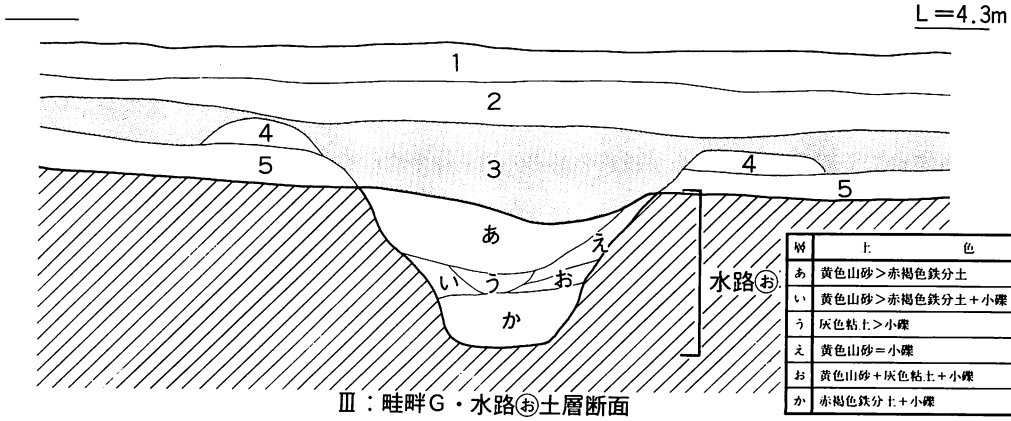
層	土　　色
1	灰黒色土＞褐色土（現水田・耕作面）
2	灰黒色土＞褐色土＋赤褐色鉄分土（現水田・下層）
3	間層（黄色山砂）
4	畦畔（埋没水田）
5	灰白色粘土＞赤褐色鉄分土（埋没水田址）
6	灰白色粘土＞黄色山砂＋赤褐色鉄分土（埋没水田址）
7	赤褐色鉄分土層（埋没水田址）
8	オレンジ色土＞灰色粘土

第4-1表　埋没水田址共通土層観察表



Ⅱ：畦畔Ｄ・水路い土層断面

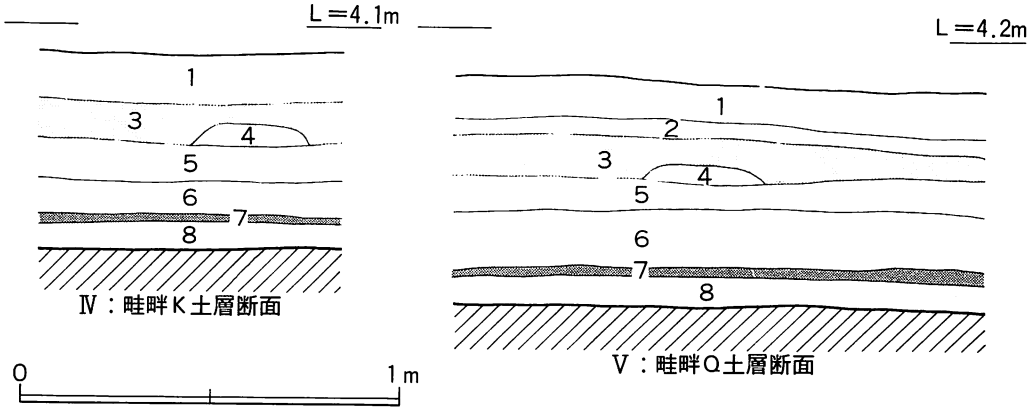
水路い土色は黄色山砂＞赤褐色鉄分土



Ⅲ：畦畔Ｇ・水路お土層断面

層	土　　色
あ	黄色山砂＞赤褐色鉄分土
い	黄色山砂＞赤褐色鉄分土＋小礫
う	灰色粘土＞小礫
え	黄色山砂＝小礫
お	黄色山砂＋灰色粘土＋小礫
か	赤褐色鉄分土＋小礫

第4-2表　水路お土層観察表



Ⅳ：畦畔Ｋ土層断面

Ⅴ：畦畔Ｑ土層断面

第13図　埋没水田址土層断面図

第３節　近世瓦の粘土採掘跡について

埋没水田址の０４と１２から、調査区における洪水層を切り込む状態で、多くの近世瓦の粘土採掘跡が検出された。但し、水田における瓦粘土の採掘の場合、耕作粘土部分に限って一時仮置きし、採掘穴を客土で塞いだ後に、再び、旧位置へ戻す方法がとられるので、遺構の時期は切り込み面より上層の耕作粘土層面となる。調査区の場合も、粘土の採掘は水田の再造成後の事である。

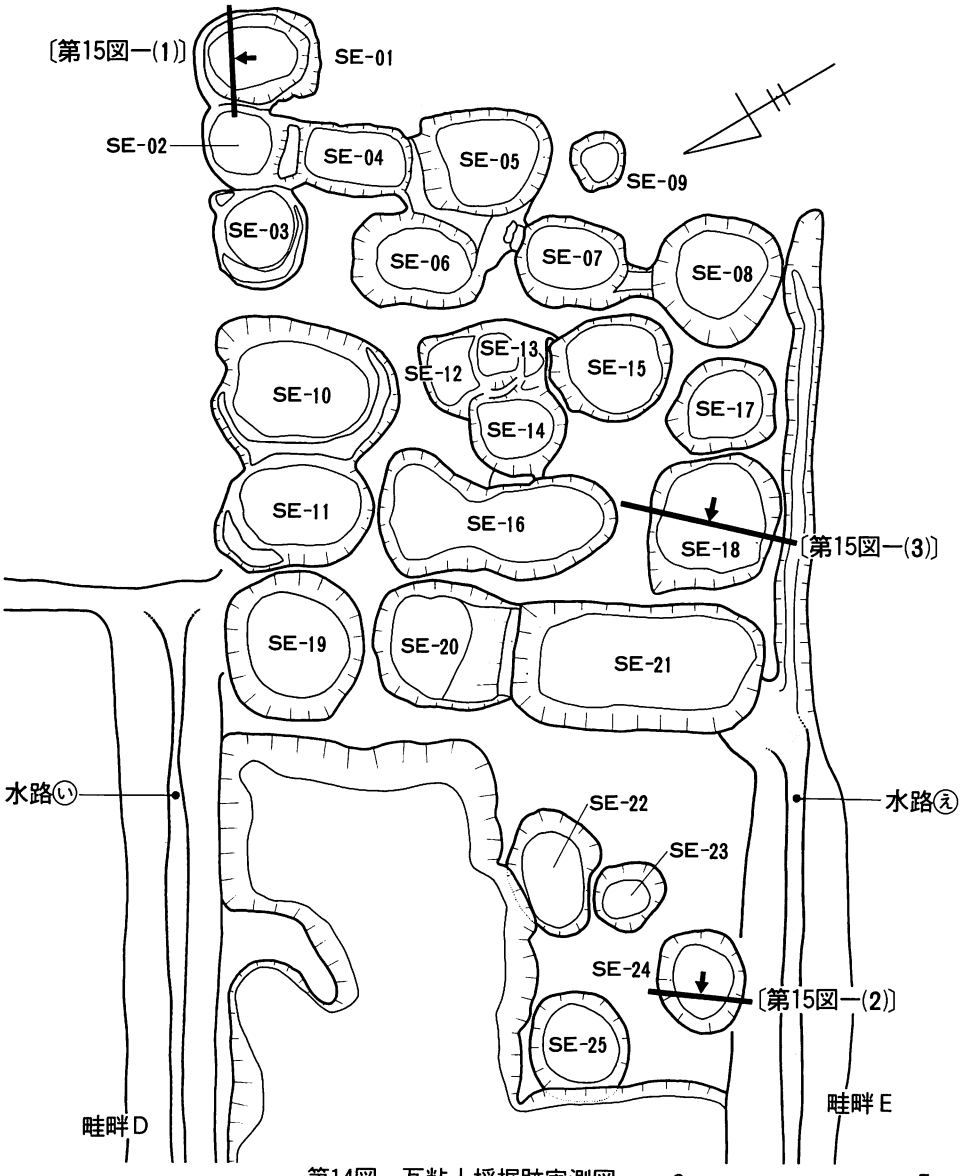
検出された粘土採掘跡は、二つのタイプに分けられる。一つは埋没水田址０４の東側寄りから検出された掘り込み穴で、平面形が円形と楕円形を呈する。その数は計25基に及び、25基の内、21基は東西の長さ15ｍの範囲内からまとまって検出された。採掘穴を塞ぐ客土には、いずれも、近世遺物の磁器類や瓦片が数多く混入していた。穴の深さは 1.5～２ｍ程で、直径１ｍの小さなものから、大きなものは 2.5×５ｍを測った。必要量の粘土を得るために、コツコツ粘土を採掘した状態が伺われる。埋め戻し用の土も隣接地から、応急的に運び込んだ感がある。

他方は、埋没水田址０４の中途より西側部分の残りと、同址１２の東側寄り側から検出された採掘址である。一区域から一括して、大量の粘土を採掘するやり方で、前者とは採掘方法が明らかに異なっている。埋め戻しの土も他の地域からの持ち込みで、地山の掘削土がそのまま使われており、遺物はまったく混入しない。採掘範囲は東西方向を軸として、埋没水田址０４が長さ28ｍで、埋没水田址１２が11ｍを測る。深さは平均して 1.5ｍである。

この二つの異なるタイプについては、前者が直接、片の川瓦製造に関係するもので、後者については出土遺物が皆無であり、採掘方法や埋め土も明らかに異なっている点から、別の瓦窯用のものと見るのが適切であろう。調査区の地盤は八代市の平野部の多くがそうである様に、起伏に富む円礫層である事がはっきりしており（道路公団の地質調査結果による）、その上部にローム粘土の堆積が見られる。但し、その層厚は調査区において非常にバラつきがあり、最大層厚を示すのは埋没水田址０４の一帯に限られる。従って、粘土採掘には最も適切な地であるわけで、採掘者の選眼の良さに驚かされる。かなり周到な事前調査を行ったものと思われる。

〔瓦場との関連について〕

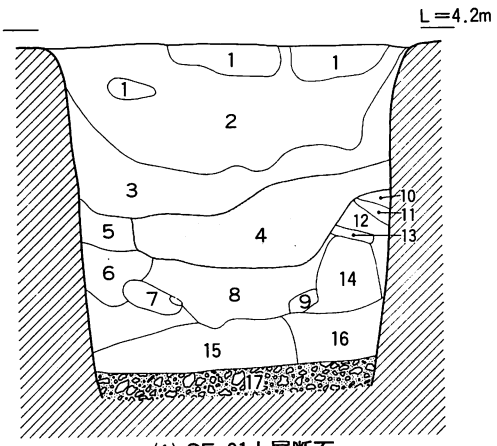
粘土の採掘穴には瓦片（まったく風化していない瓦）が層をなすもの〔写真図版５－（２）を参照〕があり、これに加えて出土した瓦と瓦製品（水盤や火舎等）の中に、明らかに焼き損じた作品と思われるもの(176・202)もいくつかあった。この事により、埋没水田址の近くに瓦製造工場の存在が確実視される。事実、中田好則氏（郷土史家）の示唆によれば、地元の言い伝えにより、明治の初期まで近くに瓦工場があった事は確かだという。



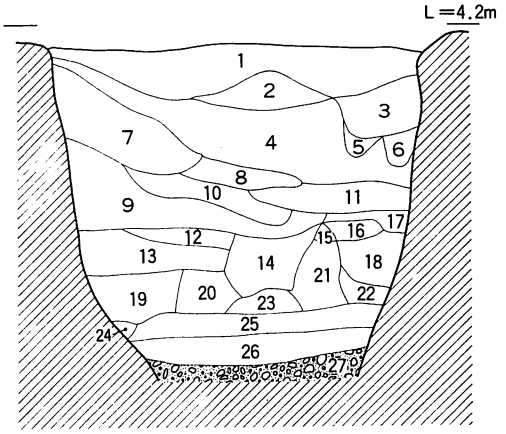
第14図　瓦粘土採掘跡実測図　0　5m

No	規模(m)	断　面	深さ (m)	備　考	No	規模(m)	断　面	深さ (m)	備　考
1	2.5×1.9	箱　型	1.5		13	1.6×1.4	幅広なU字形	1.5	
2	1.7×1.5	船　型	0.7		14	2.0×1.7	U字形	1.4	
3	2.0×1.8	箱　型	1.4	瓦層あり	15	2.4×2.1	箱　型	1.5	
4	2.3×1.4	船　型	0.75		16	4.8× 1.8～2.5	船　型	1.5	
5	2.7×2.1	台　形	1.5		17	2.25×1.9	幅広なU字形	1.4	
6	2.5×1.8	台　形	1.4		18	3.3×2.7	台　形	1.5	
7	2.3×1.8	箱　型	1.3		19	3.0×2.75	台　形	1.8	炭化物層あり
8	2.7×2.5	幅広なU字形	1.25		20	2.6×2.5	幅広なU字形	1.7	
9	1.1×1.1	U 字 形	1.2	岩礫が混入	21	5.0×2.5	船　型	1.0	
10	3.8×2.6	船　型	1.5	文久永宝出土	22	2.55×1.7	台　形	1.5	
				瓦層あり	23	1.5×1.35	矢剣に近い	1.5	
11	3.0×2.0	台　形	1.6	瓦層あり	24	2.0×1.75	幅広なU字形	1.3	
12	1.7×1.0	箱　型	1.5		25	2.0×(2.1	箱　型	1.5	

第５表　瓦粘土採掘穴計測表



(1) SE-01土層断面



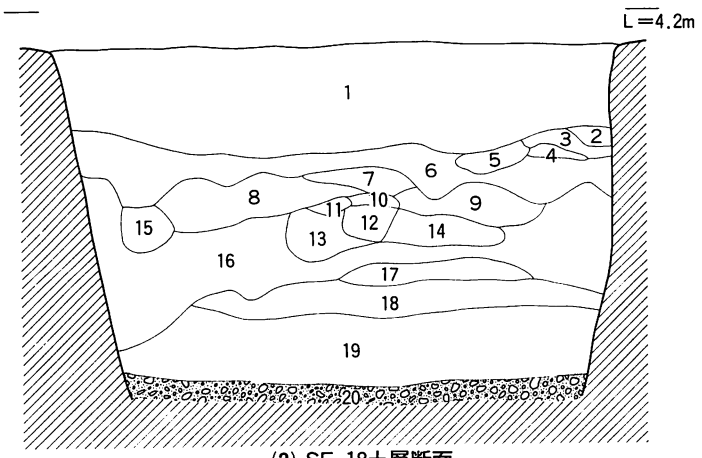
(2) SE-24土層断面

層	土　　色
1	山砂（硬土）＞小礫（小豆大）＋コゲ茶色粘土粒子
2	山砂（やや軟土）＞コゲ茶色粘土粒子
3	灰色粘土＞赤褐色鉄分土＋小礫（ウズラ卵大）
4	瓦層＞薄褐色粘土＋炭化物
5	薄褐色粘土＞炭化物
6	黄色粘土＞灰色粘土
7	黄色粘土＞薄茶色粘土＋炭化物
8	薄茶色粘土＞灰色粘土＋黄色粘土
9	山砂＞薄褐色粘土
10	黄色粘土（ブロック）＞薄褐色粘土
11	薄灰黒色粘土＞褐灰色粘土
12	薄褐色粘土
13	黄色粘土
14	コゲ茶色粘土＞薄茶色粘土
15	灰青色粘土＞赤褐色鉄分土
16	灰褐色粘土＞赤褐色鉄分土
17	基　盤（礫層）

第6-1表　ＳＥ－０１土層観察表

層	土　　色	層	土　　色
1	山砂＞灰褐色粘土	15	濃色灰オリーブ粘土＞オレンジ色粘土粒子
2	山砂＞灰褐色粘土＋オレンジ色粘土	16	灰褐色粘土＞褐灰色粘土＋細礫
3	灰褐色粘土（軟層）	17	灰白色粘土＞褐灰色粘土
4	灰褐色粘土（軟層）＞赤褐色鉄分土	18	褐灰色粘土＞オレンジ色粘土
5	灰褐色粘土（軟層）＞赤褐色鉄分土＋山砂	19	褐灰色粘土＝灰オリーブ色粘土＋茶褐色粘土粒子
6	灰褐色粘土＞茶褐色粘土	20	灰白オリーブ色粘土
7	灰褐色粘土（やや硬層）＞赤褐色鉄分土	21	濃色灰オリーブ粘土
8	灰褐色粘土（軟層）＞赤褐色鉄分土	22	灰オリーブ色粘土＞褐灰色粘土
9	赤褐色鉄分土＞灰褐色粘土	23	灰オリーブ色粘土＞細砂＋オレンジ色粘土粒子
10	赤褐色鉄分土＞灰褐色粘土	24	褐灰色粘土＞灰オリーブ色粘土
11	灰色粘土	25	灰色砂土＞灰オリーブ色粘土
12	灰色粘土（硬土）＞赤褐色鉄分土	26	灰オリーブ色粘土
13	オレンジ色粘土＞褐灰色粘土	27	基　盤（礫層）
14	灰褐色粘土＞オレンジ色粘土＋赤褐色粘土		

第6-2表　ＳＥ－２４土層観察表



(3) SE-18土層断面

層	土　　色
1	灰色粘土
2	褐灰色粘土
3	褐灰色粘土のブロック土
4	灰褐色粘土
5	灰色粘土＞山砂
6	灰色粘土＞コゲ茶色粘土粒子＋茶褐色土
7	灰色粘土＝山砂
8	茶褐色粘土＞灰色粘土＋コゲ茶色粘土粒子
9	灰白色粘土の二次堆積土
10	オリーブ色粘土＞灰色粘土
11	灰白色粘土の固いブロック土
12	オリーブ色粘土の二次堆積土
13	灰色粘土＞細礫
14	灰黒色粘土
15	オリーブ色粘土＞赤褐色砂土
16	オリーブ色粘土＞茶褐色粘土＋コゲ茶色粘土粒子
17	灰白色粘土＞オリーブ色粘土
18	オリーブ色粘土＞灰白色粘土
19	茶褐色粘土
20	砂質粘土

第6-3表　ＳＥ－１８土層観察表

0　　1m

第15図　瓦粘土採掘穴土層断面図

第Ⅳ章　出　土　遺　物

第１節　洪水層及び埋没水田址からの出土遺物

現水田と埋没水田址の境をなす洪水層の下位部分から、数多くの遺物（近世と中世遺物）が流れ込みの状態で出土した。なお、一部については埋没水田址の上位層部分を切り込んだ所もあり、当然出土遺物の混入が考えられるが、調査状況からしてその数は極めて少量と考えられる。その為、ここでは両層のものを区別せず、一括して取り扱った。

〔中世遺物〕

１と４は中国産の白磁である。１の体部は直線的に伸びて、口縁部はやや外弯する。釉色は灰白色で光沢がある。４は明の白磁で、薄壁の体部は口縁部で外弯する。

２・３・５～８は青磁で、２・３・５は口縁部、６は体部、７～８は底部が残存する。大方、碗の一部と思われるが、８は皿であろう。釉色はいずれも、くすんだ感じで、２が灰白緑色、３が青白緑色、５が緑白色、６が緑灰色、７が緑青白色、８がオリーブ灰色である。唯一、８は光沢がある。形態については２と３の口縁部が、やや外弯する。その度合は、比較して２の方が著しい。器面の文様は、６の器面に剣先蓮弁の沈線が走る。８は非常に上質で、復元底径5.2cm、高台高７～８mmを測る。

９は陶器製のおろし皿で、底部が残存する。内底面にヘラ状工具で掻かれた条線があり、淡いオリーブ色の釉がかかっている。外底面は平底で、糸切り離しである。

10は古瀬戸の体部で、外器面にオリーブ色の釉がまだらにかかる。

11～14は瓦質の擂鉢である。13のみが体部中途より口縁部にかけて残存しており、他は体部の一部分が残る。条線の一単位は11が５本、12と14が６本、13が４本を数える。11と13については体部が厚さ 9.5mm～1.0 cmで、比較的、やや薄壁である。さらに11の外器面には、随所に縦方向のクシ目が見られる。12と14の焼成は、やや甘い。

15～28は須恵器である。15～17・23～25は体部の一部で、内器面に同心円の叩きが見られる。外器面については、ローリングの激しい25を除いて格子目の叩きが残る。体部は17が厚さ 1.0～1.3 cmを測り、他と比較して最も質量感がある。

18は体部が厚さ６～７mm程で薄壁である。外器面は丁寧なナデが施されており、他と異なる。19は口縁部の残存で、口唇部が扁平に近く、幅９mmを測る。内器面には極めて丁寧な横ナデが施されている。20と28は蓋の一部である。20は内外器面に横ナデが施されている。28は復元口径12.6cmを測り、内外器面ともナデられている。焼成は、やや甘い。21は体部の上位部分が残存する。体部は厚さ 1.2cmで、やや肉太である。外器面にオリーブ灰色系の自然釉がかかる。

22は体部の一部で、外器面に突帯が付く。26は底部で、高台は貼り付けである。畳付きは若干、丸味を帯びる。復元底径 7.4cmを測る。27は小壺の頸部で、内器面については中途まで丁寧な横ナデ、中途より下位にかけて横方向の刷け目、外器面には横ナデ及び格子目の叩きが残る。

29～31は雑器で、29・30は口縁部、31は底部の残存である。29は器面がザラつき、色調は白灰色である。内器面の上位は強い横ナデにより、幅 1.6cmの窪みが生じている。30は体部の上位が「く」の字に大きく外弯する。白灰色の釉が全面に施釉されているが、釉に艶がなく、全、体的にくすんだ感じである。31は底部の残存で、内底面に乳褐色の釉が施釉されている。焼成は甘い。32は土師器で、底部は中央部寄りで肥厚し、復元底径 4.0cmを計る。外底面には糸切り痕を観察出来ないが、ローリングによる影響も考える必要がある。

33～42は瓦質土器である。33・34・37・39は口縁部を含む体部上位の残存である。33は内外器面とも横・斜め方向のナデで、色調は灰白色である。焼成はやや甘い。34は口縁部がやや直口となる。37は体部が内弯気味に伸びて漸次、肥厚しながら口縁部へ至る。体部の厚さは下位で 5.5mm、口縁部で 1.6cmを測る。外器面に六角形の文様が二重に彫られ、内側部分には花弁文様がある。

35・36・38・40～42は外器面に突帯が付く。この内35・38・40は火舎で、36・42は土製羽釜の可能性がある。41については器種不明。35は色調が灰白黒色で、焼成は堅緻である。36は内器面に横方向の糸痕を残す。色調は灰色～灰茶色である。38は口唇部の張り出しと突帯の間に花印のスタンプが押されている。色調は灰褐色～灰黒褐色である。口唇部は断面三角形状に外側へ張り出す。40は灰色～灰褐色の色調である。41は色調が白灰色で、焼成はやや甘い。42は口唇部が斜めに削り取られており、幅 1.7cmを測る。内外器面とも丁寧なナデが施されている。体部の厚さは 1.2～1.6 cmで質量感がある。色調は灰黒色～灰白色で、非常に堅緻な焼成である。

43は土師器である。43は体部のみの残存で、復元口径 8.4cm、器高 2.3cm、復元底径 6.6cmを測る。内外器面とも横ナデが施されている。

44は近世雑器の底部で、復元底径 5.0cmを測る。内底面に重ね焼きの痕がある。

〔歴史時代以前の遺物〕

45は弥生式土器の可能性がある。体部の厚さは 0.6～1.0 cmで、色調は灰白褐色～茶褐色である。内器面は刷け目を粗くナデ消し、外器面については縦方向の弱い刷け目が見られる。

〔近世遺物〕

46と51は磁器で、46が肥前で51は肥前系と思われる。46は口縁部を含む体部の残存で、外器面に薄いロクロ痕を残す。釉色は灰オリーブ色である。51は小坏で、全体の 1／2 弱が残存している。復元口径 6.4cm、器高 2.4cm、復元底径 2.7cmを測る。胎土は灰白色で透明な釉がか

かる。

47・48・50は白磁で、48・50は肥前である。50のみ体部と底部の一部が残存している。他は、いずれも口縁部を含む体部の残りである。47は体部が薄壁で、口縁部はやや外弯し、直口である。外器面に極めて薄いロクロ痕が残る。胎土は茶白色で極めて上質である。透明釉がかかる。48は口縁部で外弯する。白黄色釉がかかっている。50は体部が中途で8㎜に肥厚し、腰折れ状態となる。復元底径は 3.4㎝を測る。白色の胎土に透明釉がかかり、外器面には褐色の貫入が走る。

49は肥前青磁で壺の頸部である。白青緑色の釉色を呈する。

52・56・57は肥前染付磁器で、いずれもやや淡い感じの呉須となっている。52は体部と底部の一部が残り、56・57は口縁部を含む体部が残る。52は内底面にごく僅かな文様が残る。高台の内外両端は、ヘラ削りされ丸味を帯びている。56の外器面には、モチーフ不明の文様が描かれており、56については、さらに口縁部の直下に2条の界線が巡る。57の外器面には草花文様が描かれている。形態に関しては、56・57とも直線的な伸びを示すが、56は口縁部で、やや外弯する。

53・54は唐津で、55は地方窯の近世陶器である。53は口縁部の細片で、54・55は底部の残存である。53は体部が薄壁で僅かに内弯する。54は復元底径 3.7㎝、高台高は僅かに3㎜である。底部は厚さ 1.1㎝で肥厚し、胎土は褐灰色である。55は復元底径 4.1㎝、高台高 0.9㎝を測る。高台の内側はシャープな削りが施されている。胎土は茶白色で精良である。

58～67は染付磁器である。大方は肥前であるが、61は地方窯で、62は中国産である。59～61は口縁部を含む体部の残存で、他は底部の一部が残る。

58・59は器面全体がくすんだ感じで、呉須も色あせている。58は復元底径 3.8㎝、高台高0.9㎝を測り、外器面に蛇の目文様が描かれ、2条の界線も巡っている。59は皿で復元口径14.4㎝を測り、内外器面に曲線文様や小葉文様が描かれている。

60は体部が大きく内弯し、口縁部は丸味を帯びて肥厚する。復元口径11.0㎝、復元胴部径11.3㎝、器高 4.5㎝、復元底径 7.7㎝を測る。やや、濃い目の呉須で、内外器面にモチーフ不明の文様が描かれている。61は極めて濃色の呉須により、外器面にモチーフ不明の文様と2条の界線が描かれている。

62と64は皿である。62は底径 3.4㎝を測り、淡い呉須で内底面に漢人画像が描かれている。釉色は白灰青色である。64は復元底径 7.8㎝を測る。外底面は多少、練れている。内器面を主に太い文様が描かれている。呉須は濃い目であるが、ややくすんだ感じがする。

63は初期の肥前で、高台は内側に傾斜しており、高さは3～5㎜程でかなり低い。内底面に青黒色の呉須で草花文様が描かれている。外器面には大きな貫入が走る。

65は復元底径 3.0㎝で、高台高は4～5㎜を測る。真っ白な胎土に透明な釉がかかり、外器

面の一部に僅かな文様が残る。呉須は、やや淡い感じである。

66は外器面に2条の界線とともに、放射状の曲線文様が描かれている。呉須は、やや淡い青色である。67は高台が高さ3～4㎜で極めて低い。内底面に二重の界線を描き、内に菊花（9枚の花弁）を配している。さらに外縁には求心状の文様が描かれている。外器面については、二重網目（鱗状の文様）が器面一杯に見られ、外底面に「福」字の極端なくずし字が入る。

68・69は小坏の肥前白磁で、底部を中心に体部の一部が残る。68は復元底径 1.9㎝で、高台は 1.5㎜と極端に低い。外器面にロクロ調整痕が残る。69は復元底径 2.6㎝を測り、外器面に幅3～4㎜の間隔で縦の稜線が下る。

70は地方窯の磁器で底部が残る。高台の高さは 1.2㎝で、やや外側へ開く。灰白色の胎土に淡いオリーブ黄灰色の釉がかかる。

71は地方窯の陶器で、底部と体部の一部が残る。復元底径 4.6㎝、高台高8㎜を測り、灰白黄色の胎土に光沢ある淡黄色の釉がかかる。

72～74は磁器の底部が残存する。72・73は地方窯で、74は肥前である。72は灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉がかかる。73は復元底径 3.5㎝を測る。胎土は灰白色で極めて精良である。淡灰オリーブ色の釉がかかり、高台の造りはシャープである。74は内野山窯産で底径 4.4㎝、高台高3㎜を測る。灰褐色の胎土に汚れた感じの透明釉がかかる。内底面に重ね焼きの痕が残る。

75は地方窯の磁器で、底部と体部の一部が残る。底部は碁笥底で、復元底径 7.2㎝を測る。外器面と高台の内側のみに施釉されており、灰白色の胎土に透明釉がかかる。器面はくすんだ感じがする。

76は地方窯の陶器で、口縁部を含む体部の一部が残る。焼成は非常に甘く、軽量陶器である。白灰色の胎土に灰白黄色の釉がかかる。

77は唐津で大皿の一部である。口縁部は丸味を帯びている。白灰色の胎土に緑青色の釉がかかる。

78～82は磁器の底部で、いずれも焼成は甘い。80・81が肥前で他は地方窯である。78は高台が直立し肉太である。高さ 1.1～1.3 ㎝を測る。白灰色の胎土にワラ釉（白灰青色）がかかる。焼成は非常に甘く、半磁器である。79は高台高9㎜を測り、白褐色の胎土に黄灰色の釉がかかる。

80は内野山窯産で、白色の胎土に鉄釉（茶褐色）がかかる。81は灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。82は復元底径 6.9㎝を測り、白色の胎土に白青色の釉がかかっている。焼成は非常に甘く、79と同様に半磁器である。体部と高台の境は、鋭くヘラ削りされている。

83～85は地方窯の陶器で、底部と体部の一部が残っている。83は灰褐色の胎土に黒褐色の釉がかかる。84は復元底径 3.8㎝を測り、高台の畳付きは幅広で扁平である。白黄色の胎土に褐

白色の釉がかかる。内底面には重ね焼きの痕が残る。85は復元底径 4.8cmを測り、灰白色の胎土に淡褐白色の釉がかかる。

86・87は肥前磁器で内野山窯産である。86は復元底径 4.3cmを測り、外器面に鮮明なロクロ痕が残る。焼成は非常に甘い。胎土は白褐色で、内器面にはくすんだ感じの白色釉、外器面には青緑色の釉がかかる。87は皿で、底部と体部の一部が残存する。淡灰緑色の釉がかかるが、内底面を蛇の目状に剝いでいる。高台高は僅かに3mmで、畳付きは幅広く扁平である。

88～116 は唐津と雑器の類のものである。88～96は小型の壺及び甕の破片で、体部から口縁部に至る部分が残っている。

88・89は雑器である。88は灰色の胎土に黒褐色の釉がかかる。89は体部が薄壁で、口縁部は内側へ折り返されている。内器面に鮮明なロクロ痕が残る。

90～96は唐津である。90は擂鉢で、口縁部が折り返しにより玉縁状を呈する。色調は灰小豆色～黒小豆色である。91は二彩唐津で、口縁部の上位が大きく外弯し、口唇部は丸味を帯びる。内器面に灰褐色の釉が、ごく薄目にサーッと横方向に施釉され、その後、棒のようなものでこの釉を掻き取るかのように波状の文様が描かれている。

92は擂鉢で、内器面の上位に鮮明な沈線がある。体部の一部に黒褐色の釉がかかり、条線は8本まで確認される。93は片口で口縁部が折り返しにより、玉縁状を呈する。内外器面に光沢ある緑灰色の釉がかかっている。外器面にロクロ痕が残る。94は口縁部が大きく外弯し、口唇部は扁平に近い形態となる。全面に茶黒色の釉がかかっている。95は擂鉢で、内器面の口縁下に幅 1.1cmの浅い沈線が巡り、条線は6本まで確認される。口唇部は若干の折り返しとなり肥厚する。淡い赤色の胎土に黒褐色と褐色の釉がかかっている。96は片口で体部が内弯し、口唇部は折り返しのため肥厚する。刷け目装飾があり、灰色の胎土に黒茶緑色の釉色がかかる。

97・98は雑器である。97は香炉で、全体の1/4 程が残存している。体部は下位で腰折れ状態となり、口縁部は折り返しにより玉縁状を呈する。胎土は赤褐色で、外器面には鉄釉（茶褐色）がサーッと薄く施釉されている。98は体部の一部が残存する。灰白黄色の胎土で、内器面に鉄釉が施釉されている。

99～102 は底部が残っている。99は唐津系で復元底径 2.2cm、高台高7mmを測る。外器面にくすんだ感じの灰白色釉と、内器面に灰白青色釉がかかる。

100 ・101 は雑器である。100 は復元底径 4.1cmを測り、高台は非常にシャープな造りである。内底面には白褐色釉がかかり、重ね焼きの痕が残っている。胎土は灰褐色で精良である。101 は復元底径 3.2cmを測り、内器面に緑褐色とコバルト・ブルーの釉がかかっている。

102～104 は唐津である。102 は復元底径 5.2cmを測り、赤茶色の胎土にオリーブ色の釉がかかっている。103 は平底で、底部と体部の一部が残っている。胎土は灰白桃色で、内底面に緑灰色の釉がかかる。外器面には灰色釉がサーッと施釉されており、器面は外底面にかけてザ

ラザラしている。104 は体部から口縁部にかけての残存で、内器面に幾何学文様が彫られている。胎土は鈍い橙色で、灰黄緑色の釉がかかる。

105 は厚手の雑器で擂鉢である。底部から体部の一部が残る。体部は下位で 1.9cm、上位で 1.1cmを測る。内器面の条線は不明であるが、斜行する条線は5本まで確認され、これに弱い造りの条線が何本も交差する。胎土は赤褐色で、焼成は非常に堅緻である。

106 は唐津系で擂鉢の底部である。内底面に10条の条線が並列するが、中途で横方向に強いナデが加えられている所があり、この部分だけは帯状に白っぽく変色している。胎土は灰色で、外器面に灰黒褐色の釉がかかる。

107 は小代で、底部と体部の一部が残存する。体部の下位部分は弱い腰折れとなる。胎土は灰白色で釉色は黄色であるが、発色は極めて悪い。

108～110 は雑器である。108 の高台はシャープな造りである。胎土は灰色で、外器面から高台内部にかけて明るい感じの褐色釉がかかる。内器面は透明な釉の上に淡い緑褐色の釉が、同心円状に施されている。

109 は内器面に格子目の叩きが残る。胎土は鈍い橙色で、茶褐色と灰黒色の釉がかかる。110 は内器面に、小棒の先端部で叩いた様な痕が残っている。赤褐色の胎土に黒色味を帯びた小豆色の釉がかかる。

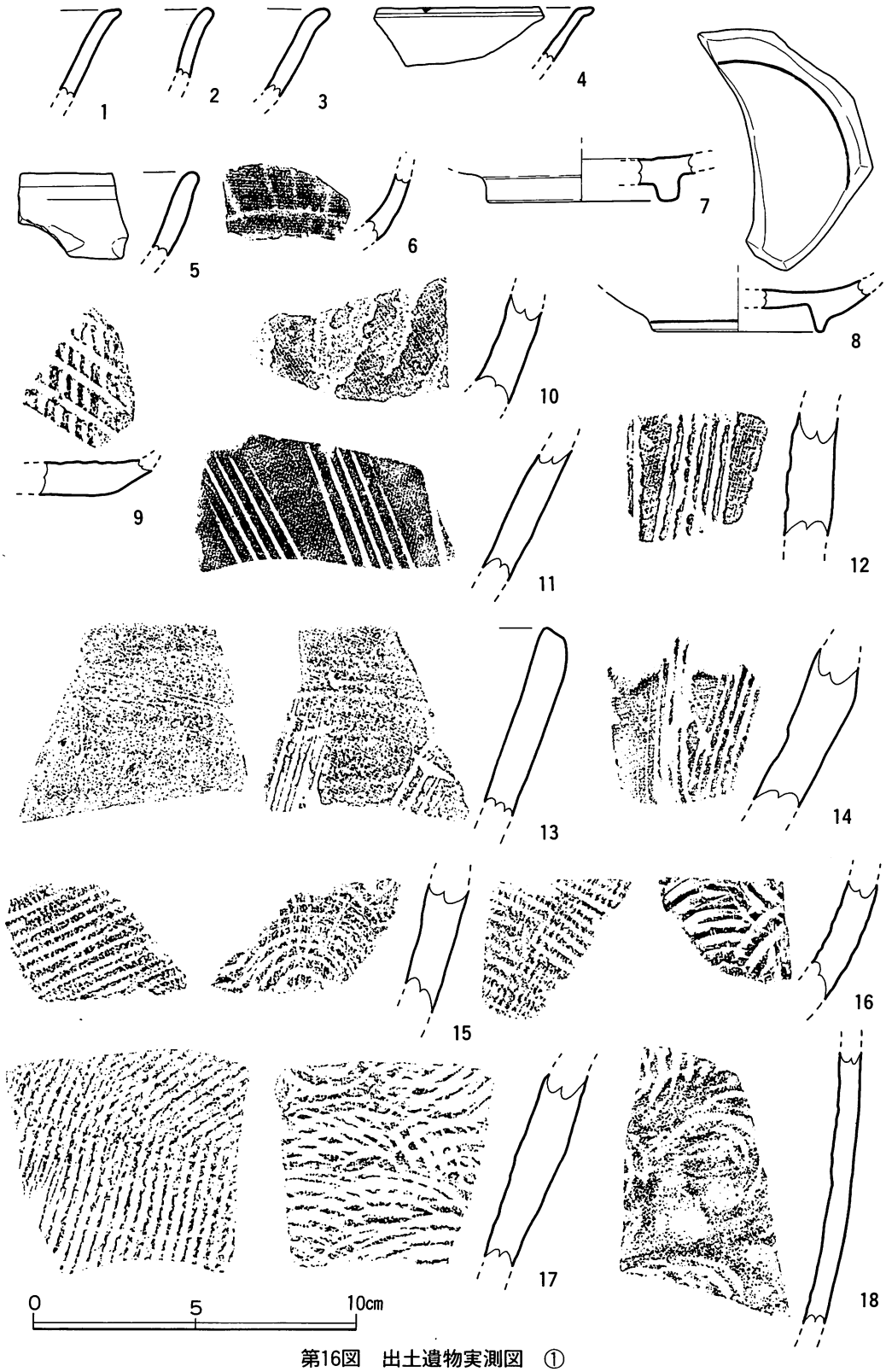
111・ 112・ 114は擂鉢である。111 は唐津の擂鉢で、内器面に条線が鋭く掻かれている。条線の一単位は5本で、色調は小豆色である。112 は雑器の擂鉢で、内器面に条線が8本まで認められる。薄桃色と灰黒色の色調を呈する。114 は雑器の擂鉢で内器面に、1㎜幅の条線が均一に掻かれており、条線は14本まで認められる。胎土は小豆色で、灰青色と灰白青色の釉がかかる。

113 は雑器である。胎土が白小豆色で、色調は灰白色と灰色である。焼成は非常に堅緻で質量感がある。

115と116 は土師系土器である。115 は全体の1/4 程が残っており、復元口径15.0cm、器高 2.4cm、復元底径13.0cmを測る。内器面の色調は淡赤褐色で、外器面は黒色に変色している。底面はヒビ割れてザラつく。116 は円盤状製品と思われる。内外底面に鮮明な指頭圧痕が残る。色調は褐白色で焼成は非常に堅緻である。

〔その他の遺物〕

117 は弥生式土器の可能性がある。内外器面に刷け目が残る。焼成は堅緻である。



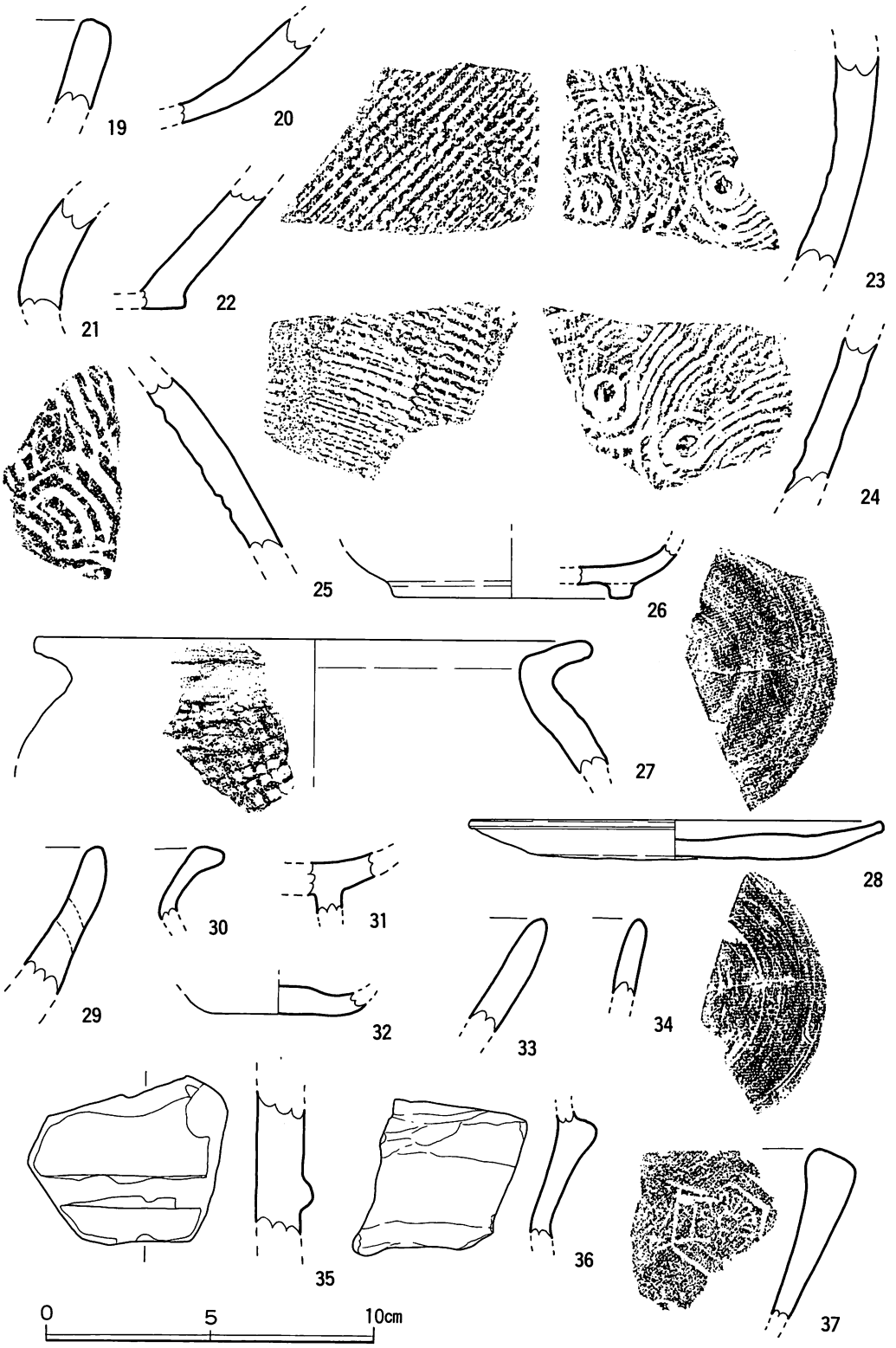
第16図　出土遺物実測図　①

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
1	中世白磁 （中国産） 12C～13C	（体　部）直線的に伸び、均一の厚で口縁部に至る。 厚さ 4.5㎜。 （口縁部）やや、外弯する。 （口唇部）扁平で幅5㎜。	（調整）内器面に薄いロクロ痕。	（胎土）灰色。非常に精良。 （釉色）灰白色。光沢あり。 （施釉）全面。 （貫入）内外器面に走る。 （その他）外器面に針穴状の気泡痕が残る。
2	中世青磁 13C～14C	（体　部）均一の厚さで口縁部に至る。厚さ 4.5㎜。 （口縁部）やや、外弯する。	――――	（胎土）灰色。 （釉色）灰白緑色。 （施釉）全面。
3	中世青磁 14C末～15C	（体　部）均一の厚さで口縁部に至る。厚さ5㎜。 （口縁部）わずかに外弯する。	（調整） 内器面：丁寧なナデ。 外器面：やや、粗いナデ。器面は多少、凹凸。	（胎土）白灰色。 （釉色）青白緑色。 （施釉）全面。 （貫入）内外器面とも大きいものが走る。
4	中世白磁 （明） 15C末～16C	（体部）薄壁で厚さ2～3㎜を測り口縁部で外弯する。	――――	（胎土）白色。 （釉色）透明。 （施釉）全面。 （付着物）口唇部に2～ 3.5㎜を測る茶褐色の斑点あり。
5	中世青磁 14C末～15C	（外器面）口縁下に幅4㎜のごく浅い沈線が巡る。	――――	（胎土）白灰色。 （釉色）緑白色。 （施釉）全面。 （トチ）外器面に粘土塊りが付着。
6	中世青磁	（体部）内弯する。 厚さ5～6㎜。	（文様） 外器面：剣先蓮弁（横・斜め方向の沈線）。	（胎土）灰白色。 （釉色）くすんだ感じの緑灰色。 （施釉）全面。
7	中世青磁 14C末～15C	（高台）高さ5㎜。幅6～7㎜。畳付きは内外両面からヘラ削り。 （底部）厚さ 7.5㎜。 復元底径　5.9㎝	――――	（胎土）灰白色。 （釉色）緑青白色。 （施釉）高台の外側から外底面にかけて無釉。内底面に重ね積み痕が残る。
8	中世青磁皿 （竜泉窯） 13C～14C前半	（高台）内側は直線状を呈し、幅8㎜を測る。 底部は平底。 高台高　7～8㎜ 復元底径　5.2㎝	（調整）高台の内側は強い横ナデ。	（胎土）灰白色。非常に上質。 （釉色）くすんだ感じのオリーブ色外器面はやや、光沢あり。 （施釉）高台の畳付きから内側の上位にかけて無釉。 （その他）内底面と内器面の境に、界線状を呈する釉溜まりがある。
9	中世陶器製 おろし皿	（体部）厚さ5㎜。 （底部）平底。 厚さ 1.0㎝。	（調整） 内底面：ヘラ状工具で掻かれた条線あり。 外底面：糸切り離し。	（胎土）白灰色。 （釉色）淡いオリーブ色。 （施釉）内底面に施釉。ほとんど剝落している。 （焼成）非常に堅緻。
10	古瀬戸 13C～14C	（体部）厚さ 1.1㎝。	（調整） 内器面：横ナデと、一部に縦方向の強い調整痕がみられる。	（胎土）灰白色。 （釉色）オリーブ色。 （施釉）外器面にまだらに施釉。 （貫入）外器面の施釉部分に、非常に細かなものが走る。
11	中　世 瓦質擂鉢	（体部）厚さ 9.5㎜。	（調整） 内器面：横ナデ後、条線が掻かれている。 外器面：随所に縦方向のクシ目が見られる。 （条線）一単位は5本。	（色調）灰白色。 （焼成）非常に堅緻。

第7表　出土遺物観察表　①

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
12	中世 瓦質擂鉢	(体部) 厚さ 1.4cm。	(調整) 内器面：横ナデ後、力強く条線が掻かれている。 (条線) 一単位は6本。	(色調) 内器面：灰白色。 外器面：白褐色。 (焼成) やや、甘い。
13	中世 瓦質擂鉢	(体　部) 均一の厚さで (厚さ 1.0cm) 直線的に伸びて、口縁部に至る。 (口唇部) 斜めにヘラ削りされ、幅8mmを測る。中央部は、ごく僅かに窪む。	(調整) 内器面：横ナデ。 (条線) 一単位は4本。	(色調) 内器面：灰白色。 外器面：灰色。 (焼成) 堅緻。
14	中世 瓦質擂鉢	(体部) 厚さ 1.4～1.6cm 。	(調整) 内器面：丁寧な横ナデ後、条線が掻かれている。 外器面：ナデ後、指押えが加えられている。 (条線) 一単位は6本で、掻きの度合は左側が弱く、右側が強い。	(色調) 白褐色。 (焼成) やや、甘い。
15	中世須恵器	(体部) 厚さ 1.1～1.2cm 。	(調整) 内器面：同心円の叩き。 外器面：格子目の叩き。	(色調) 内器面：白灰色。 外器面：黒灰色。
16	中世須恵器	(体部) 厚さ9mm。	(調整) 内器面：同心円の叩き。 外器面：格子目の叩き。	(色調) 内器面：灰色。 外器面：灰白色。 (焼成) 非常に堅緻。
17	中世須恵器	(体部) 厚さ 1.0～1.3cm 。	(調整) 内器面：同心円の叩き。 外器面：格子目の叩き。	(色調) 灰白色。外器面の一部は、灰黒色、及び白灰色。 (焼成) 非常に堅緻。
18	中世須恵器	(体部) 薄壁で厚さ6～7mm。僅かに内弯する。	(調整) 内器面：同心円の叩き痕。 外器面：丁寧なナデ。	(色調) 内器面：淡灰茶色。 外器面：灰黒色。
19	中世須恵器	(体　部) 厚さ 1.0～1.1cm 。 (口唇部) 扁平に近い。幅9mm。	(調整) 内器面：極めて丁寧な横ナデ。	(色調) 灰白色。
20	中世 須恵器蓋	――――	(調整) 内外器面ともロクロ使用による横ナデ。	(色調) 内器面：灰色。 外器面：灰黒色。
21	中世須恵器	(体部) 厚さ 1.2cm。	(調整) ロクロ使用による横ナデ。	(色調) 内外器面とも灰色。 (釉色) オリーブ灰色系の自然釉が外器面にかかる。
22	中世須恵器	(体部) 厚さ5mmで外器面に突帯が付く。	(調整) 内器面：粗いナデ。 外器面：横ナデ。 外底端：張り出すが一旦、ナデられている。	(色調) 灰白色。
23	中世須恵器	(体部) 厚さ 1.0～1.2cm 。 やや、内弯する。	(調整) 内器面：同心円の叩き。 外器面：格子目の叩き。	(色調) 内器面：白色。 外器面：灰黒色。
24	中世須恵器	(体部) 厚さは 9.5mm。	(調整) 内器面：同心円の叩き。 外器面：格子目の叩き。但し、叩きの強さに差異があり、一部の器面に段差がついている。	(色調) 内器面：白灰色。 外器面：灰白色。 (焼成) 極めて堅緻。
25	中世須恵器	(体部) 肉太で厚さ 1.0cm。	(調整) 内器面：同心円状の叩き痕。	(色調) 灰白黒色。

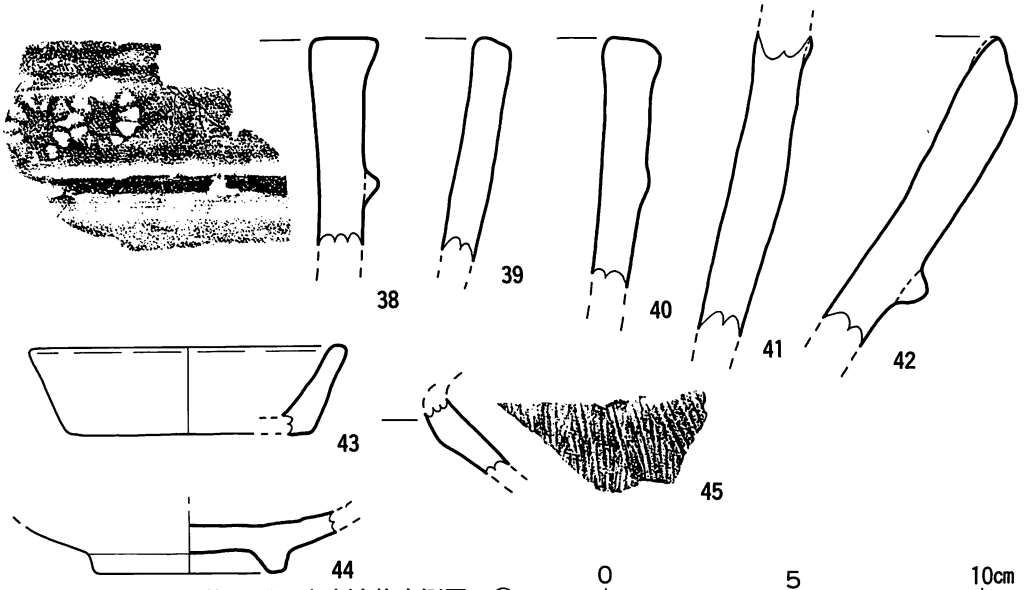
第8表　出土遺物観察表　②



第17図　出土遺物実測図　②

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
26	中世須恵器	(高台) 高さ 4.5㎜。 貼り付けである。畳付きは若干、丸味を帯びる。幅7㎜。 復元底径　7.4㎝	(調整) 横ナデ。	(色調) 灰白色。
27	中　世 須恵器小壺	(頸部) 「く」の字に外弯する。 厚さ6㎜。 (体部) 厚さ 1.0㎝。 復元口径　16.9㎝	(調整) 内器面：中途まで丁寧な横ナデ。 中途より下位にかけて横方向の刷け目。 外器面：横ナデ及び格子目の叩き	(色調) 灰白色。
28	中　世 須恵器蓋	(体部) 端部寄りで、やや肥厚。 厚さ8㎜。 中心部の厚さ5㎜。 器高　1.2㎝ 復元口径　12.6㎝	(調整) 内外器面ともロクロ使用によるナデ。	(色調) 白灰色。一部で灰小豆色。 (焼成) やや、甘い。
29	中世雑器	(体部) 肉太で最大幅1.3㎝を測る。	(調整) 内外器面とも横ナデ。 内器面：上位は強い横ナデにより幅 1.6㎝の窪みが生じている。	(胎土) 白灰色。 (器面) ザラつく。
30	中世雑器	(体　部) 大きく「く」の字に外弯する。厚さ 4.5㎜。 (口縁部) 厚さ5～7㎜。 (口唇部) 9㎜幅で扁平。	――	(胎土) 汚れた感じの褐灰色。 (釉色) 白灰色。釉に艶がなく、全体的にくすんだ感じ。 (施釉) 全面。外器面の口縁部下は施釉が厚く、釉がヒビ割れている。
31	中世雑器	高台と外器面の境は、沈線状に窪む。	(調整) ローリングが激しく不明。	(胎土) 白褐色。 (釉色) 乳褐色。 (施釉) 内底面。 (焼成) 甘い。
32	中世土師器	(底部) 中央部寄りで肥厚。 厚さ 8.5㎜。 復元底径　4.0㎝	(調整) ローリングにより不明。 外底面：糸切り痕を観察出来ず。	(色調) 鈍い橙色。
33	中　世 瓦質土器	(体部) 厚さ9㎜。	(調整) 内外器面とも横・斜め方向のナデ。	(色調) 灰白色。 (焼成) やや、甘い。
34	中　世 瓦質土器	(体　部) 厚さ 6.5㎜。 (口縁部) やや、直口。	(調整) ローリングにより不明。	(色調) 白灰色。
35	中　世 瓦質火舎	(体部) 肉太で厚さ 1.9～2.0㎝ 。 幅 1.0㎝、高さ 3.5㎜の突帯がつく。	(調整) 内外器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。	(色調) 灰白黒色。 (焼成) 堅緻。
36	中　世 瓦質土器 (羽　釜)	(体部) 外器面に突帯が付く。	(調整) 内器面：横方向の糸痕。	(色調) 内器面：灰色。 外器面：灰茶色。
37	中　世 瓦質土器	(体　部) 内弯気味に伸びて口縁部へ至る。下位より口縁部にかけて、大きく肥厚する。厚さは下位で 5.5㎜、口縁部は 1.6㎝。 (口唇部) ヘラ削りにより扁平。 幅 1.2㎝。さらに外端部は3㎜幅で、ヘラ削りされている。	(調整) 横ナデ。 (文様) ほとんど消えかかっているが、外器面に六角形の文様が二重に彫られている。一辺の長さは外側が 1.9㎝、内側が 1.3㎝。さらに、内側に花弁文様あり。	(色調) 内器面：灰色。 外器面：灰白色。

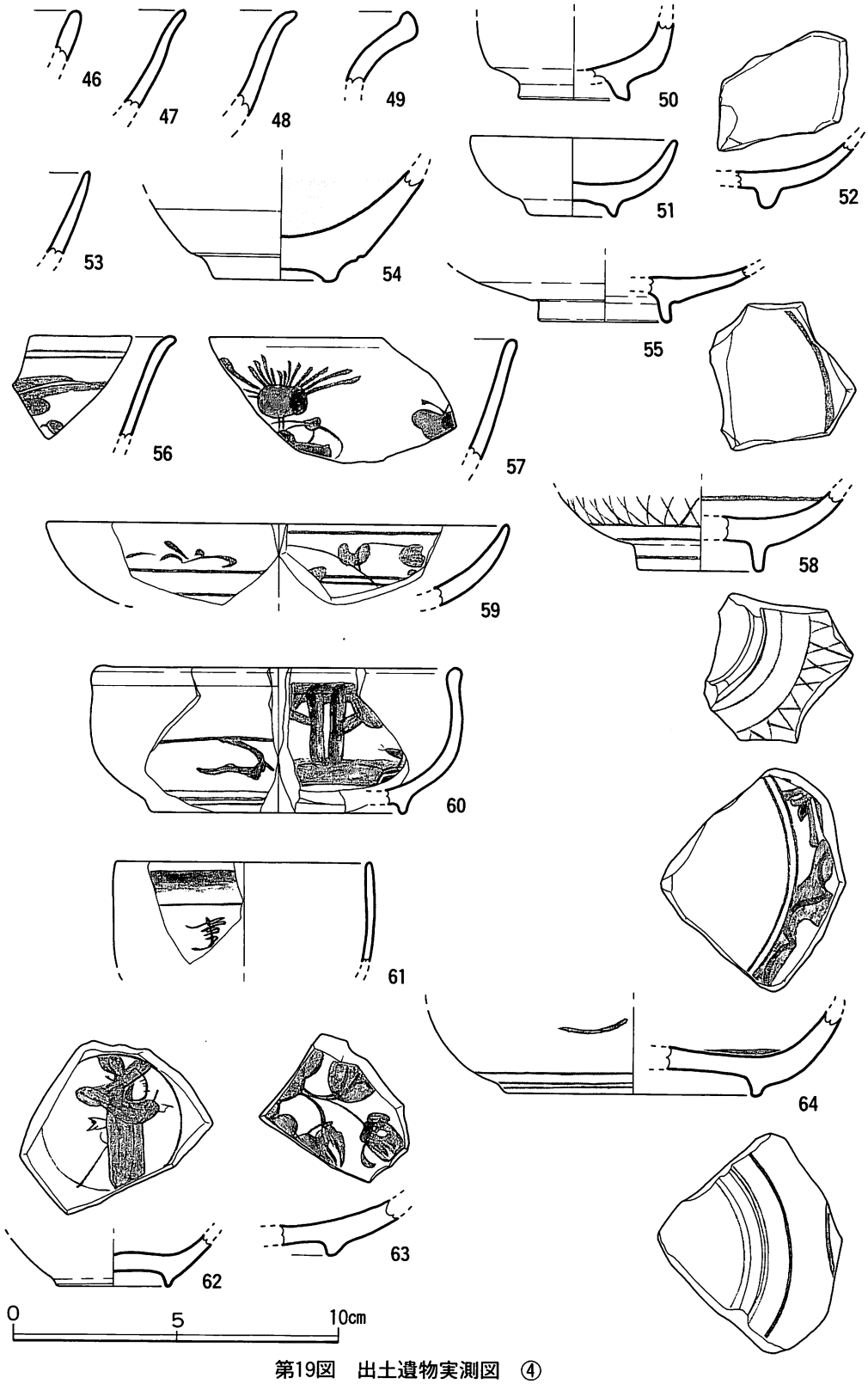
第9表　出土遺物観察表　③



第18図　出土遺物実測図　③

	器　種	形　態　の　特　徴	手法・調整・文様	備　考
38	中　世 瓦質火舎	(体　部) 直立気味に伸びて口縁部に至る。 (口唇部) 外側へ断面三角形状に張り出し、幅 1.4cmを測る。 (外器面) 口唇部端より 3.5cm下位に突帯が巡る。	(調整) ローリングが激しく不明。器面はザラザラ。 (文様) 口唇部の張り出しと突帯の間に花印のスタンプがある。スタンプの仕方は雑で、2つが部分的に重なり合っている。	(胎土) 鈍い橙色。 (色調) 内器面：灰褐色。 外器面：灰黒褐色。
39	中　世 瓦質土器	(体　部) 直線的に伸びる。 厚さ 9.5mm。 (口唇部) 扁平で幅 8 mm。	(調整) ローリングにより不明。	(色調) 内器面：灰白褐色。 外器面：灰褐色・黒色。 (焼成) やや、甘い。
40	中　世 瓦質火舎	(口唇部) 扁平で 1.0cm幅を測り、端部はやや外側へ張り出す。 (外器面) 口唇部端より 2.8cmの下位に突帯が巡る。	(調整) ローリングが激しく不明。	(胎土) 灰褐色。 (色調) 内器面：灰色。 外器面：灰褐色。
41	中　世 瓦質土器	(体部) 外器面に突帯が付く。 厚さ 1.1～1.4cm 。	(調整) ローリングにより不明。	(色調) 白灰色。 (焼成) やや、甘い。
42	中　世 瓦質土器 (羽　釜)	(体　部) 幅 1.1cm、高さ 5.5mmの突帯が付く。 厚さ 1.2～1.6cm 。 (口唇部) 斜めに削り取られている。幅 1.7cm。外端部は、やや角張る。土製羽釜 (?) 。	(調整) 内外器面とも丁寧なナデ。	(色調) 内器面：灰黒色。 外器面：灰白色・灰黒色。 (焼成) 非常に堅緻。 (その他) 質量感がある。
43	中　世 土師器碗	(体部) 厚さ 5 ～ 8 mm。 器高　2.3cm 復元口径 8.4cm　復元底径 6.6cm	(調整) 内外器面とも横ナデ。	(色調) くすんだ感じの淡橙色。
44	近　世 雑器地方窯 18C	(高台) 内側の高さ 5 ～ 6 mm。 畳付きは扁平で、幅 4 mm。 復元底径　5.0cm	(調整) 高台の内側は、ロクロ回転による強いナデで、直線的になる。	(胎土) 褐灰色。 (釉色) 灰白黄色。 (施釉) 外器面の下位から外底面にかけて無釉。内底面と内器面の境より内側へかけて、同心円状に 1.2cm幅が無釉。 (その他) 内底面に重ね焼きの痕。
45	弥生式土器 (?)	(体部) 厚さは 0.6～1.0cm 。	(調整) 内器面：刷け目を粗くナデ消している。 外器面：縦方向の刷け目。	(色調) 内器面：灰白褐色。 外器面：茶褐色。

第10表　出土遺物観察表　④



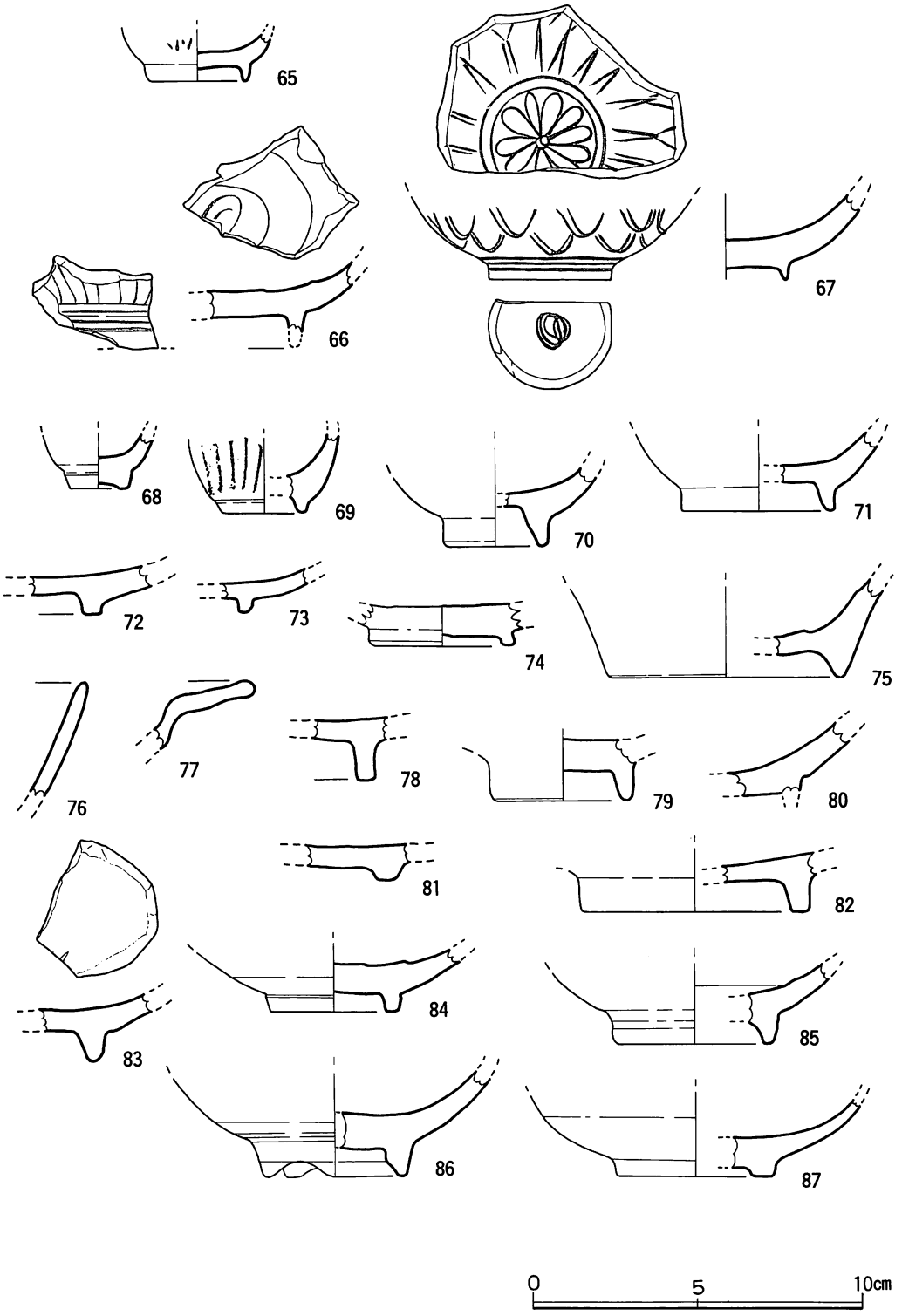
第19図　出土遺物実測図　④

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
46	肥前磁器	(口縁部) 直に伸びている。	(調整) 外器面：薄いロクロ痕。	(胎土) 灰色。 (釉色) 灰オリーブ色。 (施釉) 全面。
47	近世白磁	(体　部) 薄壁で、厚さ3～5㎜。 (口縁部) やや、外弯する。口縁直口。	(調整) 内器面：非常に丁寧なナデ。 外器面：極めて薄いロクロ痕。	(胎土) 茶白色。極めて上質。 (釉色) 透明。 (施釉) 全面。
48	肥前白磁	(体部) 内弯し、口縁部は外弯する口縁直口。	(調整) 内外器面とも丁寧なナデ。	(胎土) 白灰色。 (釉色) 白黄色。
49	肥前青磁 18C	(頸　部) 体部は大きく外弯する。 (口唇部) 内側へ屈曲している。	(調整) 内器面は強く丁寧なナデ。	(胎土) 白灰色。 (釉色) 白青緑色。 (施釉) 全面。
50	肥前白磁 19C後半 (幕　末)	(体部) 中途で厚さ8㎜に肥厚し、腰折れ状態となる。 復元底径　3.4㎝。	(調整) 内外器面とも非常に丁寧なナデ。	(胎土) 白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の畳付きは無釉。 (貫入) 外器面の全面に褐色のものが走る。
51	肥前系 染付磁器 (小　坏) 18C	(体部) 大きく内弯する。 器高　2.4㎝ 高台高　0.5㎝ 復元口径　6.4㎝ 復元底径　2.7㎝	(調整) 内外器面とも非常に丁寧なナデ。 (文様) 外器面に僅かに残る。	(胎土) 灰白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の畳付きは無釉。 (その他) 小坏。
52	肥前 染付磁器	(高台) 畳付きは1㎜幅で、軽くヘラ削りされている。内外両端はヘラ削りされ、丸味を帯びる。	(文様) 内底面：やや、淡い感じの呉須によるモチーフ不明の文様が僅かに残る。	(胎土) 乳白色。 (釉色) 白青色。 (施釉) 高台の畳付き及び内外両側の下位部分のみ無釉。
53	唐　津 17C前半	(体部) 薄壁で厚さ2～4㎜。 僅かに内弯する。	――――	(胎土) 灰白色。 (釉色) 茶黒色。 (施釉) 全面。
54	唐　津 (碗) 17C前半	(底部) 厚さ 1.1㎝。 (高台) 極めて低く、高さ3㎜。 復元底径　3.7㎝	(調整) 外底端と体部の境に、ロクロ調整による2条の稜線が巡る。	(胎土) 褐灰色。高台一帯は、やや桃色味を帯びる。 (釉色) 茶黒色。灰釉と天目釉がかかる。 (施釉) 内器面と外器面の一部。 (その他) 質量感がある。
55	近世陶器 (地方窯)	(高台) 内側はシャープな削り。 外器面との境は、ヘラ削りにより沈線となる。 畳付きは扁平で2㎜幅。 高台高　0.9㎝ 復元底径　4.1㎝	(調整) 内器面：丁寧なナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。	(胎土) 茶白色。精良。 (釉色) 内器面：茶黒色。 外器面：茶褐色。 (施釉) 外器面の中途から外底面にかけて無釉。 (焼成) 非常に堅緻。
56	肥前 染付磁器 17C後半	(体部) 直線的に伸びて、口縁部でやや、外弯する。 外器面、口縁部の直下に幅4㎜のごく浅い沈線が巡る。	(文様) やや、淡い感じの呉須となっている。 外器面、口縁部の直下に2条の界線が巡り、下位にはモチーフ不明の文様。	(胎土) 白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 全面。
57	肥前染付 磁器(碗) 19C後半	(体部) 直線的に伸びる。 (底部) 薄壁で厚さ2㎜。	(文様) やや、淡い感じの呉須となっている。 外器面：草花文様。	(胎土) 白褐色。 (釉色) 白色。 (施釉) 全面。
58	肥前 染付磁器	(高台) 内外両側はシャープな造り畳付きは扁平で幅 2.5㎜。 高台高　0.9㎝ 復元底径　3.8㎝	(文様) 呉須を使用。 内底面と内器面の境に、1条の薄い界線。 外器面：上位に蛇の目文様、下位に2条の界線。 高　台：外側に1条の界線。	(胎土) 白灰色。 (釉色) 白灰色。全体的に、くすんだ感じ。 (施釉) 高台の畳付きは無釉。 (その他) 内底面に重ね積み痕が残る。

第11表　出土遺物観察表　⑤

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
59	肥前 染付磁器 (皿)	(体部) やや、内弯。 復元口径　14.4cm	(調整) 内外器面は非常に丁寧なナデ。 (文様) 黒ずんだ呉須となっている 内器面：上位に1条、内底面との境に2条の界線があり、さらに、これら界線の間に植物の小葉及び細線の曲線文様がある。 外器面：2条の界線と曲線文様。	(胎土) 灰色。精良。 (釉色) 透明。全体的に、くすんだ感じ。 (施釉) 全面。 (焼成) 不良。
60	肥前 染付磁器 (碗) 19 C	(体　部) 大きく内弯する。厚さは下位で4㎜、中途で5㎜、口縁下で3㎜。 (口縁部) 丸味を帯びて厚さ 4.5㎜に肥厚。 器高　4.5cm 高台高　0.3cm 復元口径　11.0cm 復元胴部径　11.3cm 復元底径　7.7cm	(文様) やや、濃い目の呉須を使用。 内外器面にモチーフ不明の文様。	(胎土) 白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の内側から外底面にかけて無釉。
61	近世 染付磁器 (地方窯)	(体部) 厚さ 2.5㎜。 復元口径　7.8cm	(文様) 極めて濃色の呉須を使用。 外器面：中途にモチーフ不明の文様と2条の界線。 界線の幅は上位で7㎜、下位で1㎜。	(胎土) 白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 全面。
62	中国産 染付磁器 (皿) 16C末～17C初	(底部) 中央部寄りで肥厚。 厚さ6㎜。 高台高　5㎜ 底径　3.4cm	(文様) 淡い呉須を使用。 内底面：界線内に漢人画像。	(胎土) 白色。 (釉色) 白灰青色。 (施釉) 1㎜の厚さ。 高台の中途より下位にかけて無釉。 (その他) 外器面に針でつついた様な、ごく細かい気泡痕がある。上質な染付磁器皿。
63	初期の肥前 染付磁器 17C前半～中葉	(高台) 内側に傾斜する。 高台高　3～5㎜	(文様) 青黒色の呉須を使用。 内底面：草花文様。	(胎土) 白褐色。 (釉色) 白青色。 (施釉) 高台、外側の中位より外底面にかけて無釉。 (貫入) 外器面に大きなものが走る。
64	肥前 染付磁器 (皿)	(底部) 厚さ6～7㎜ 外底面は多少、練れており中央部から端部に向かい、やや傾斜する。 (高台) 高さは中央部で8㎜、端部で6㎜。 復元底径　7.8cm	(文様) 濃い目であるが、ややくすんだ感じの呉須を使用。 外器面の下位と高台の外側に界線が巡る。 内底面と内器面の境に薄い2条の界線。 内器面：モチーフ不明の文様。 薄目で太い文様を描き、さらに、その上から濃い目で、やや細線の文様を重ねている。	(胎土) 白色。 (釉色) 淡い灰オリーブ色。 (施釉) 全面。 (貫入) 全面に走る。特に、外底面については大きい。
65	肥前 染付磁器 (小　坏) 17C後半 ～18C初	高台高　4～5㎜ 復元底径　3.0cm	(文様) やや、淡い呉須を使用。 外器面：モチーフ不明の文様あり。	(胎土) 濃い白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の畳付きは無釉。 (その他) 内底面に少量のトチが付着。
66	近世 染付磁器 19 C	高台高　9.5㎜	(文様) やや、淡い青色呉須を使用。 内器面：曲線文様。 外器面：放射状の曲線文様。 下位と高台との境に各々1条の界線。高台の外側上位に2条の界線。	(胎土) 白色。 (釉色) 灰白色。 (施釉) 高台の畳付きと、重ね焼き痕部分のみ無釉。 (その他) 内底面に重ね焼き痕。

第12表　出土遺物観察表　⑥



第20図　出土遺物実測図　⑤

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
67	近　世 染付磁器	(体部) 厚さ6～8㎜。 (底部) 厚さ9㎜。 (高台) 低く、極小の造り。 高台高　3～4㎜	(文様) 青色の呉須を使用。 内器面：内底面に二重の界線を描き、内に菊花(9枚の花弁)を配している。 界線の外には、求心状の文様が描かれている。 外器面：二重網目 (鱗状の文様) 外底面：「福」のくずし字。	(胎土) 褐白色。 (釉色) 淡青色。 (施釉) 全面。
68	肥前白磁 (小　坏) 17C前半～中葉	(体部) 底部と外器面の境は、やや窪む。幅 2.5㎜。 (底部) 肉太で厚さ8㎜。 (高台) 高さ 1.5㎜で極端に低く、畳付きは扁平。幅 2.5㎜。 復元底径　1.9cm	(調整) 外器面にロクロ調整痕。	(胎土) 白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の畳付きから外底面にかけて無釉。 (その他) 内底面の中央部分にロクロ切り離しの凸部分が残る。
69	肥前白磁 (小　坏) 17C前半～中葉	(体部) 厚さは4㎜で、直立気味に内弯する。 (底部) 厚さ6～9㎜。 復元底径　2.6cm	(調整) 内器面：非常に丁寧なナデ。 外器面：ヘラ掘によるしのぎあり (幅3～4㎜の間隔で縦の稜線が下る。)。高台との境に弱い稜線が巡る。	(胎土) 灰白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の畳付きから外底面にかけて無釉。
70	近世磁器 (地方窯) 18C	(体部) 肥厚し、厚さ6～8㎜。 (底部) 薄壁で厚さ4㎜。 (高台) 高さ 1.2cmで、やや外側へ開く。内側部分はシャープな造り。 復元底径　3.2cm	(調整) 外器面と内底面にロクロ痕。	(胎土) 灰白色。 (釉色) 淡いオリーブ黄灰色。 (施釉) 高台の畳付きから外底面にかけて無釉。 高台の外側は一部、施釉。 (貫入) 内外器面に細かいものが走る。
71	近世陶器碗 (地方窯) 18C	高台高　8㎜ 復元底径　4.6cm	(調整) 内器面：薄いロクロ痕。	(胎土) 灰白黄色。 (釉色) 淡黄色。光沢あり。 (施釉) 高台の畳付きのみ無釉。 (貫入) 内外器面に細かいものが走る。
72	近世磁器 (地方窯) 18C	(高台) 畳付きはヘラ削りにより扁平で、幅6㎜を測る。	――――	(胎土) 灰白色。 (釉色) 灰オリーブ色。 (施釉) 高台・畳付きのみ無釉。 (トチ) 内外両底面に付着。
73	近世磁器 (地方窯) 18C	(高台) 畳付きと内外両側はシャープな造り。 復元底径　3.5cm	――――	(胎土) 灰白色。極めて精良。 (釉色) 淡灰オリーブ色。 (施釉) 高台の畳付きは無釉。 (貫入) 内外器面に細かな貫入。
74	肥前磁器 (内野山窯) 17C末 ～18C前半	(底部) 内底面は扁平。 厚さ9㎜。 (高台) 高さ3㎜。 畳付きは扁平で幅4㎜。 底径　4.4cm	(調整) 内底面：ロクロ使用の横ナデ。 外底面：中央部の調整は粗い。	(胎土) 灰褐色。 (釉色) 汚れた感じの透明釉。 (施釉) 高台の畳付きは無釉で、外側については一部、施釉。 内底面の重ね焼き痕は無釉。
75	近世磁器 (地方窯)	(体部) 高台から連続して直線的に開く。 (底部) 碁笥底を呈する。 (高台) 上位部分に黒色の横線が巡る。 高台高　7～8㎜ 復元底径　7.2cm	(調整) 内器面にロクロ痕。	(胎土) 灰白色。 (釉色) 透明であるが、くすんだ感じ。 (施釉) 外器面と高台の内側に薄く施す。
76	近世陶器 (地方窯) 18C	(体部) 均一の厚さ (厚さ5㎜) で直線的に伸びて、口縁部に至る。	(調整) 内外器面にロクロ痕。	(胎土) 白灰色。 (釉色) 灰白黄色。 (施釉) 全面。 (焼成) 非常に甘い。 (その他) 軽量陶器。

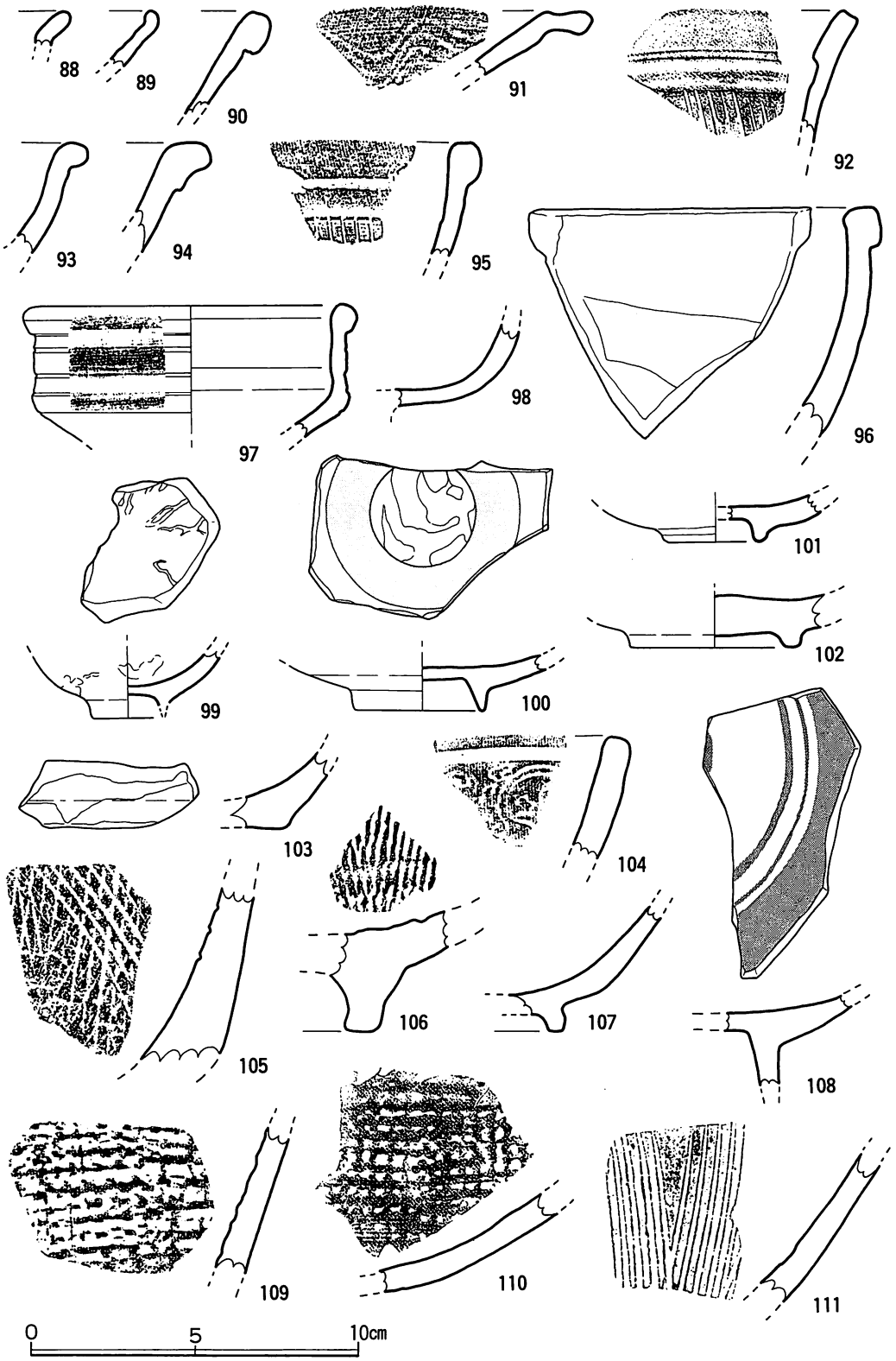
第13表　出土遺物観察表 ⑦

	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
77	唐津 （大皿）	（口縁部）丸味を帯びる。	――	（胎土）白灰色。 （釉色）緑青色。 （施釉）外器面の全面と内器面の上位部分に施釉。
78	近世磁器 （地方窯） 17C前半	（高台）直立し、肉太。高さ 1.1～1.3cm、幅 0.6cmを測る。 畳付きはヘラ削りにより扁平で、幅6mmを測る。	――	（胎土）白灰色。 （釉色）白灰青色。ワラ釉。 （施釉）全面。 （トチ）高台内側と外底面に付着。 （焼成）非常に甘い。半磁器。
79	近世磁器	（底部）厚さ 1.0cm。 （高台）高さ9mm。直立する。	――	（胎土）白褐色。 （釉色）黄灰色。 （施釉）全面。 （貫入）内外器面に細かな貫入。 （焼成）甘い。
80	肥前磁器 （内野山窯） 17C後半 ～18C前半	（体部）高台との境は 1.5cm幅で、鋭く、ヘラ削りされている。	（調整）内外器面にロクロ痕。	（胎土）白色。 （釉色）茶褐色。鉄釉。 （施釉）薄い。内器面に施釉。 （焼成）非常に甘い。
81	肥前磁器	（高台）畳付きは6mm幅でヘラ削りされている。	――	（胎土）灰白色。 （釉色）灰色。 （施釉）外底面の大半は無釉。 （焼成）甘い。
82	近世磁器 （地方窯） 17C前半	（底部）中央部寄りで薄壁。 （高台）高さ9mm。 全体の割合からすれば、肉太。畳付きは扁平で幅5mm。 復元底径　6.9cm	――	（胎土）白色。 （釉色）白青色。 （施釉）全面。 （焼成）非常に甘い。半磁器。
83	近世陶器 （地方窯） 18～19C	（高台）畳付きは 1.5mm幅で、ヘラ削りされている。 内外両端は1～2mm幅で、ヘラ削りされている。	――	（胎土）灰褐色。 （釉色）黒褐色。 （施釉）高台の内外両側部分は無釉 内器面に釉溜まりがある。
84	近世陶器 （地方窯） 18C	（体部）厚さ5mm。 （底部）厚さ9mm。 （高台）畳付きは扁平で幅5mm。 復元底径　3.8cm	（調整） 外器面：鮮明なロクロ痕。	（胎土）白黄色。 （釉色）褐白色。 （施釉）外器面の下位より、外底面にかけて無釉。 （その他）内底面に重ね焼きの痕。
85	近世陶器 （地方窯） 18C	（高台）体部との境は、幅5mmの浅い沈線となる。 復元底径　4.8cm	（調整） 内底面：鮮明なロクロ痕が残る。	（胎土）灰白色。 （釉色）淡褐白色。 （施釉）高台の畳付きから外底面にかけて無釉。
86	肥前磁器 （内野山窯） （碗） 17C末～18C	（底部）端部より、中央部へ向かって、やや尻上がりとなる。 （高台）内側は上位で直立し、中途から下位にかけて、斜めにヘラ削りされている。 復元底径　4.3cm	（調整） 外器面：鮮明なロクロ痕。 内底面：丁寧なナデ。 高　台：外側はヘラ削りの後、丁寧なナデが加えられている。	（胎土）白褐色。 （釉色）内器面：くすんだ感じの灰白色。 外器面：青緑色。 （施釉）外器面の下位より、外底面にかけて無釉。 （焼成）非常に甘い。
87	肥前磁器 （内野山窯） （皿） 17C末～18C	（体部）比較して薄壁。厚さ3mm。 （底部）肥厚し、厚さ9mm。 （高台）高さは、僅かに3mm。 畳付きは扁平で、幅6mm。	（調整） 外器面：極めて薄いロクロ痕。 内底面：蛇の目状に剝いでいる。	（胎土）白褐色。精良。 （釉色）淡灰緑色。 （施釉）内器面：施釉。但し、内底面は無釉。 外器面：高台の外側まで施釉。但し、高台は部分的な施釉に留まる。 外底面：無釉。 （焼成）非常に堅緻。

第14表　出土遺物観察表　⑧

	器　　種	形　態　の　特　徴	手　法・調　整・文　様	備　　考
88	近世雑器	(口縁部) 外弯する。 (口唇部) やや、丸味を帯びる。	――――――	(胎土) 灰色。 (釉色) 黒褐色。 (施釉) 全面。
89	近世雑器	(体　部) 薄壁で厚さ3㎜。 (口縁部) 内側へ折り返され、口唇部は丸味を帯びる。	(調整) 内器面：鮮明なロクロ痕。	(胎土) 内器面：乳褐色。 外器面：灰色。 (その他) 軽量土器。
90	唐　　津 (擂　鉢) 17C後半～18C	(体　部) 下位は薄壁。厚さ4㎜。 (口縁部) 折り返しにより、玉縁状を呈する。	(調整) 内器面：非常に丁寧なナデ。 外器面：横ナデ。	(色調) 内器面：灰小豆色。 外器面：黒小豆色。
91	二彩唐津 17C	(体　部) 漸次、肥厚しながら直線的に伸びる。 厚さは下位で5㎜、上位では6.5㎜。 (口縁部) 一旦、厚さ5.5㎜に括れる。その後、上位部分は大きく外弯し、口唇部は丸味を帯びる。	(調整) 内外器面にロクロ痕が残る。 (文様) 内器面：波状の文様が棒のようなもので、描かれている。	(胎土) 桃白色。 (釉色・施釉) 内外器面に茶褐色の自然釉。 内器面は、その上から灰褐色釉が、ごく薄目にサーッと横方向に施釉されている。
92	唐　　津 (擂　鉢) 17C	(体　部) ゆるやかに外弯しながら口縁部に至る。厚さ4.5㎝。 内器面の上位に幅8㎜、深さ2㎜の鮮明な沈線があり、上縁については2㎜幅で削り取られている。 (口唇部) 内側がやや丸味を帯び、外側は2㎜幅で弱く削り取られている。厚さ7㎜。	(調整) 内外器面は横ナデ。 (条線) 単位は不明。8本が確認される。下位から掻き上げられている。	(胎土) くすんだ感じの小豆色。 (釉色) 黒褐色。 (施釉) 内器面：口唇部から沈線までの範囲。 外器面：口唇部から1.9～2.1㎝の範囲。
93	唐　　津 (片　口) 17C～18C前半	(体　部) 内弯する。厚さ6～7㎜。 (口縁部) 大きく外弯し、折り返しにより、玉縁状を呈する。	(調整) 内器面：丁寧なナデ。 外器面：薄いロクロ痕が残る。	(胎土) 灰白色。 (釉色) 緑灰色。光沢あり。 (施釉) 全面。 (その他) 外器面に黒色で、直径1㎜程の斑点が混じる。
94	唐　津　系 18C	(体　部) 口縁部に向かい漸次、肥厚する。 (口縁部) 厚さ1.1㎝に肥厚し、大きく外弯する。 (口唇部) 端部は幅5㎜で扁平に近い。	(調整) 内外器面にロクロ痕。	(胎土) 淡赤茶色。 (釉色) 茶黒色。 (施釉) 全面。
95	唐　　津 (擂　鉢) 17C	(内器面) 口縁下に幅1.1㎝の浅い沈線が巡る。 (口唇部) 若干の折り返しとなり、肥厚する。厚さ9㎜を測る 折り返し部分から下位にかけて、幅4.5㎜の沈線が巡る。	(条線) 単位は不明。6本が確認される。	(胎土) 淡い赤色。 (釉色) 内器面：黒褐色と褐色。 外器面：黒褐色。
96	唐　　津 (片　口) 17C後半～18C	(体　部) 内弯する。 (口唇部) 折り返しとなり肥厚する。厚さ1.1㎝。折り返し部分から下位にかけて、幅3.5㎜の沈線が巡る。	(文様) 刷け目装飾あり。	(胎土) 灰色。 (釉色) 黒茶緑色。 (施釉) 口唇部の一部と、内器面の中途より下位は無釉。
97	近世雑器 (香　炉) 17C～18C前半	(体　部) 下位部分で、腰折れ状態となる。腰折れ箇所は、6㎜幅の弱い稜線を呈する。 厚さ4～6㎜。 (口縁部) 折り返しにより玉縁状を呈する。	(調整) ロクロ使用によるナデ。	(胎土) 赤褐色。 (釉色) 茶褐色。鉄釉。 (施釉) 外器面：口縁部中途より、腰折れ部分まで施釉。薄くサッーと施釉している。

第15表　出土遺物観察表　⑨



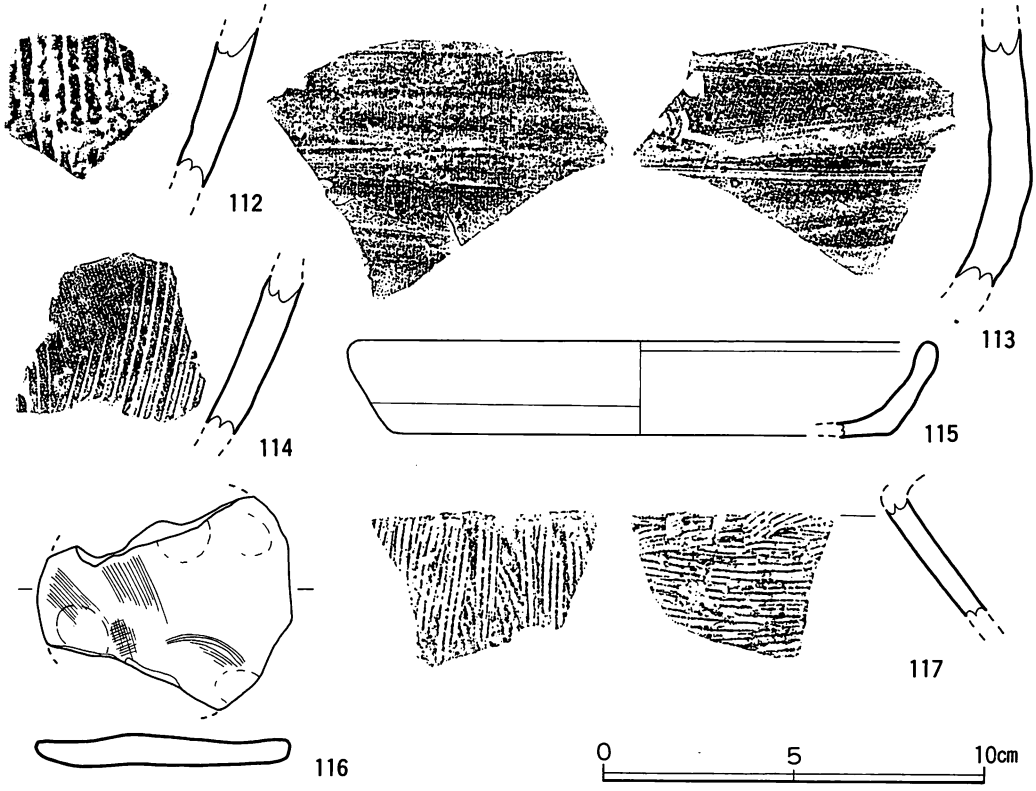
第21図　出土遺物実測図　⑥

NO	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
98	近世雑器	(体部) 内弯する。	――――	(胎土) 灰白黄色。 (釉色) 鉄釉。 (施釉) 内器面。 (外器面) 露胎で灰黄色。
99	唐津系 17C末 ～18C中葉	(体部) 比較的肉太、厚さ5㎜。 (底部) 中央部寄りで薄壁。 厚さ3㎜。 (高台) 高さ7㎜。 畳付きは内側へ1㎜幅で削り取られており、断面・鋭角三角形を呈する。 復元底径　2.2㎝。	(調整) 外器面：ロクロ痕が残る。 (文様) 内器面：モチーフ不明の文様。 刷け目装飾あり。	(胎土) 灰色味を帯びる小豆色。 (釉色) 内器面：灰白青色。やや、光沢あり。 外器面：くすんだ感じの灰白色。 (施釉) 高台の畳付きと内側は2㎜幅で無釉。 (焼成) 不良。
100	近世雑器 (地方窯) 18C	(体部) 厚さ5～7㎜。 (底部) 厚さ4㎜。 (高台) 非常にシャープな造りで、高さは内側で1.0㎝、外側で6㎜。 復元底径　4.1㎝	(調整) 外器面：粗いナデで、ザラザラしている。 内底面：丁寧なナデ。	(胎土) 灰褐色。精良。 (釉色・施釉) 内器面：厚目の白褐色釉。 外器面：一部に、極めて薄い茶色の自然釉。 (焼成) 堅緻。 (その他) 内底面に重ね焼き痕。
101	近世雑器 (地方窯) 18～19C	復元底径　3.2㎝	――――	(胎土) 灰色。 (釉色) 緑褐色～コバルト・ブルー (施釉) 外器面から高台の外側中途まで無釉。 (貫入) 内外器面に細かなものが走る。 (トチ) 高台と外器面の境に付着する。環状を呈する。
102	唐津 16C末～17C	(底部) 肥厚し、厚さ1.0～1.25㎝ 中央部は、やや凸となる。 (高台) 高さ3.5～4.5㎜。 畳付きは扁平で幅4㎜。 復元底径　5.2㎝	(調整) 内底面：ロクロ痕。	(胎土) 赤茶色。 (釉色) オリーブ色。 (施釉) 薄い。内器面に施釉。灰釉 (貫入) 内器面に細かいものが走る。
103	唐津 16C末～17C	外器面：下位に1条の弱い稜線が巡る。 外底端：肥厚する。厚さ1.3㎝。 内底面：中央部は指押えにより、僅かに窪む。 外底は黄灰色を呈し、端部はしゃげた感じとなる。このため、外端部と体部の境は窪む。幅8㎜。	(調整) 内底面の中央部は指押え。	(胎土) 灰白桃色。 (釉色・施釉) 外器面：灰色釉をサーッと薄目に施釉。 内底面：緑灰色の釉。 (その他) 外器面から外底面にかけて、器面はザラザラしている。
104	唐津 17C後半～18C	(体　部) 均一の厚さ (厚さ9㎜) (口唇部) やや、丸味を帯びる。 (内器面) 口縁部・直下に幅4㎜のごく浅い沈線が巡る。	(調整) 外器面：ロクロ痕。 (文様) 内器面：唐草文様。	(胎土) 鈍い橙色。 (釉色) 灰黄緑色。光沢あり。 (施釉) 内器面：比較的、厚目に施釉。 外器面：サッーと施釉。
105	近世雑器 (擂　鉢)	(体部) 厚さは下位で1.9㎝、上位で1.1㎝。	(調整) 比較的、丁寧な横ナデ。 (条線) 単位は不明。 斜行する条線は5本まで確認され、これに弱い造りの条線が何本も交差する。	(胎土) 赤褐色。 (焼成) 非常に堅緻。
106	唐津系 (擂　鉢) 18C	(体部) 高台の畳付きから内底面に至る厚さは3.1㎝。	(調整) 高台の内側に強い横ナデ。 (条線) 内底面に10条の条線が並列しているが、中途で横方向に強いナデが加えられている所がある。7㎜幅でこの部分だけ白っぽく変色している。	(胎土) 灰色。高台の内側は桃色化。 (釉色) 灰黒褐色。 (施釉) 高台部分を除く外器面。

第16表　出土遺物観察表 ⑩

NO	器　　種	形　態　の　特　徴	手　法・　調　整・　文　様	備　　考
107	小　　代 （碗） 18C	（体部）下位部分は弱い腰折れとなる。 （高台）畳付きは扁平。幅4㎜。	――――	（胎土）灰白色。 （釉色・施釉） 黄色。発色は極めて悪し。高台の内部を除く全面に施釉。 高台内部は黒色。
108	近世雑器	（底部）薄壁で厚さ5㎜。 （高台）シャープな造り。	――――	（胎土）灰色。 （釉色・施釉） 内器面：透明な釉が施釉され、さらに、その上から緑褐色釉が同心円状に施されている。 外器面：明るい感じの褐色釉。 （焼成）非常に堅緻。
109	近世雑器 17～19C	（体部）厚さ7～9㎜。	（調整） 内器面：格子目の叩き。 外器面：丁寧なナデ。	（胎土）鈍い橙色。 （色調）内器面：茶褐色。 外器面：灰黒色。
110	近世雑器 17～19C	（体部）厚さ7～8㎜。	（調整） 内器面：小棒の先端部で叩いた様な痕が残る。小穴の大きさはまちまちで、径1㎜から4㎜を測る。	（胎土）赤褐色。 （色調）内外器面とも黒色味を帯びた小豆色。
111	唐　　津 （擂　鉢） 17C	（体部）薄壁で厚さ8㎜。	（調整） 内器面：条線が鋭く掻かれている 外器面：ナデ。 （条線）一単位は5本。	（色調）小豆色。 （焼成）堅緻。
112	近世雑器 （擂　鉢）	（体部）厚さ 0.9～1.0cm 。	（調整） 外器面：横ナデと指押え。 （条線）8本まで認められる。	（色調）内器面：汚れた感じの乳褐色・薄桃色。 外器面：薄桃色・灰黒色。
113	近世雑器	（体部）内弯する。 厚さ 1.1cm。	（調整）内外器面はロクロ使用による横ナデ。	（胎土）白小豆色。 （色調）内器面：灰白色。 外器面：灰色。 （焼成）非常に堅緻。
114	近世雑器 （擂　鉢）	（体部）厚さ8～9㎜。	（調整） 内器面：1㎜幅の条線が均一に掻かれている。 （条線）14本まで認められる。	（胎土）小豆色。 （釉色）内器面：灰青色。 外器面：光沢ある灰白青色 一部には濃い白黄色
115	近　　世 土師系土器	（体　部）やや、内弯気味に伸びる。口縁下で厚さ4㎜に括れる。厚さ6㎜。 （口縁部）丸味を帯びて 5.5㎜の厚さに肥厚する。 （底　部）薄壁で平底。厚さ3㎜。 器高　　2.4cm 復元口径　15.0cm 復元底径　13.0cm	（調整）内外器面ともロクロ使用によるナデ。	（色調）内器面：淡赤褐色。 外器面：黒色。 （その他）外底面には、ヒビ割れ状に細かな亀裂が走り、器面はザラつく。
116	近　　世 土師系土器	（底部）円盤状製品（？）。 厚さ6～8㎜。	（調整） 内底面：ナデが加えられている。端部にも、下から上に押された指頭圧痕がある。 外底面：指頭圧痕。さらに強いナデが加えられている。	（色調）褐白色。 （焼成）非常に堅緻。
117	弥生式土器 （？）	（体部）厚さ5㎜。	（調整） 内器面：横方向の刷け目。 外器面：縦・斜め方向の強い刷け目。	（色調）内器面：褐灰色。 外器面：茶褐色。 （焼成）堅緻。

第17表　出土遺物観察表　⑪



第22図　出土遺物実測図　⑦

第２節　瓦粘土採掘跡からの出土遺物

〔中世遺物〕

118は土師器で、平底である。外底面の糸切り痕は観察出来ない。

〔近世遺物〕

119は地方窯の磁器で、灰白色の胎土に灰緑色釉がかかる。

120～122 は肥前白磁である。 120は化粧皿で、完形品である。口径 6.0cm、器高 1.7cm、底径 2.2cmを測る。外器面の全面にタコ唐草文があり、歯車の様な形状をした渦巻き線のスタンプが押されている。焼成は甘く、内器面と口唇部に白灰黄色の釉がベットリと分厚く施釉されている。

121は底部と体部の一部が残る。復元底径 6.1cmを測り、外器面から高台内面まで、高台の畳付きを除く全面に、透明釉を施釉している。胎土は白灰色である。

122は全体の 1/3弱が残る。復元口径 9.4cm、器高 4.1cm、復元底径 3.8cmを測る。胎土は

白色で、釉が完全に解けきらず、くすんだ透明釉となっている。

123は地方窯の磁器である。胎土は白灰色で、淡いオリーブ灰色と白青色の釉がかかる。

124は雑器で、体部から口縁部にかけて残存している。口縁部は外側へ大きく膨み、口唇部は扁平となる。胎土は鈍い橙色で、褐色釉がかかる。

125～144 は肥前染付磁器である。 125は、ややくすんだ感じの呉須で、外器面にモチーフ不明の文様が描かれている。釉色は灰白青色で薄く施釉されている。

126は小坏で、青色味を帯びた呉須により、外器面に草花文様が描かれている。胎土は灰白色で透明釉がかかる。内器面と内底面にロクロ痕が残り、復元口径 7.4cm、器高 4.7cm、復元底径 3.6cmを測る。

127～131 は碗で、全体の1/3 から1/2 程が残存している。 127は体部が内弯気味に直立する。外器面に、やや淡い呉須で草花文様と3条の界線が描かれている。灰色の胎土に透明釉がかかる。 128は体部が内弯するが、口縁部で僅かに外弯する。復元口径 9.0cm、器高 5.4cm、復元底径 3.6cmを測る。青黒色を強く帯びる呉須で、外器面に草花文と蝶を意識した文様が描かれている。白灰色の胎土に透明釉がかかる。 129は復元口径10.8cm、器高 5.7cm、復元底径 4.1cmを測る。やや淡い青黒色を帯びる呉須で、外器面に型紙刷りによる花文様が描かれている。胎土は灰色で透明釉がかかる。内底面には重ね焼きの痕が残る。 130は体部が内弯気味に直立し、復元口径 6.2cm、器高 5.8cm、復元底径 3.6cmを測る。やや淡い呉須で、外器面に4つの草花文様が描かれていたものと思われる。胎土は白灰色で、透明釉がかかり、外器面にはロクロ痕が残る。 131は復元口径10.4cm、器高 5.7cm、復元底径 4.3cmを測る。やや淡い青黒色の呉須で、外器面に型紙刷りによる花文様が描かれている。胎土は灰白色で透明釉がかかる。

132は全体の1/2 弱が残り、復元口径 6.7cm、器高 3.8cm、復元底径 3.2cmを測る。体部は下位で腰折れした後、直線的に伸びて口縁部に至る。屈曲部分は強い稜線となる。高台の畳付きは、ヘラ削りによりやや内側に傾斜する。外器面に鮮明なロクロ痕が残り、透明釉の上から鮮やかな濃色の呉須が塗られている。

133は口縁部が残る。口縁部で僅かに外弯し、内外器面に、曲線と直線によるモチーフ不明の文様が、薄色の呉須で描かれている。胎土は灰白色で透明釉がかかるものの、器面は全体的に白黄色を帯びる。

134・135 は底部の残存で、胎土は白褐色である。いずれも透明釉がかかる。 134は、やや青黒色を帯びる淡い呉須で、モチーフ不明の文様が描かれている。 135は復元底径 8.2cmを測り、外底面に鮮明なロクロ痕が残る。やや、くすんだ感じの青黒色の呉須で、内底面にモチーフ不明の文様が描かれている。

136・137 は全体の1/3 弱が残る。 136は体部が殆ど直立する。やや淡い呉須で、外器面にモチーフ不明の丸文様が描かれている。胎土は白灰色で透明釉がかかる。 137は復元口径11.3

cm、器高 5.2cm、復元底径 4.4cmを測る。鮮やかな青色の呉須で、外器面にモチーフ不明の文様と6条の界線が描かれている。内器面については3条の界線が巡る。胎土は灰色で、光沢のある透明釉がかかる。内底面に重ね焼きの痕が残る。

138は徳利の頸部である。やや青黒色を帯びる呉須で、外器面の肩部に3条の界線とモチーフ不明の文様が描かれている。白灰色の胎土に透明釉がかかる。

139は皿で、復元口径12.6cm、器高 3.1cm、復元底径 7.6cmを測る。呉須で内外器面にモチーフ不明の文様と幅広の界線が描かれているが、殆ど消えかかっている。胎土は灰白色で、白灰黄色の釉がかかる。

140は全体の1/4 弱が残る。復元口径11.2cm、器高 6.3cm、復元底径 4.2cmを測る。非常に淡く、鮮明な呉須により、内外器面に界線や格子文様などが描かれている。胎土は白灰色で光沢のある透明釉がかかる。

141～143 は全体の1/2 強が残る。 141は復元口径10.8cm、器高5.7 cm、復元底径 3.9cmを測る。薄く淡い呉須で、内外器面に界線とモチーフ不明の文様が描かれている。灰白色の胎土に、くすんだ感じの灰白黄色釉がかかる。 142は復元口径 9.6cm、器高 6.0cm、復元底径 3.8cmを測る。青黒色を帯びる呉須で、外器面の全体に格子状の文様とモチーフ不明の文様が描かれている。内器面については、3条の界線とモチーフ不明の小さな文様がある。胎土は灰白色で透明釉がかかる。 143は復元口径10.6cm、器高 5.6cm、底径 4.1cmを測る。黒青色を帯びる呉須で、外器面に5本の界線と草花文様を意識した文様が描かれている。内器面には3本の界線と小さな文様がある。胎土は灰色で、光沢のある透明な釉がかかる。内底面に重ね焼きの痕が残る。非常に質量感がある。

144は小鉢で、全体の1/2 弱が残る。復元口径18.4cm、器高 6.9cm、復元底径 7.9cmを測る。体部は内弯気味に立ち上がり、中途で大きく外弯する。黒青色を帯びる呉須で、内器面に山水画が描かれている。また内器面には、型打ちによる陽刻文様（肋骨状を呈する）がある。胎土は白灰色で白青色の釉がかかる。

145は瀬戸美濃で、ほぼ完形の小碗であるが、口縁の一部を欠く。口径 7.1cm、器高 3.5cm、底径 2.4cmを測る。口唇部に口紅がつき、外器面に非常に濃い青黒色の呉須で、3つを一単位とするモチーフ不明の文様が描かれている。内底面にもモチーフ不明の小さな文様がある。胎土は白色で、白黄色の釉であるが、口唇部に限り褐色釉の施釉となる。

146・147 は地方窯の陶器である。 146は復元口径 8.9cmを測る。体部は直立気味に、やや内弯しながら伸びて、口縁部でやや外弯する。胎土は褐灰色で、黄灰色の釉がかかる。 147は復元底径 3.8cmを測る。胎土は白褐色で、オリーブ灰黄色の釉がかかる。

148は唐津の片口で、口縁部が折り返され玉縁状を呈する。片口部は非常に粗い貼り付けで、造りについては単にヘラで窪みを付けただけの感じである。復元口径20.8cmを測る。胎土は白

灰黄色で、内器面には、やや黒ずんだ灰褐色の釉がかかる。外器面については、薄い黒色釉の上に灰釉（鈍い感じの緑灰色）が部分的に厚く垂れている。

149～151 は唐津擂鉢である。 149・150 は同一個体で、赤レンガ色の色調に薄チョコレート色の釉がかかる。 149は体部から口縁部にかけて残存し、 150は底部から体部の下位にかけての残存である。 151は体部から口縁部にかけて残っており、明橙色の胎土に茶褐色の釉がかかる。条線の一単位は 149が18本、 150が16本、 151が20本を数える。

152は雑器で、外器面に鮮明なロクロ痕を残す。素焼き土器で、堅緻な焼成である。

153・154 は手ずくねの雑器で、水盤である。全体の1/5 程が残っている。 153は 154と極めて似かよっており、同一個体の可能性がある。154 は平底で、外器面と口唇部に強い指頭圧痕が残る。胎土は鈍い橙色で堅緻な焼成である。

155は二彩唐津の大皿片で、内器面に茶緑色の釉で波状の文様が描かれている。底部と体部の下位が残存する。堅緻な焼成で、高台を四角に切っている。

156は硬質瓦器の類で、色調は赤褐色である。口縁部が残存している。

157～159 は土師系雑器である。 157・158 は外器面と内底面に火を受けて黒色に変色している。157 と158 は同一個体の可能性がある。158 は外器面に上中下の３回に分けて、横ナデが施されている。全体の1/3 程残存しており、復元口径16.7㎝、器高 2.6㎝、復元底径14.2㎝を測る。

159は肉太の土師系雑器で、底部と思われるが器形の判断は出来ない。器壁の断面を見るに、何枚かの粘土が貼り合わされている事がわかる。

160～163 は鉄器である。いずれもサビの付着が激しいが、160 は鉄釘、163 は刀子の可能性がある。

164・165 は銅製品である。164 はピンセット状に二股に分かれた細線で、長さ14.5㎝、直径 1.5㎝を測る。 165は長さ 7.6㎝、幅 0.6㎝、厚さ 0.1㎝を測る。

166は天草砥石の完形品で、四側面と肩部の一面が使用されている。長軸方向に長い凹みが造られ、長さ12.1㎝、幅 5.3㎝、厚さ 4.5㎝を測る。

167～176 は瓦製品である。167 は手ずくね瓦器の完形品で、小壺の様な形状を呈し、口径 7.9㎝、底径 9.1㎝、器高 4.6㎝、最大胴部径11.2㎝を測る。内外器面の口縁部に鮮明な指頭圧痕が残っている。168 は底部のみの残存で、底部は若干、丸味を帯びる。器種は不明である。

169は小型の火舎で完形品である。体部は直立し、外底は平底である。復元口径は、外径で17.6㎝、内径で14.0㎝、器高 9.2㎝、復元底径18.0㎝を測る。外器面に直径1.05㎝の円文を上下２段にスタンプしている。

170は脚付盤で、ほぼ完形品である。底部の平面形は楕円形を呈し、長軸26.7㎝、短軸23.3㎝、厚さ 1.9㎝を測る。脚部は３脚で、いずれも貼り付けによる。

171・ 175・176 は火舎である。171 は平面形が平行四辺形で、幅30.9㎝、奥行き30.0㎝、高さ19.1～19.6㎝を測る。外器面に一対の把手が付く。外器面に円形及び半円形スタンプ文様が連続し、縦・横方向の条線も施されている。高台の脚部には直径6㎜の孔が穿ってある。

175と 176は同一個体の可能性がある。 176は外器面に把手の様なものが付く。形態的には 171 と同一であるが、内底面と内器面に2～5本を一単位とする条線が掻かれている。

172・173 は人面瓦で、172 は顔下半分、173 は顔上半分が残存する。173 は大黒瓦である。172 は非常にリアルな表現がなされている。口は大きく開き、上下の前歯も描かれている。ヘラ描きによるタッチは強烈である。裏面はお面の形状を呈し、凹面となる。173 は粘土の塊まりをそのまま成形している為、非常に質量感のある製品となっている。眉間・頬のシワ・眉毛はヘラ描きされているが、172 と比べてヘラ描きのタッチは極めて軟らかい。側頭部にあたる裏面は直立する。

174は変形丸瓦の一部である。丸瓦の側面中央部に片口の様な把手がついている。

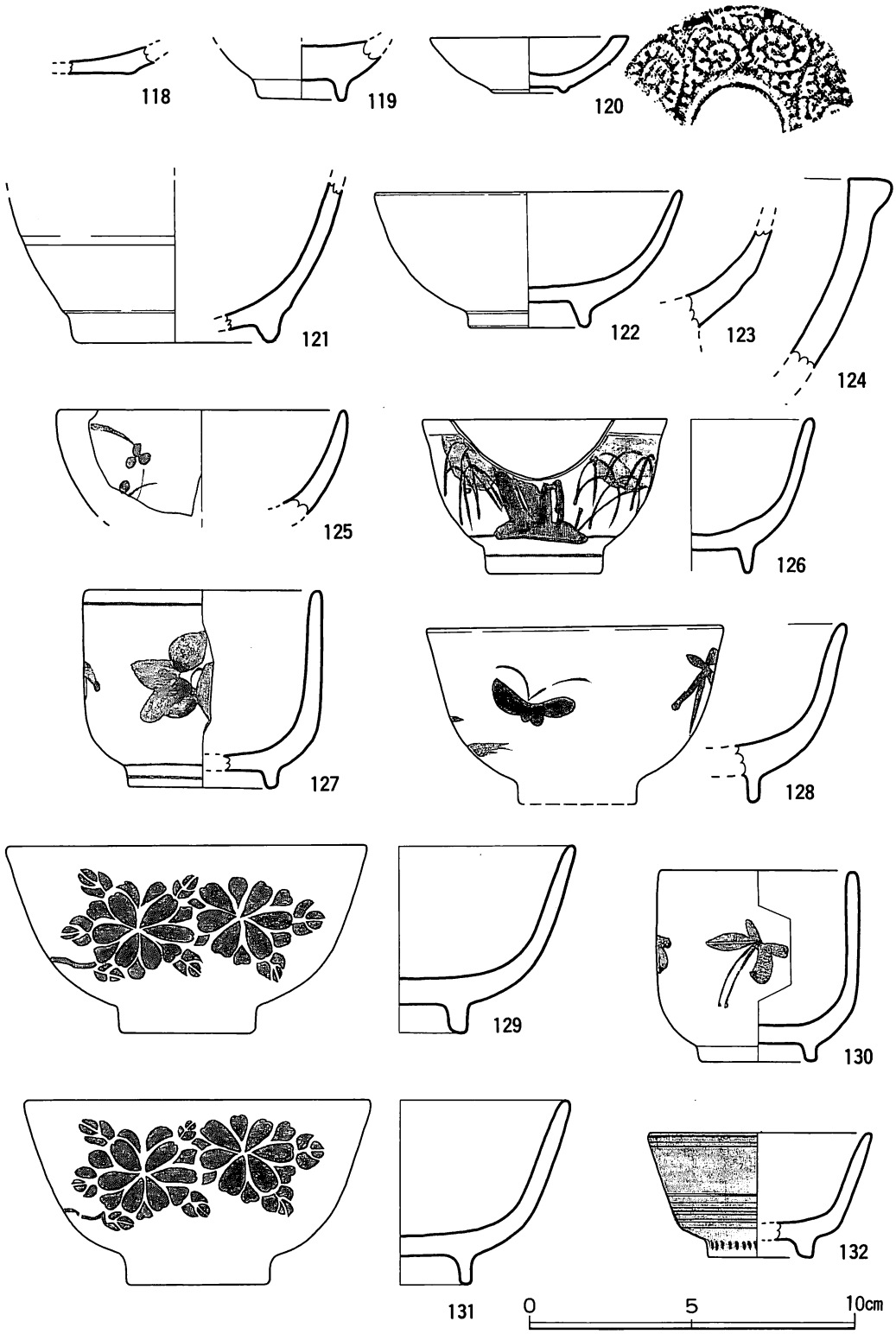
177～202 は瓦である。 177は軒丸瓦で、瓦当部に右廻りの三ツ巴文様がある。平瓦部の調整は凸面側で横ナデ後、縦方向のナデが加えられており、凹面側は縦方向のナデが施されている。瓦当部は、裏面において下位部分のみが円周状のナデで、その他は成形時の指頭圧痕をそのまま残す。側部は横ナデである。丸瓦は先端部のみ横ナデで、他は縦方向のナデとなっている。

178～182 は軒平瓦である。瓦当面に均正唐草文様があり、文様については中心飾りが1点で、中心部から扇形に8本の直線が放射する。調整については、178 ～180 の凸面の大部分は縦方向のヘラ磨きで、一部につき横ナデが施されている。凹面は 178が横ナデであるが、179 は大部分が縦方向の磨きで、一部に限り横ナデである。180 については横ナデとなる。 181・182 の調整は残存部に限り、全面横ナデである。

183～193 は桟瓦である。192 を除いて「片の川」の小スタンプが押されている。スタンプの位置は 187・189 が平瓦部の先端部で、他は丸瓦の先端部にある。

190からは作瓦の状況が読みとれる。すなわち2枚の平瓦が貼り合わされて1枚瓦となっており、それから丸瓦部との接合が行われている事が判る。調整については、平瓦部と丸瓦部の大部分が縦方向のナデで、他は横ナデである。

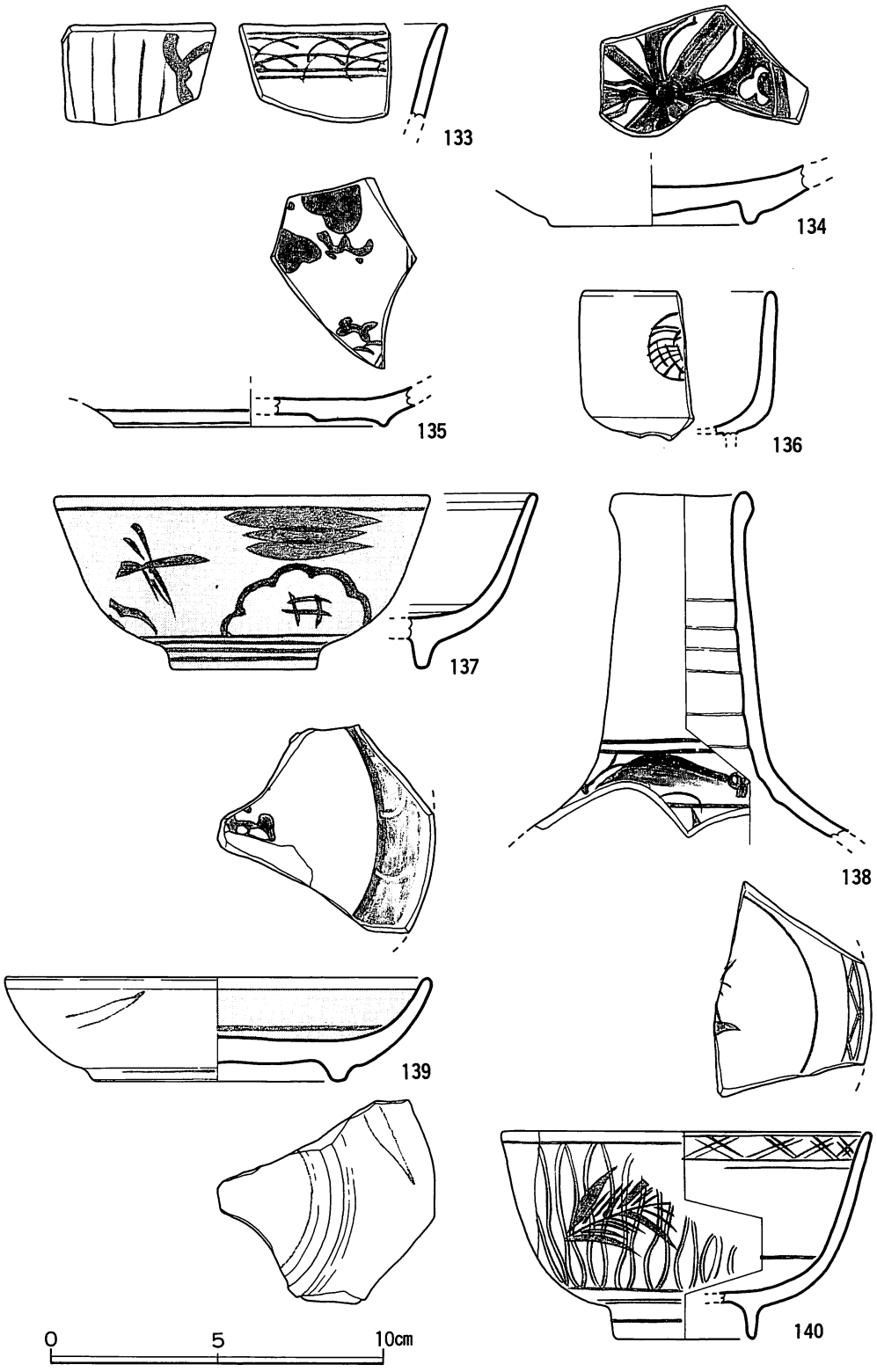
194～202 は平瓦である。 196～199 には先端部に、「片の川」の小スタンプが押されている。凹面の調整は横ナデが 194・ 197・198 、ナデが 200～202 、縦方向のナデが 195・196・199 である。凸面は縦方向のナデが 194・ 195・199 で、ナデは 200・201 、横ナデは 196～198 ・202 である。 200・201 は、凹面に4～5本を一単位とする直線と弧線の条線が交差している。202 は側面寄りに幅 3.6～3.9 ㎝の刻みがある。接合の為で、幅2～3㎜の棒状工具で施されている。



第23図　出土遺物実測図　⑧

NO	器　　種	形　態　の　特　徴	手　法・調　整・文　様	備　　考
118	中世土師器	(底部) 中央部寄りで厚さ3㎜、端部で厚さ7㎜。平底。	(調整) 外底面の糸切り痕は観察できない。ローリングの為か。	(色調) 鈍い橙色。
119	近世磁器 (地方窯) 18～19C	(底部) 肉太で厚さ 1.0㎝。 中央部にロクロ切り離しの突起物が残る。 高台高　0.6㎝ 復元底径　3.2㎝	――――	(胎土) 灰白色。 (釉色) 灰緑色。 (施釉) 高台の畳付きは無釉。 ＳＥ－２４出土
120	肥前白磁 化粧皿 19C	(体　部) 下位より口縁部にかけて僅かに内弯する。厚さ4㎜ (口唇部) 扁平で幅5㎜。 端部は使用のためか、所々、ギザギザしている。 口径　6.0㎝ 底径　2.2㎝ 器高　1.7㎝ 高台高　0.2㎝	(調整) 内器面：非常に丁寧なナデ。 (文様) 外器面：タコ唐草文あり。(全面に歯車の様な形状をした、渦巻き線のスタンプが押されている。) 見た目にギザギザしている。	(胎土) 白色。 (釉色) 白灰黄色。光沢あり。 (施釉) 内器面と口唇部にかけて、ベットリした釉を分厚く施釉。 (焼成) 甘い。 ＳＥ－１０出土
121	肥前白磁 19C末	(体部) やや鋭角的に、内弯気味に伸びる。 高台との境に沈線が巡る。 厚さ5㎜。 (底部) 厚さ 4.5～6㎜。 高台高　4～5.5㎜ 復元底径　6.1㎝	(調整) 内外器面に薄いロクロ痕。	(胎土) 白灰色。 (釉色) 透明。鈍い光沢。 (施釉) 高台の畳付きを除き、外器面と外底面に施釉。 (その他) 高台の畳付きにトチ付着。 ＳＥ－０５出土
122	肥前白磁 18 C 後半	(体部) 内弯しながら、やや外側へ開く。 器高　4.1㎝ 高台高　0.8㎝ 復元口径　9.4㎝ 復元底径　3.8㎝	(調整) 内器面：丁寧なナデ。 外器面：ロクロ痕。	(胎土) 白色。 (釉色) 透明。やや、くすんだ感じ。 (施釉) 全面。 (その他) 高台の畳付きに少量のトチが付着。 ＳＥ－１１出土
123	近世陶器 (地方窯) 18C	(体部) やや、内弯する。 厚さは下位で 1.0㎝、上位で 0.5㎝を測る。	(調整) 外器面：ロクロ痕が残る。	(胎土) 白灰色。 (釉色) 淡いオリーブ灰色。 一部に白青色。 (施釉) 全面。内器面の一部に白青色釉。 ＳＥ－１３出土
124	近世雑器	(体　部) 内弯する。口縁部に至るまで、均一の厚さ (厚さ8㎜)。 (口縁部) 外側へ大きく膨み、厚さ1.3㎝。口唇部は扁平で幅1.2㎝。	(調整) 内器面：非常に丁寧な横ナデ。	(胎土) 鈍い橙色。 (釉色) 褐色。 (施釉) 全面。 外器面は厚目。
125	肥　前 染付磁器 18C中～末	(体部) 内弯する。 復元口径　8.8㎝	(文様) やや、くすんだ感じの呉須となっている。 外器面：モチーフ不明の文様。	(胎土) 灰白色。精良。 (釉色) 灰白青色。 (施釉) 薄い。全面。 ＳＥ－１０出土
126	肥　前 染付磁器 (小　坏)	(体部) 内弯するが、口縁部で僅かに外弯。 器高　4.7㎝ 高台高　0.7㎝ 復元口径　7.4㎝ 復元底径　3.6㎝	(調整) 内器面と内底面にロクロ痕 (文様) 青色味を帯びた呉須となっている。 外器面：草花文様。	(胎土) 灰白色。 (釉色) 透明。 (施釉) 高台の畳付きのみ無釉。 ＳＥ－１１出土
127	肥　前 染付磁器 (碗) 19 C 後半 (幕　末)	(体　部) 内弯気味に直立する。 厚さ4～6.5㎜。 (高台高) 5㎜。 口径　7.3㎝ 底径　6.0㎝ 器高　4.6㎝	(文様) やや、淡い呉須となっている。 外器面：草花文様と3条の界線。	(胎土) 灰色。 (釉色) 透明。 (施釉) 全面。 ＳＥ－０９出土

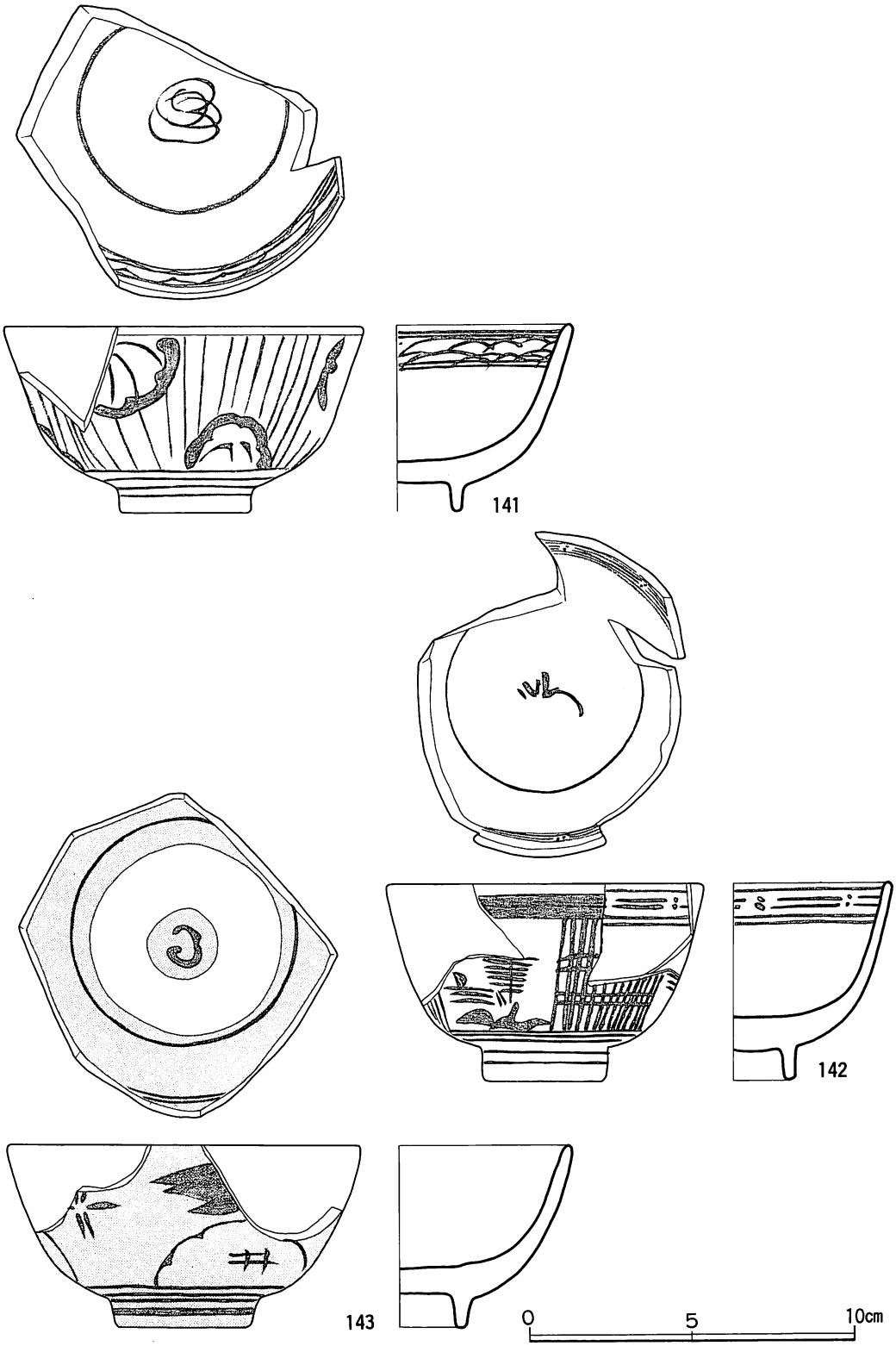
第18表　出土遺物観察表 ⑫



第24図　出土遺物実測図　⑨

NO	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
128	肥前 染付磁器 （碗）	（体部）内弯するが、口縁部で僅かに外弯。 器高　5.4cm 復元口径　9.0cm 復元底径　3.6cm	（文様）青黒色を強く帯びる呉須となっている。 外器面：草花文と蝶を意識した文様。	（胎土）白灰色。 （釉色）透明。 （施釉）全面。
129	肥前 染付磁器 （碗）	（体部）内弯する。 （高台）高さは9mm。 肉太で幅6mmを測る。内側はヘラ削りにより滑らか。 器高　5.7cm 復元口径　10.8cm 復元底径　4.1cm	（文様）やや、淡い青黒色を帯びる呉須となっている。 外器面に型紙刷りによる花文様あり。	（胎土）灰色。精良。 （釉色）透明。 （施釉）高台の畳付きのみ無釉。 （その他）内底面の全体に重ね焼きの痕。 高台の畳付きにトチが付着。
130	肥前 染付磁器 （碗） 19C後半 （幕末）	（体部）内弯気味に直立する。 厚さ4mm。 口径　6.2cm 底径　3.6cm 器高　5.8cm 高台高　5.5mm	（調整） 外器面：ロクロ痕が残る。 （文様）やや、淡い呉須となっている。 外器面：4つの草花文様が描かれていたものと思われる。	（胎土）白灰色。 （釉色）透明。 （施釉）全面。 （その他）高台の畳付きにトチが付着。 ＳＥ－０９出土
131	肥前 染付磁器 （碗） 19C末 （明治）	（体部）内弯する。 （高台）高さは9mm。 直立する。畳付きは4mm幅。 器高　5.7cm 復元口径　10.4cm 復元底径　4.3cm	（調整） 外器面：やや、ロクロ痕が目立つ。 （文様）やや、淡い青黒色の呉須となっている。 外器面：型紙刷りによる花文様あり。	（胎土）灰白色。 （釉色）透明。 （施釉）高台の畳付きのみ無釉。 （その他）内底面に重ね焼きの痕。 ＳＥ－１１出土
132	肥前系 染付磁器 19C後半 （幕末）	（体部）下位で腰折れした後は、直線的に伸びて口縁部に至る。 屈曲部分は強い稜線となる。 （高台）畳付きは4mm幅で、ヘラ削りにより、内側へやや傾斜する。 器高　3.8cm 復元底径　3.2cm 高台高　0.5cm 復元口径　6.7cm	（調整）外器面に鮮明なロクロ痕。 （文様）鮮やかな濃色の呉須となっている。 高　台：縦方向の短線と1条の界線が描かれている。 高台と体部の屈曲部分との間に放射の広がりを有する短線あり。 口唇部：内側に斑点状の文様あり	（胎土）白色。 （釉色）透明。 （施釉）高台の畳付きのみ無釉。 ＳＥ－１１出土
133	肥前 染付磁器	（体部）直線的に伸びて、口縁部でごく、僅かに外弯。	（文様）薄色の呉須となっている。 内器面：上位1条と中途2条の界線に挟まれた、曲線のモチーフ不明の文様。 外器面：直線とモチーフ不明の文様。	（胎土）灰白色。 （釉色）透明。 （施釉）全面。 （その他）器面は白黄色を帯びる。 ＳＥ－０３出土
134	肥前 染付磁器 （Ⅲ） 17C前半	（底部）外底面の中央部に凸。 中央部の厚さ8mm。 端部の厚さ5mm。 （高台）内側の高さ7mm。 外側の高さ3mm。	（文様）やや、青黒色を帯びる淡い呉須となっている。 内底面にモチーフ不明の文様。	（胎土）白褐色。 （釉色）透明。 （施釉）高台の畳付きのみ施釉。 （その他）内底面に重ね焼きの痕。 高台の畳付きにトチが付着。 ＳＥ－１６出土
135	肥前 染付磁器 （Ⅲ） 19C後半 （幕末）	（外底）2段に分かれている。 中央部は厚さ4mm、端部1.5cmを測る。 復元底径　8.2cm	（調整） 外底面：鮮明なロクロ調整痕。 （文様）やや、くすんだ感じの青黒色の呉須となっている。 外器面：2条の界線。 内底面：モチーフ不明の文様。	（胎土）白灰褐色。上質。 （釉色）透明。 （施釉）外底面の中途より端部にかけて無釉。 （焼成）堅緻。 （その他）外器面は焼けた様な感じで、茶色味を帯びる。
136	肥前 染付磁器	（体部）ほとんど直立状態で口縁部に至る。	（文様）やや、淡い呉須となっている。 外器面：モチーフ不明の丸文様。	（胎土）白灰色。 （釉色）透明。 （施釉）全面。

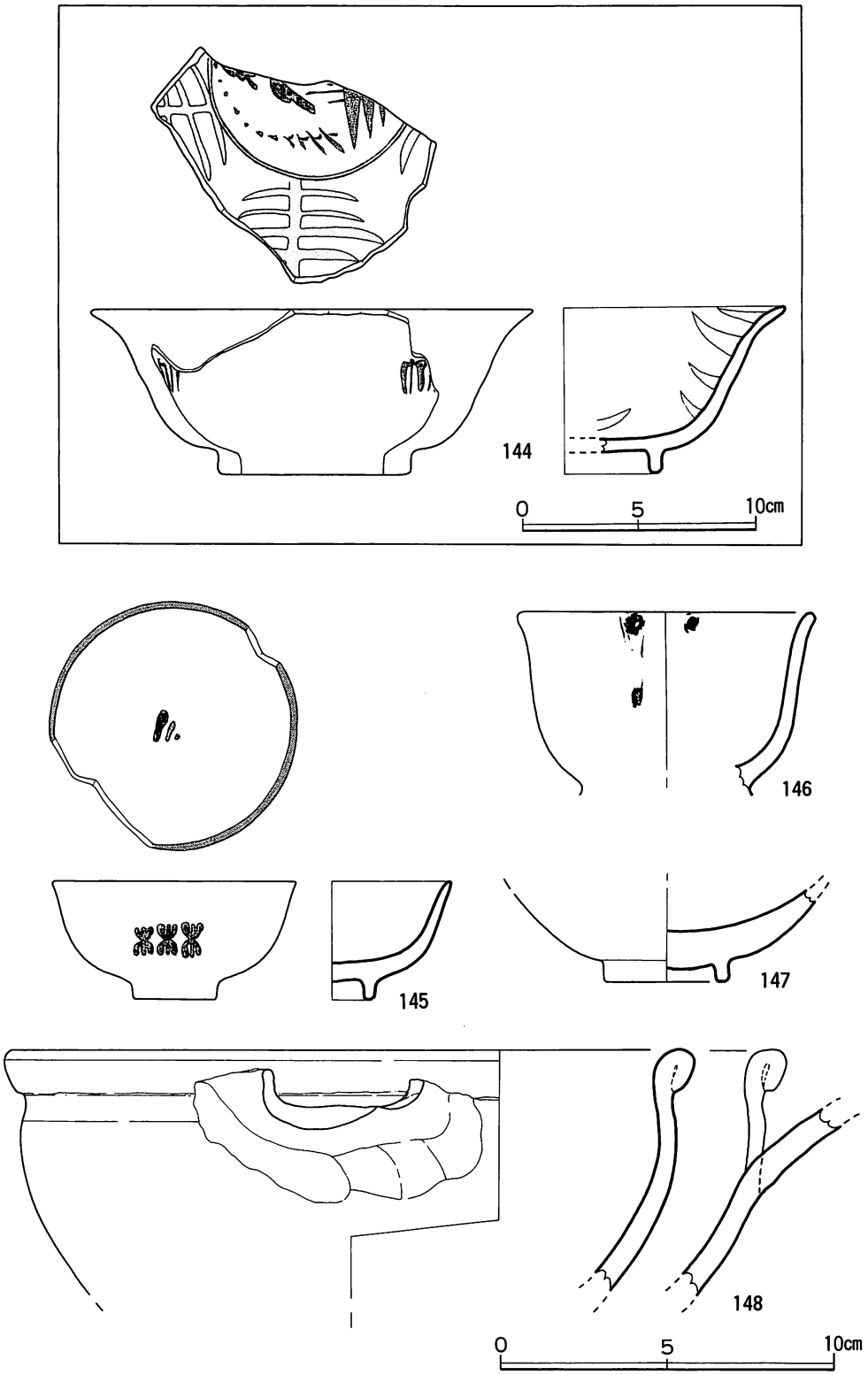
第19表　出土遺物観察表　⑬



第25図　出土遺物実測図 ⑩

NO	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
137	肥前 染付磁器 （碗）	器高　5.2cm 復元底径　4.4cm 高台高　9mm 復元口径　11.3cm	（文様）鮮やかな青色の呉須となっている。 内器面：3条の界線。 外器面：大部分にモチーフ不明の文様と6条の界線。	（胎土）灰色。 （釉色・施釉） 全面に光沢ある、透明施釉。 （その他）内底面には、重ね焼き痕が残る。 ＳＥ－０９出土
138	肥前 染付磁器 （徳利）	（器　形）やや、歪。 （体　部）厚さ4～5mm。 （口唇部）やや、肥厚。厚さ6mm。	（調整）内器面にロクロ痕。 （文様）やや、青黒色を帯びる呉須となっている。 外器面：肩部に3条の界線と、モチーフ不明の文様。	（胎土）白灰色。 （釉色）透明。 （施釉）頸部と外器面。
139	肥前 染付磁器 （皿） 17C後半 ～18C後半	（口縁部）丸味を帯びる。 器高　3.1cm 復元口径　12.6cm 復元底径　7.6cm	（文様）呉須を使用。ほとんど消えかかっている。 内外器面にモチーフ不明の文様。ねじ花が入り、コンニャク印判あり。 内底面と内器面の境に4mm幅の界線。	（胎土）灰白色。非常に精良。 （釉色）白灰黄色。 （施釉）高台の畳付きは無釉。 （焼成）堅緻。 ＳＥ－２１出土
140	肥前 染付磁器 （碗）	（高台）高さ 1.1cm。 幅　2.5～5mm。 器高　6.3cm 復元口径　11.2cm 復元底径　4.2cm	（文様）非常に淡く鮮明な呉須となっている。 内器面：4条の界線と格子文様。 外器面：3条の界線とモチーフ不明の文様。	（胎土）白灰色。 （釉色）透明。 （施釉）高台の畳付きは無釉。 ＳＥ－０９出土
141	肥前 染付磁器 （碗） 19C後半 （幕末）	（体部）内弯する。 器高　5.7cm 高台高　0.9cm 復元口径　10.8cm 復元底径　3.9cm	（文様）薄く淡い呉須となっている。 内器面：上位に3条の界線とモチーフ不明の文様あり。 外器面：全面に4条の界線が、モチーフ不明の文様と描かれている。 内底面：1条の界線、内にモチーフ不明の文様。	（胎土）灰白色。 （釉色）くすんだ感じの灰白黄色。 （施釉）高台の畳付きのみ無釉。 ＳＥ－０８出土
142	肥前 染付磁器 （碗）	（体部）内弯し、厚さ 0.3cm。 （底部）厚さ 1.0cm 器高　6.0cm 高台高　0.9cm 復元口径　9.6cm 復元底径　3.8cm	（調整）内底面を中心にロクロ痕。 （文様）青黒色を帯びる呉須となっている。 内器面：上位には3条の界線と、モチーフ不明の文様。 外器面：全面に格子状の文様とモチーフ不明の文様。下位と高台外側に計5条の界線。 内底面：1条の界線と、内にモチーフ不明の文様。	（胎土）灰白色。 （釉色）透明。 （施釉）全面。 （その他）質量感のある磁器。 高台に畳付きにトチが多量に付着する。
143	肥前 染付磁器 （碗）	（体部）内弯する。 器高　5.6cm 底径　4.1cm 高台高　1.0cm 復元口径　10.6cm	（文様）黒青色を帯びる呉須となっている。 内器面：3本の界線と小さな文様あり。 外器面：5本の界線と草花文を意識した文様あり。	（胎土）灰色。 （釉色）透明。光沢あり。 （施釉）高台の畳付きのみ無釉。 （焼成）非常に堅緻。 （その他）内底面に重ね焼きの痕。 質量感のある磁器。 ＳＥ－０３出土
144	肥前 染付磁器 （小鉢） 19C後半 （幕末）	（体部）内弯気味に立ち上がり、中途で大きく外弯する。 （高台）高さ9mm。 畳付きは内外両端を斜めに削り取られている。 器高　6.9cm 復元口径　18.4cm 復元底径　7.9cm	（調整） 外器面：下位にロクロ痕。 （文様） ① 黒青色を帯びる呉須となっている。内底面に2条の細い界線が巡り、内器面に山水画が描かれている。 外器面に源氏孔の文様あり。 ② 内器面の釉下に型打ち（肋骨状を呈する）による陽刻文様がある。	（胎土）白灰色。 （釉色）白青色。 （施釉）高台の畳付きのみ無釉。 （貫入）内器面に太目のものが走る。 ＳＥ－１１出土

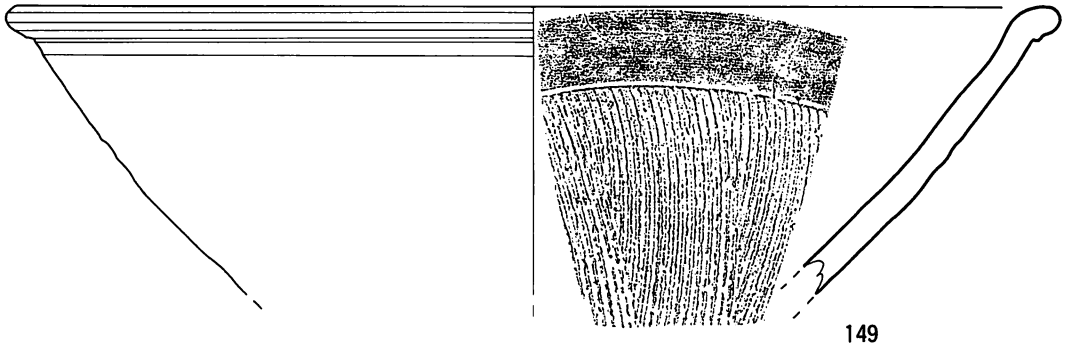
第20表　出土遺物観察表 ⑭

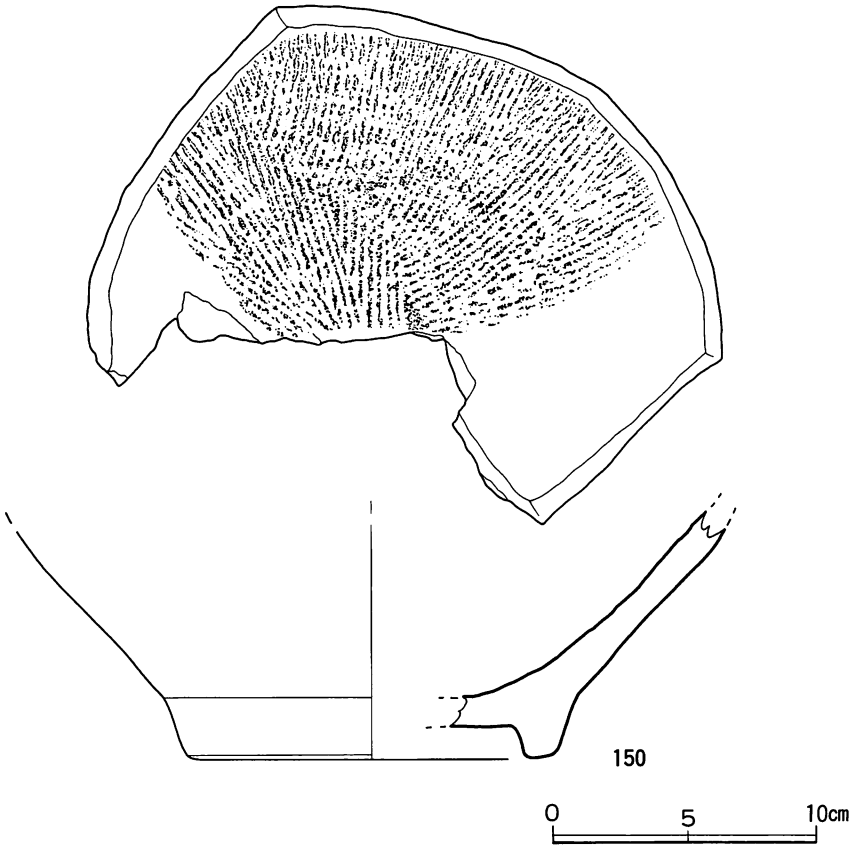


第26図　出土遺物実測図　⑪

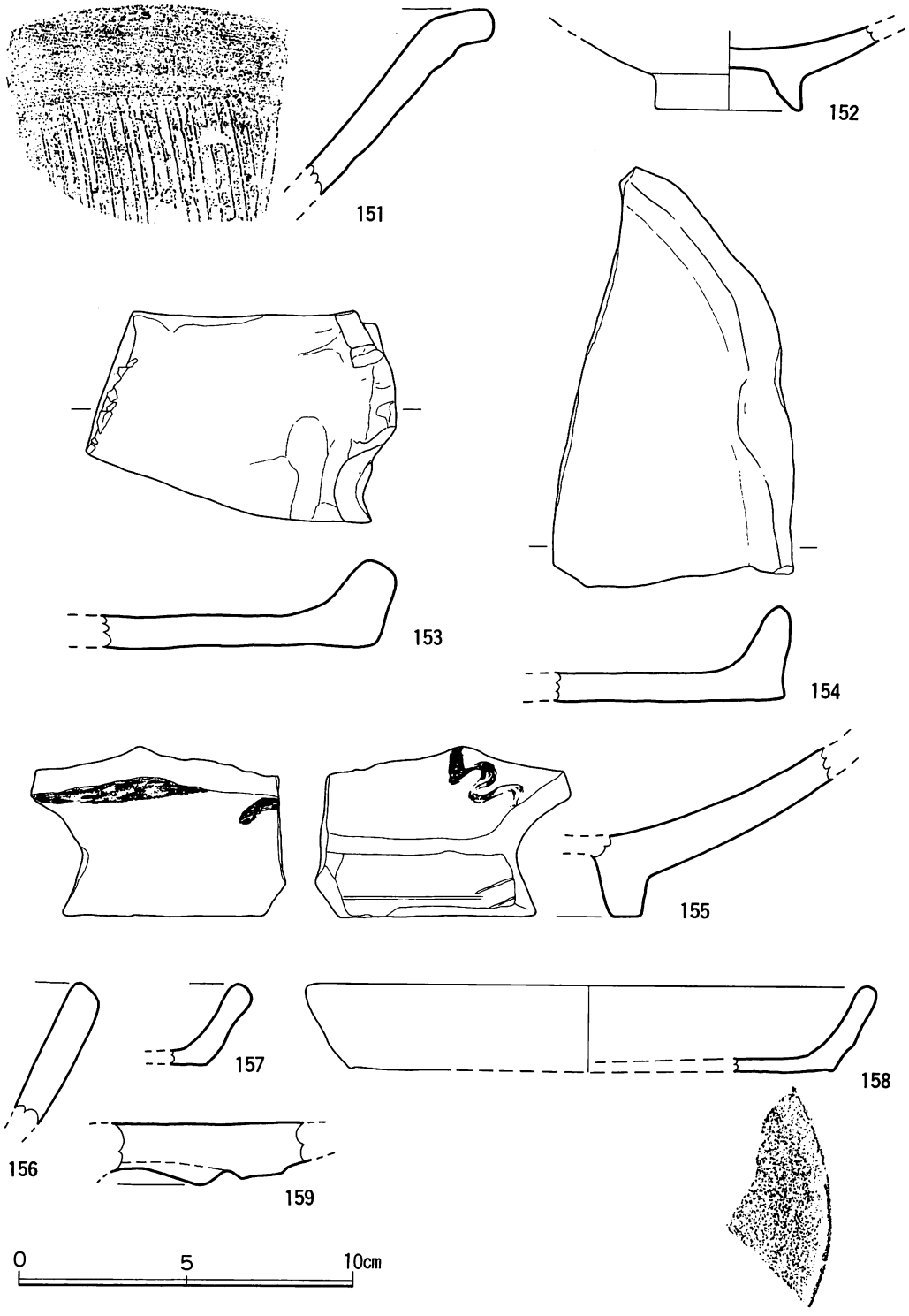
NO	器　　種	形　態　の　特　徴	手　法・調　整・文　様	備　　考
145	瀬戸美濃 染付陶器 （碗）	（体部）内弯する。 器高　　3.5cm 高台高　0.6cm 口径　　7.1cm 底径　　2.4cm	（文様）非常に濃い青黒色の呉須を使用。 外器面に３つが一単位となった、モチーフ不明の文様。 内底面にモチーフ不明の小さな文様。	（胎土）白色。 （釉色）白黄色・褐色。 （施釉）口紅がつく（口唇部のみ褐色）。全面、白黄色。 ＳＥ－１１出土
146	近世陶器 （地方窯） （碗） 18Ｃ	（体　部）直立気味に、やや内弯しながら伸びる。 （口縁部）やや、外弯する。 復元口径　8.9cm	――――	（胎土）褐灰色。 （釉色）黄灰色。 （その他）ナマコ色の釉が内器面の上位に垂れている。 ＳＥ－０６出土
147	近世陶器 （地方窯） （碗） 18Ｃ	（底部）肉太で厚さ 1.1cmを測る。 復元底径　3.8cm	――――	（胎土）白褐色。 （釉色）オリーブ灰黄色。 （施釉）高台の畳付きより内側は無釉。 （貫入）内外器面に大きなものが走る。 ＳＥ－２０出土
148	唐　　津 （片　口） 16Ｃ末 ～17Ｃ前半	（体　部）大きく外弯する。 厚さ６㎜。 （口縁部）折り返され玉縁状を呈する。 （片口部）非常に粗い貼り付け。 造りについては、単にヘラで窪みをつけただけの感じ。 復元口径　20.8cm	（調整） 内器面：非常に丁寧なナデ。	（胎土）白灰黄色。 （釉色・施釉） 内器面：やや、黒ずんだ灰褐色。光沢あり。釉がはじけた状態の茶色の不純物が付着。 外器面：薄い黒色釉を施釉。 その上に鈍い緑灰色の釉（灰釉）が部分的に厚く垂れている。 口唇部：無釉。 ＳＥ－０５出土
149	唐　　津 （擂　鉢）	（体　部）直線的に大きく開き、僅かに内弯する。 厚さ 1.0～1.1cm 。 （口縁部）口唇部を含めた範囲で、水平方向に大きく外弯する。 復元口径　39.4cm	（文様） 外器面：口縁下の屈曲部に幅５㎜と７㎜の沈線が巡り、沈線の両端は稜線状を呈する。 下位の沈線下において、2.3cm幅の丁寧なロクロ使用による横ナデ。 中位にはロクロ使用による、３条の指頭の沈線が巡る。 下位は非常に丁寧なナデ。 内器面：上位は外弯する。口縁部を除き、3.3cm幅で丁寧な横ナデ。これより下位には条線が器面一杯に、やや弧状気味に掻かれている。 条線の一単位は18本を数える。	（色調）赤レンガ色。 （釉色）薄チョコレート黄色。 （施釉）全面。
150	唐　　津 （擂　鉢）	149と同一個体。 （体部）直線的に伸びる。 厚さ 1.0～1.1cm 。 （底部）厚さは 1.1cm。 （高台）畳付きの幅は 1.1cm。 底径　　14.2cm	（調整）内底面に至るまで、一単位を16本とする条線が、びっしりと掻かれている。 条線の走行状態は一部において、極めて複雑に重なり合う所がある。 外器面：やや、粗いナデ。 高台の内側は、シャープなヘラナデ。	（色調）赤レンガ色。 （釉色）やや、くすんだ薄チョコレート黄色。 （施釉）高台の畳付きから、外底面にかけて無釉。 ＳＥ－１９出土

第21表　出土遺物観察表　⑮





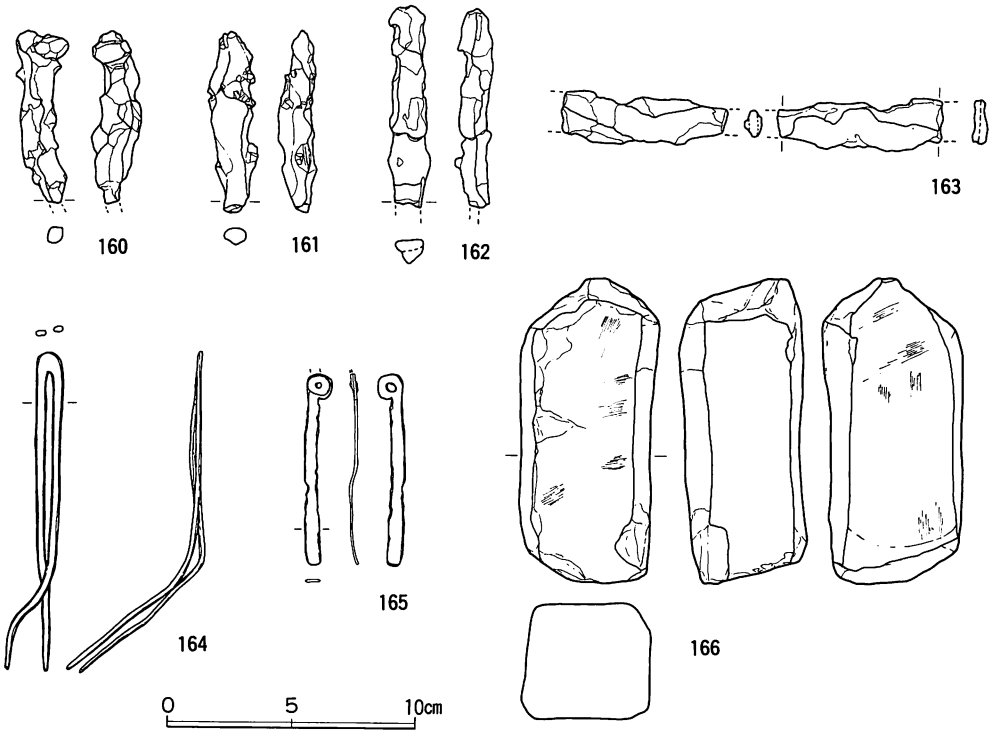
第27図　出土遺物実測図　⑫



第28図　出土遺物実測図　⑬

NO	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
151	唐　津 （擂　鉢）	（体　部）僅かに内弯し、直線的に伸びる。 口縁部は屈曲気味に大きく外弯する。 下位より漸次、肥厚しながら口縁部に至る。屈曲部で最大の厚さとなる。 厚さは下位で9㎜、口縁部の屈曲箇所で 1.2㎝。 （外器面）口縁部の直下に 7.5㎜幅の沈線が巡る。下端部は稜線状を呈する。	（調整） 内器面：上位は丁寧な横ナデ。 外器面：上位は丁寧な横ナデ。中途より下位は、やや粗い横ナデ。指頭圧痕も、いくつか認められる。 （条線）一単位は20本で、やや浅目に掻かれている。	（胎土）明橙色。 （釉色）茶褐色。 （施釉）全面。
152	近世雑器	（高台）高さ 1.3㎝。 外側は直立し、内側は大きく傾斜する。 復元底径　4.4㎝	（調整） 外器面：鮮明なロクロ痕。	（胎土）灰褐色。素焼き土器。 （焼成）堅緻。 （その他）内底面に重ね焼き痕が残る。
153	近世雑器 （水　盤）	154と同一個体の可能性がある。	――――	――――
154	近世雑器 （水　盤）	外底は平底（厚さ9㎜）。 器高　2.8㎝	（調整） 内器面：粗い横ナデ。 外器面と口唇部に強い指頭圧痕が残る。	（胎土）鈍い橙色。 （その他）外底面の一部に、板目圧痕状のものが残る。 （焼成）堅緻。
155	二彩唐津 （大　皿） 17C	（高台）畳付きは扁平で、幅9㎜を測る。高台を四角に切っている。	（調整） 外器面：非常に丁寧なナデが施されているが、ロクロ使用痕が残っている。 （文様） 内器面：茶緑色の釉で、刷け目使用の波状の文様。	（胎土）灰色。 （釉色・施釉） 白灰黄色の釉が、内底面に厚く施されている。 外器面の中途まで、緑灰色釉が施釉されている。 （焼成）堅緻。 ＳＥ－０６出土
156	近世雑器 硬質瓦器	（体部）下位より口縁部にかけて漸次、肥厚する。 厚さは下位で8㎜、口縁部で 1.0㎝。 口縁部近くで、最大の厚さ 1.1㎝を測る。	（調整）横ナデ。	（色調）赤褐色。 （焼成）堅緻。
157	近　世 土師系雑器	158と同一個体の可能性がある。	――――	――――
158	近　世 土師系雑器	（体　部）僅かに内弯する。肉太で厚さ7㎜。 （口唇部）丸味を帯びる。 （底　部）薄壁で厚さ4㎜。 （外　底）平底。 器高　2.6㎝ 復元口径　16.7㎝ 復元底径　14.2㎝	（調整）内器面と内底面は非常に丁寧な横ナデ。 外器面：上中下の3回に分けて、横ナデが施されている。 外器面の下位から外底端にかけて、ヘラ状工具のもので非常に強い横ナデが施されており、上端部については稜線状を呈している。	（色調）乳褐色。 外器面と内底面は火を受けて黒色に変色。 （その他）外底面には、ヒビ割れ状に細かな亀裂が走り、器面はザラつく。さらにロクロから切り離して、小円板状のものの上においた痕跡がある。
159	近　世 土師系雑器	底部であろうと思われる（断定は出来ない）。 断面を見るに、何枚かの粘土が貼り合わさっているようである。 ヘラ削りによって造り出されている。厚さ 1.4～1.8㎝。	（調整） 内底面：丁寧なナデが施されている。一部で粗い横ナデ。 外底面：中心部は非常に強い指頭圧痕により、大きく凹む。	（胎土）褐灰色。 外器面は一部で灰黒色。

第22表　出土遺物観察表　⑯



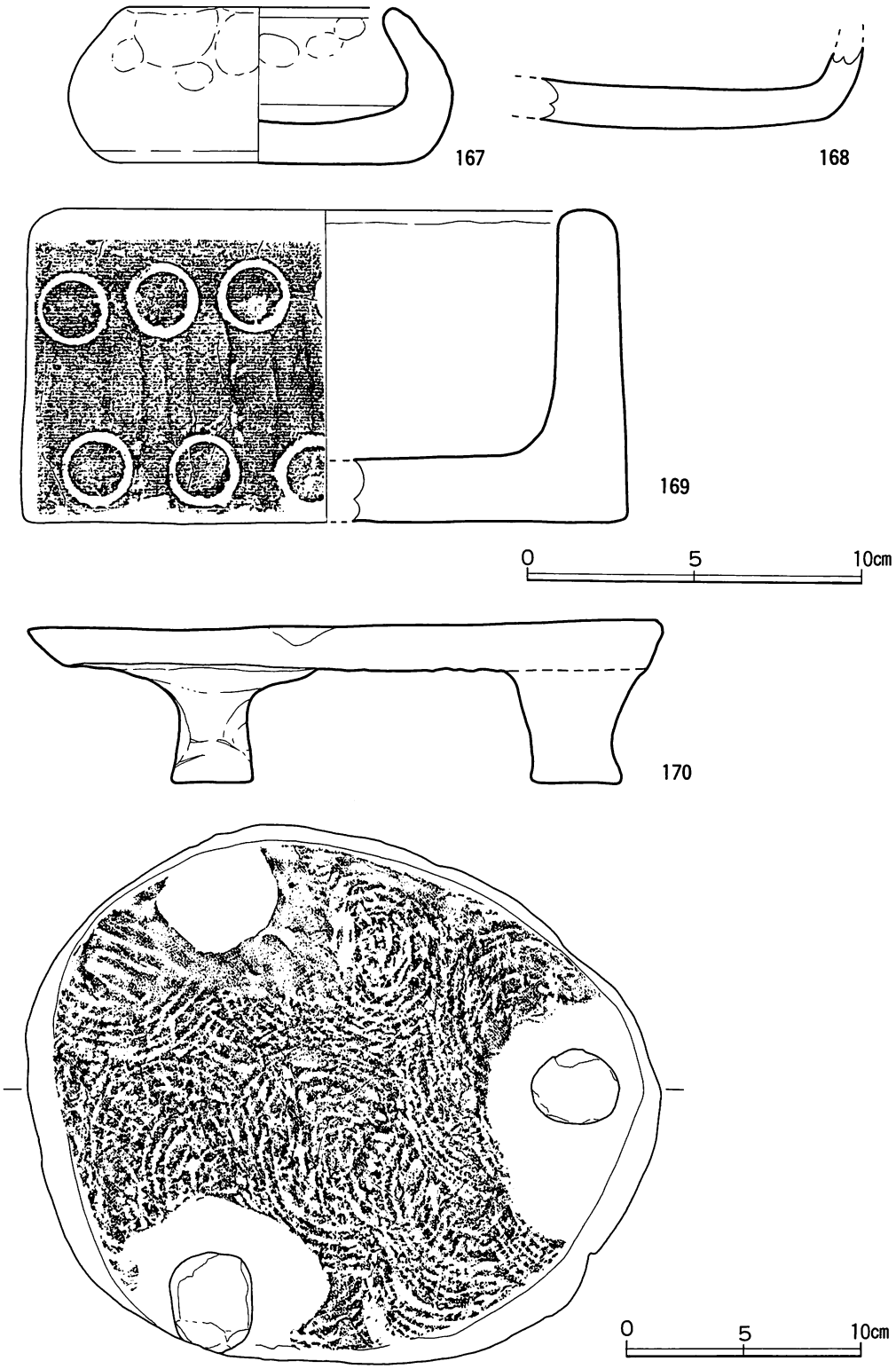
第29図　出土遺物実測図　⑭

NO	器　種	形態の特徴	備　　考
160	鉄　釘	長さ　7.0cm 幅　0.6cm 厚さ　0.6cm 重さ　15.7g	サビの付着が激しい。
161	鉄　器	長さ　7.2cm 幅　0.9cm 厚さ　0.7cm 重さ　15.8g	サビの付着が激しい。 木片・石などが付着する。
162	鉄　器	長さ　8.0cm 幅　1.2cm 厚さ　0.9cm 重さ　15.2g	サビの付着が激しい。

NO	器　種	形態の特徴	備　　考
163	鉄　器	長さ　6.4cm 幅　1.7cm 厚さ　0.5cm 重さ　11.10 g	刀子の可能性がある。
164	銅製品	長さ　14.5cm 直径　1.5cm 重さ　9.0g	ピンセット状に二股に分かれた銅製の細線で、中途から互いに練れている。
165	銅製金具	長さ　7.6cm 幅　0.6cm 厚さ　0.1cm 重さ　1.7g	一方の端部は直径 1.0cmの円形を呈し、中心部には直径2～4mmの孔が穿かれている。

NO	器　種	形　態　の　特　徴	手法・調整・文様	備　　考
166	砥　石	長さ　12.1cm 幅　5.3cm 厚さ　4.5cm 重さ 477.3g	四面使用。 長軸方向に長い凹みが造られる。 一部に肩部を研いだ痕あり。	(色調) 白褐色。 天草砥石。

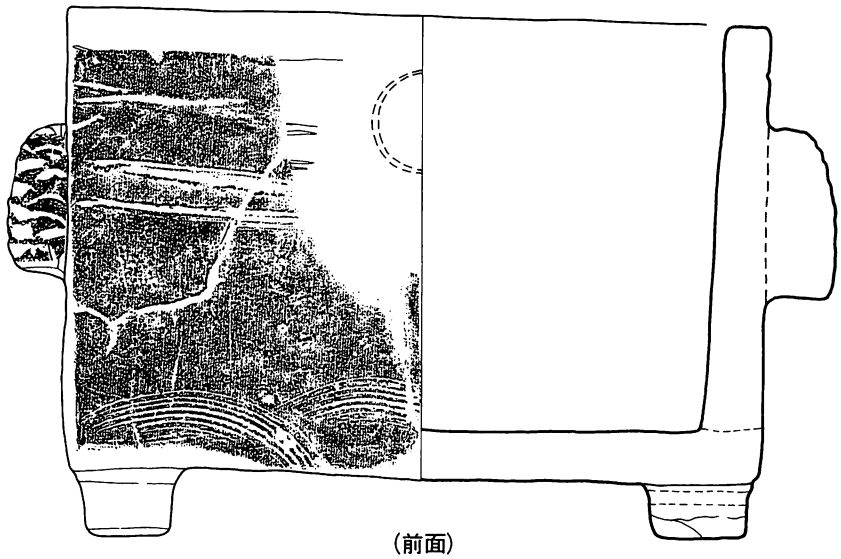
第23表　出土遺物観察表　⑰



第30図　出土遺物実測図　⑮

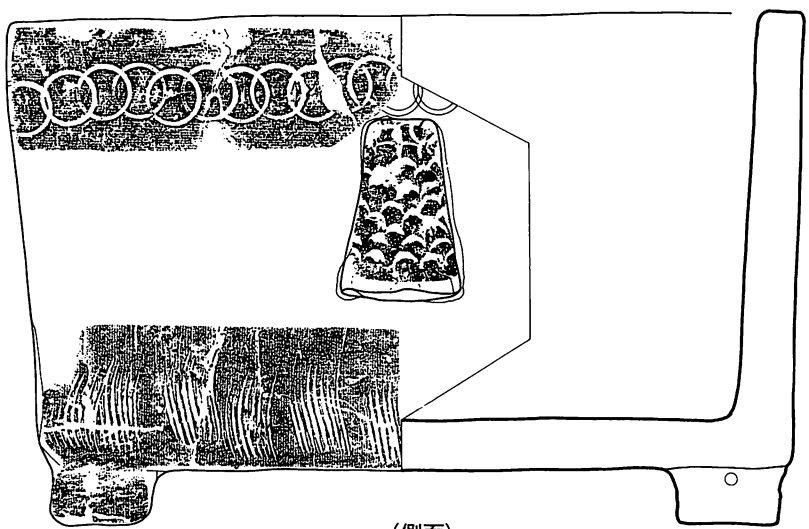
NO	器　　種	形　態　の　特　徴	手　法・調　整・文　様	備　　考
167	近　　世 瓦質土器	手ずくね瓦器。 口径　　7.9cm 底径　　9.1cm 器高　　4.6cm 最大胴部径　11.2cm	(調整) 内器面：粗いナデ。口縁部付近は顕著な指頭圧痕。 外器面：口縁部付近は顕著な指頭圧痕。 外底面：ナデ。	(色調) 内器面：灰色。 外器面：黒灰色。
168	(不　明)	(底部) 若干、丸味を帯びる。 厚さ 1.0～1.3cm 。	(調整) 内器面：不定ナデ。 外器面：横ナデ。	(色調) 灰色。
169	火　　舎	(体　部) 直立する。下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。 厚さは下位で 3.0cm、上位で 1.8cm。 (底　部) 平底。厚さ 1.9～2.0cm。 (口唇部) やや、丸味を帯びる。 器高　　9.2cm 復元口径　内径で14.0cm 外径で17.6cm 復元底径　18.0cm	(調整) 内外器面、内底面、外底面ともナデ。 (文様) 外器面：直径 1.05 cmの円文を、上下２段にスタンプしている。	(色調) 黒色。
170	脚　付　盤	(底部) 楕円形を呈す。長軸26.7cm 短軸23.3cm、厚さ 1.9cm。 内底面は水平、外底面も、ほぼ水平。 端部は鋭角に立ち上がる。 (脚部) ３脚で、いずれも貼り付けによる。高さ 4.9cm、上位幅は 6.0cm、中途で、やや括れて幅 3.4cm。 底面は扁平で幅 3.8cm。	(調整) 内底面：上半分は板状のもので、強く押えられている。上半分は、さらに、ナデと指押えが加えられている。 底部の側面はヘラ削り。 脚部の調整は粗く、指頭圧痕が残る。 脚部は、ヘラ状工具で刻み目を入れ、貼り付け易くしている。	(色調) 灰黒色。
171	火　　舎	(器　形) やや、歪。平面形は平行四辺形に近く、左右側面の高さにも差異がある。 (体　部) 厚さは上位で 1.7cm、下位で 2.4cm。底部とは貼り付け状態にある。 (口唇部) 扁平。 (外器面) 一対の把手が付く。 (高　台) 高さ 2.0～2.5cm 。 底部は扁平で幅 3.5cm。 脚部に直径６㎜の孔が穿ってある。 幅　　30.9cm 奥行き　30.0cm 高さ　　19.1～19.6cm	(調整) 内器面：丁寧なナデ。 外器面：丁寧なナデ。把手の接合部分は指ナデ。 外底面：高台と体部の接合箇所は一旦、接合した後、補強あるいは成形の為、粘土が被せられている。接合箇所は、各々の面にヘラ状工具で刻み目を入れ、貼り付け易くしている。 (文様) 外器面に文様あり。 把手の付く面の上位には、直径 1.8cmの連続する円形のスタンプ、下位には５～８本を１組とする条線を縦方向に施す。 把手のつかない面の下方には、７～８本を１組とする条線の半円文様が４組施されている。上位は、ヘラ状工具による横位の沈線を施す面と、８本を１組とする横位の条線を施す面がある。 さらに、片方の面の中央部には、細沈線で円が施されている。	(色調) 内器面：底部から６～８cmの高さまで黒色、それより上位は淡茶灰色。 外器面：黒色。

第24表　出土遺物観察表 ⑱

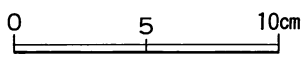


（前面）

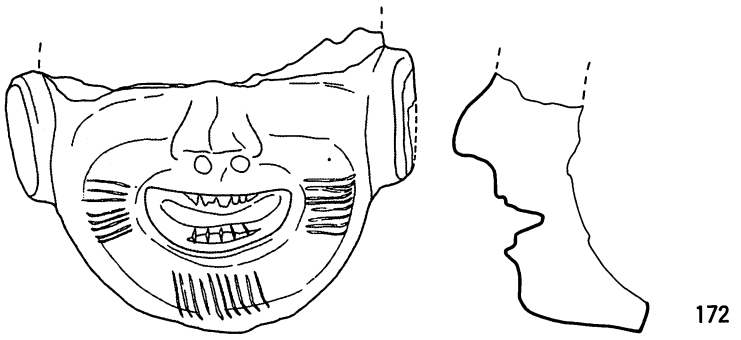
171



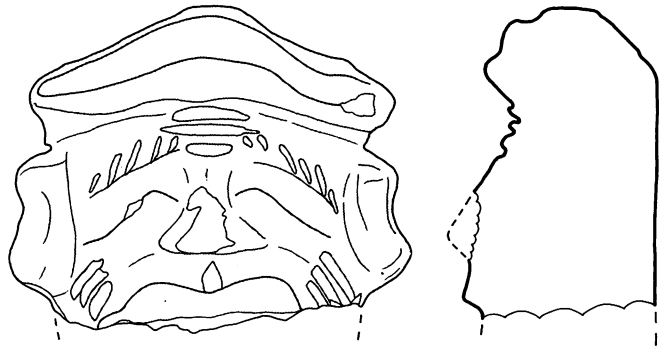
（側面）



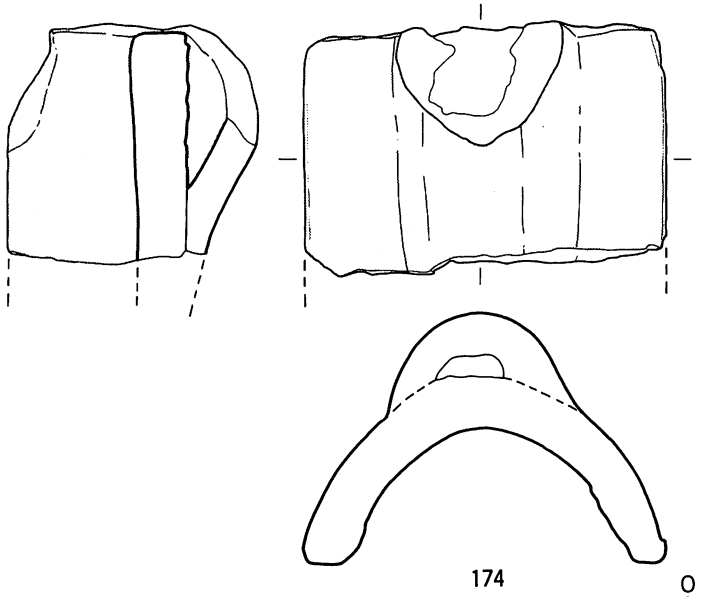
第31図　出土遺物実測図　⑯



172



173



174

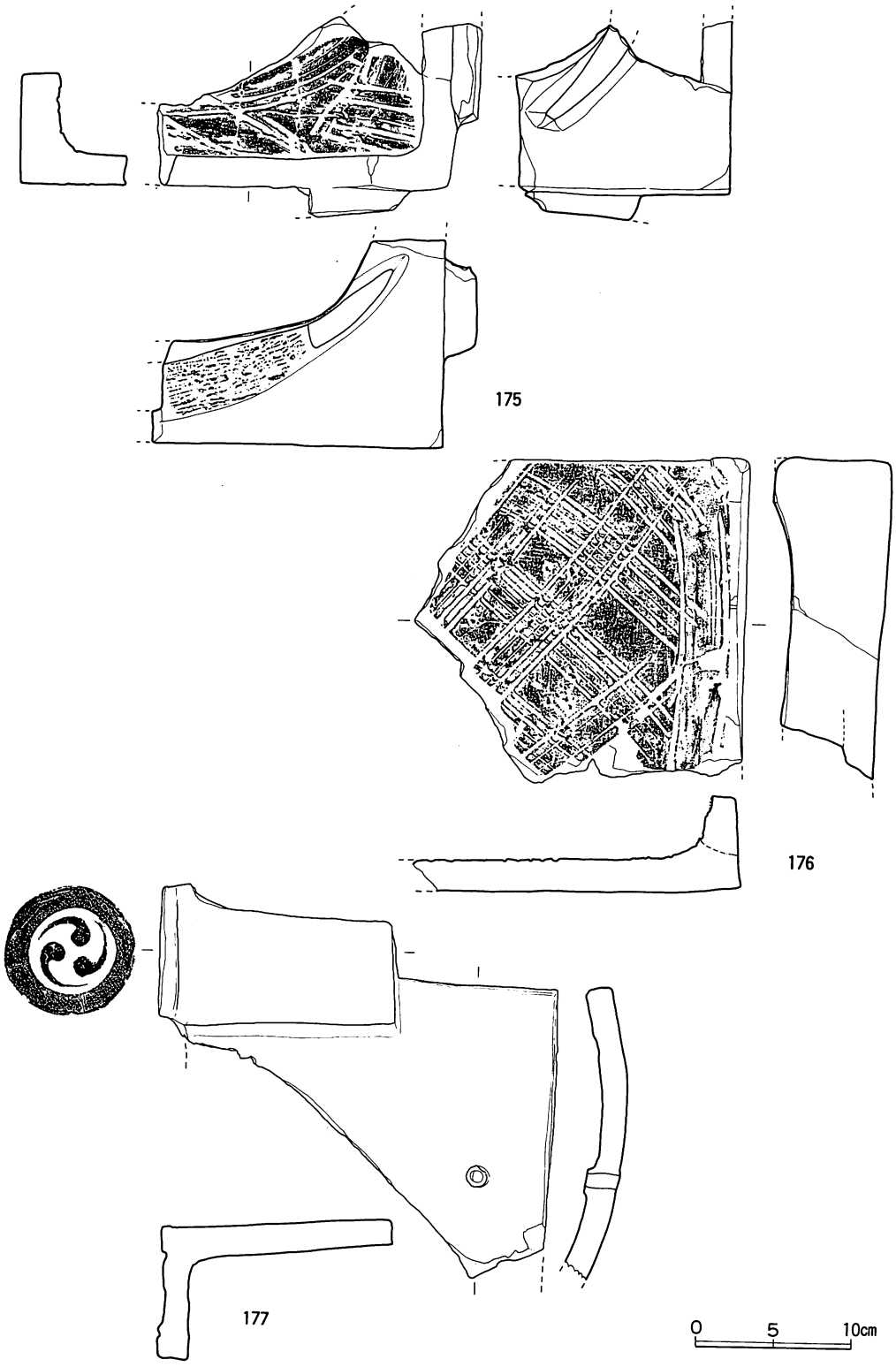
0 5 10cm

第32図　出土遺物実測図　⑰

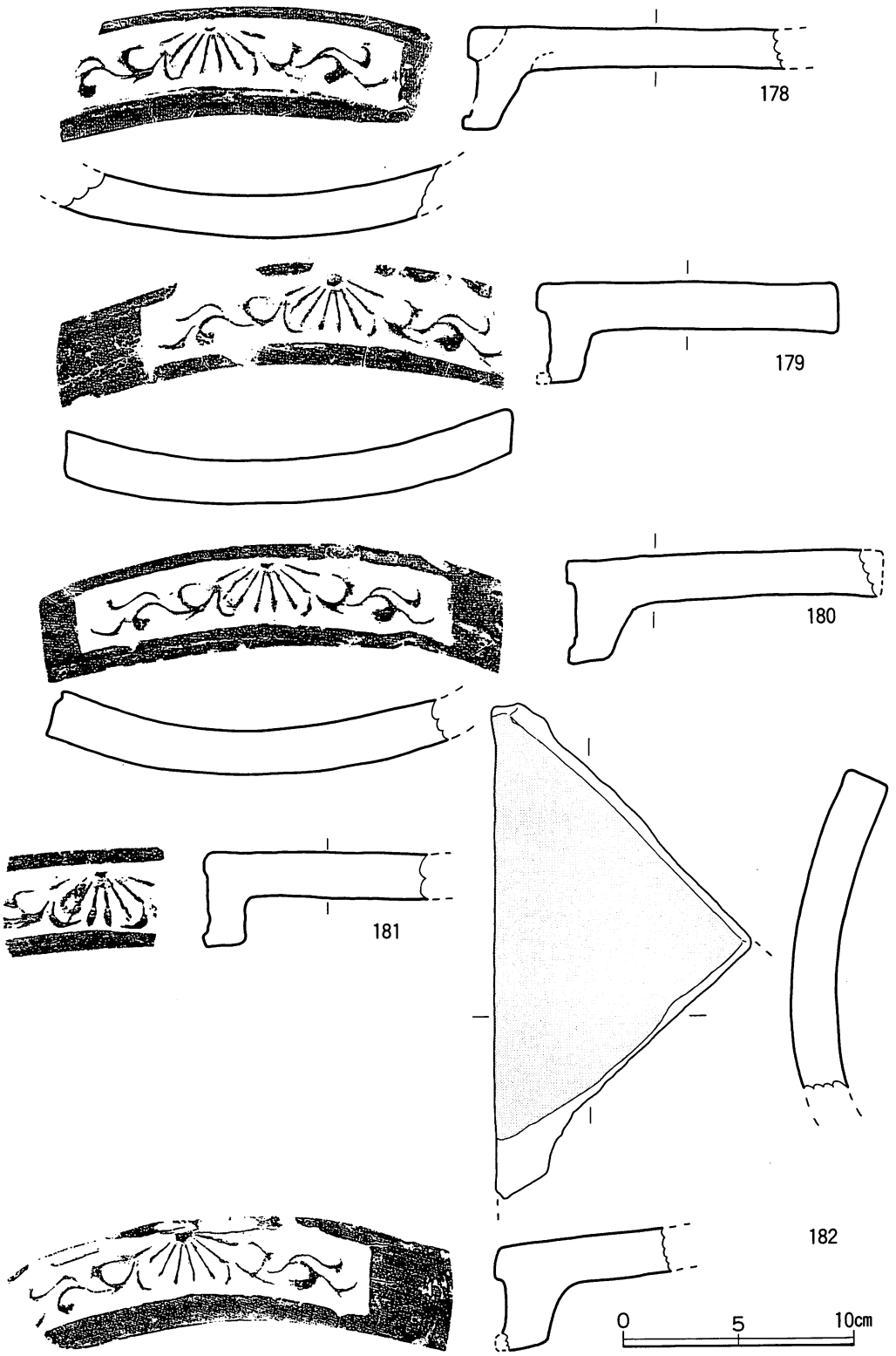
NO	器　種	形態の特徴	手法・調整・文様	備　考
172	人面瓦	顔下半分が残存。 鼻下から下顎までの長さは 6.1cm 顎の横幅は12.0cm。 口は大きく開いている。縦幅は 2.2cm、横幅 5.4cm。上下の前歯も描かれている。 両頬と下顎にヘラ描きによる細線の髭がある。右頬は9本、左頬は8本、下顎は10本。 耳は比較的大きな造りで、縦の長さは 5.0cm。 鼻筋はシャープさが感じられる。 裏面は、お面の形状を呈し、凹面となる。 鼻穴は貫通している。	(調整) 表面は丁寧な指ナデ。 裏面の中途から上位は、成形時の指頭痕などをそのまま残している。 下位についてはヘラ磨き。	(色調) 灰黒色。 (その他) ヘラ描きによるタッチがあまりにも強すぎるため、顔半分の表情には、殺気さえ感じられる。 非常にリアルな表現がなされている。
173	大黒瓦	顔上半分が残存。 耳を含めた横幅は15.0cm。 眉間・頬のシワと眉毛は、ヘラ描きされている。眉間のシワは3本、右眉は6本、左眉は5本、頬のシワは左右とも3本が確認される。 側頭部にあたる裏面は直立する。	(調整) 表面は指によるナデ。 裏面の頭部は、成形時の指頭圧痕などの凹凸をそのまま残している。 裏面はヘラ状工具による横ナデ。	(色調) 灰白色。 (その他) 裏面はお面のような凹面でなく、粘土の塊まりをそのまま成形しているため、非常に質量感がある。 ヘラ描きのタッチは柔らかい。
174	変形丸瓦	丸瓦の側面中央部に、片口の様な把手がついているが、上位部分を欠く。 (丸瓦) 厚さは、左側で 1.9～2.0cm。中央部で 2.0cm、右側で 0.8～1.9cm 。同じく玉縁側部は右側で 1.1cm、左側で 1.4cm。 幅は外径13.9cm、内径11.3cm。谷の深さ 5.0cm。 (把手) 丸瓦を小さくした様な形状をしている。 厚さは左側で 1.3cm。中央部で 1.6cm、右側で 1.8cm。 幅は外径 7.6cm、内径 2.7cm、谷の深さは8mm。	(調整) 胴部外面はヘラ状工具による、縦方向の丁寧なナデ。 玉縁側部は、左側で、ヘラ状工具による縦方向の丁寧なナデ。右側は、ヘラ状工具による、やや粗いナデ。 内面は縄文を縦方向にナデ消している。 把手部分との接合面は、凹線が施されている。	(色調) 灰黒色。
175	火舎	176と同一個体の可能性がある。	(調整) 外器面：把手を貼り付ける為、細目の棒状工具による、条線が付けられている。	――――
176	火舎	(体部) 外器面に、把手の様なものが付く。把手は貼り付けである。厚さは下位で 2.5cm。 (底部) 平底である。厚さ 2.0cm。 高台高　2.1cm	(調整) 外器面：丁寧なナデ。 (条線) 内底面と内器面に、2～5本を一単位とする条線が掻かれている。条線は強いが粗く互いに斜交している。	(色調) 茶褐色、鈍い褐色。

NO	器　種	形態の特徴と色調	手法・調整・文様
177	軒丸瓦	(平瓦部) 厚さ 1.6～1.8cm 。 谷の深さは、残存部で 1.6cm。 (瓦当部) 直径 8.6cm。 (丸瓦部) 厚さ 1.6～2.1cm 。 幅は先端で 8.3cm、後端で 6.5cm。 (成　形) 丸瓦部・平瓦部・瓦当部は別造り。 丸瓦部と平瓦部を接合し、そこに瓦当部をさらに接合している。瓦当部と丸・平瓦部の接合部には、多量の粘土が補充され、強化されている。 (色　調) 灰黒色。	(調整) 平瓦部は、凸面側に横ナデ後、縦方向のナデが加えられている。凹面側は、縦方向のナデ。 瓦当部は裏面において、下位部分のみ円周状のナデ。その他については、成形時の指頭圧痕を、そのまま残している。側部は横ナデ。 丸瓦は先端部のみ横ナデで、表面と側面は縦方向のナデ。 (文様) 瓦当部は右廻りの三ツ巴。

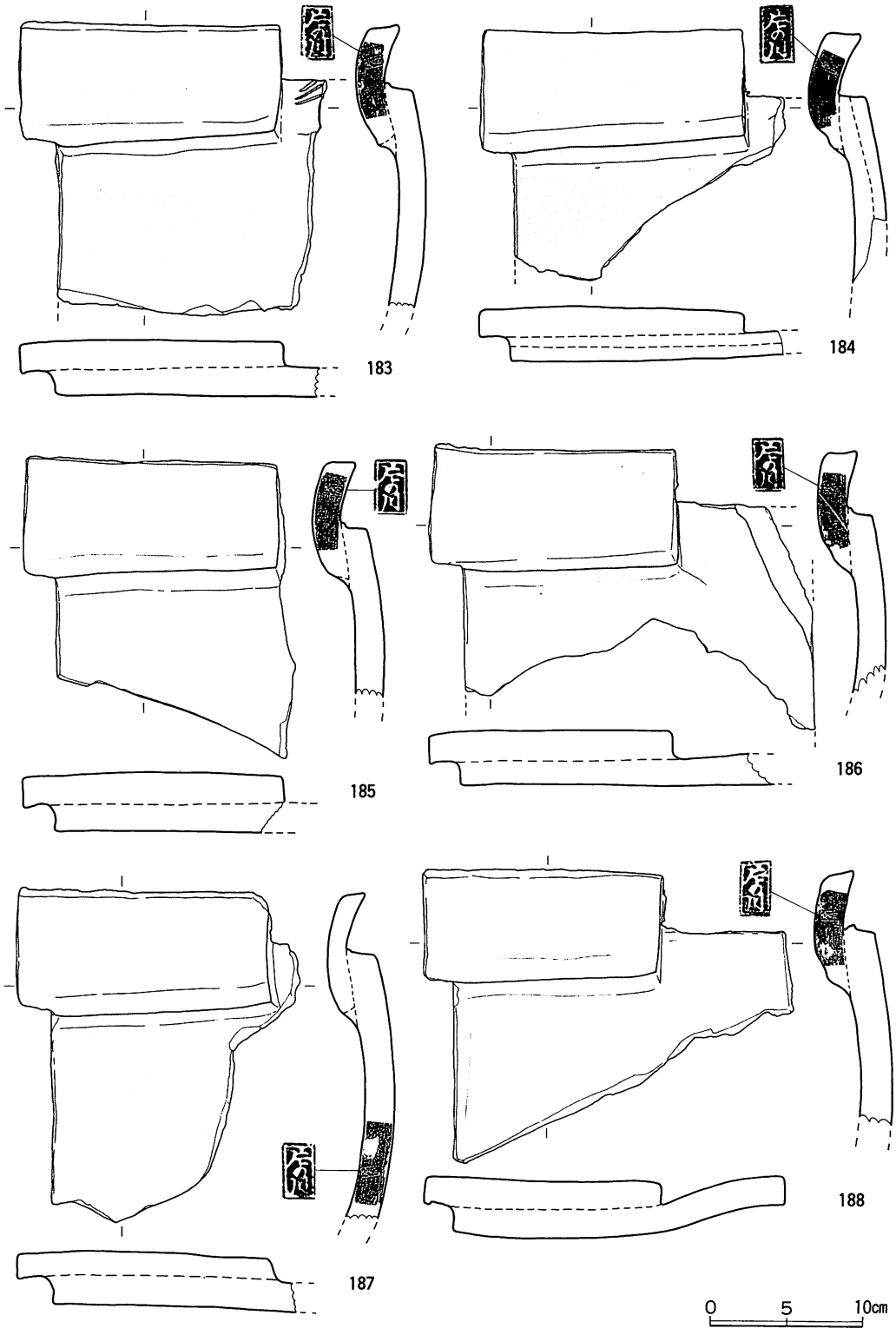
第25表　出土遺物観察表 ⑲



第33図　出土遺物実測図　⑱



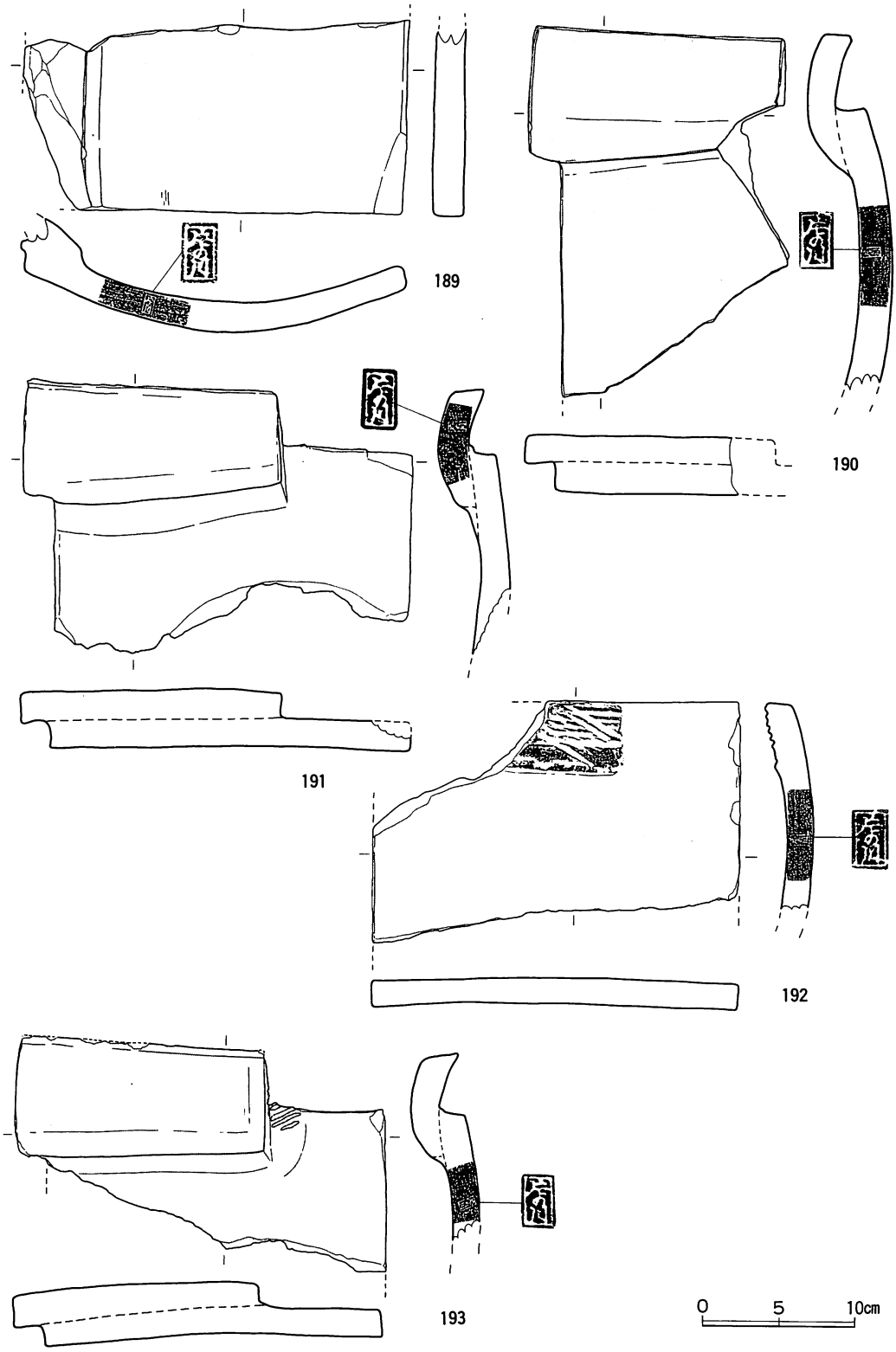
第34図　出土遺物実測図　⑲



第35図　出土遺物実測図　⑳

NO	器　種	形態の特徴と色調	手法・調整・文様
178	軒平瓦	垂れの長さ　4.5cm 厚さ　1.7cm (色調) 灰黒色。	(調整) 凸面の大部分は、縦方向のヘラ磨き。先端部寄りから、瓦当部の裏面及び表面の下端にかけて横ナデ。 凹面と瓦当部の表面の上端にかけて横ナデ。 (文様) 瓦当面は均正唐草文で、中心飾りは1点。中心部から扇形に8本の直線が放射する。放射の最大幅は 4.3cm。
179	軒平瓦	垂れの長さ　4.3cm 谷の深さ　1.6cm 厚さ　2.0～2.2cm (色調) 灰色。	(調整) 凸面の大部分は、粗い縦方向の磨き。先端部寄りから、瓦当部の裏面および表面の下端にかけて横ナデ。 凹面は縦方向の磨き。瓦当部の表面の上端は横ナデ。 平瓦部の後端は横ナデ。但し、一部に指頭圧痕が見られる。 (文様) 瓦当面は 178と同じであるが、扇形の放射は、比較して、やや狭まる感じである。放射の最大幅は 4.1cm。
180	軒平瓦	垂れの長さ　4.4cm 谷の深さ　残存部で 1.5cm 厚さ　2.0cm (色調) 灰黒色。	(調整) 凸面の大部分は、粗い縦方向の磨き。先端部寄りから、瓦当部の裏面及び表面の下端にかけて横ナデ。 凹面と瓦当部の裏面及び裏面の上端にかけて横の上端にかけて横ナデ。 (文様) 瓦当面は 178と同じであるが、扇形の放射は比較して、やや幅広い。放射の最大幅は 4.5cm。
181	軒平瓦	垂れの長さ　4.0cm 厚さ　1.7～2.0cm (色調) 灰色。	(調整) 残存部は全面、丁寧な横ナデ。 (文様) 瓦当面は 178と同じ。扇形の放射幅は 4.5cm。
182	軒平瓦	垂れの長さ　4.6cm 谷の深さ　残存部で 1.1cm 厚さ　2.0cm (色調) 灰色。	(調整) 残存部は全面、横ナデ。 (文様) 瓦当面は 178と同じ。扇形の放射幅は 4.5cm。
183	桟瓦	(平瓦部) 厚さ 1.9cm。 (丸瓦部) 厚さ 1.9cm。 幅は先端で 7.8cm、後端で 7.0cm。 長さ17.0cm。 (色調) 灰黒色。	(調整) 丸瓦部の先端部から表面にかけて横ナデ。 側面は横ナデ。 平瓦部は先端部と側面が横ナデ。凸面は縦方向のナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
184	桟瓦	(平瓦部) 厚さ 2.0cm。 (丸瓦部) 長さ17.0cm。厚さ 2.0cm。 幅　先端で 8.0cm。後端で 7.0cm。 (色　調) 灰黒色。 この瓦は破片であり、作瓦の状況が読みとれる。 2枚の平瓦が貼り合わされて、1枚瓦となっておりそれから丸瓦部との接合が行われている。	(調整) 平瓦部の側面と、凹面及び凸面の大部分は、ヘラ状工具による縦方向のナデ。 凸面の後端部寄りは、刷毛状工具による縦方向の粗いナデ。先端部は横ナデ。 丸瓦部の側面及び表・裏両面はヘラ状工具による縦方向のナデ。先端部は横ナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
185	桟瓦	(平瓦部) 厚さ 2.0cm。 (丸瓦部) 長さ17.3cm。厚さ 1.9cm。 幅は先端で 7.5cm、後端で 6.6cm。 (色　調) 灰黒色。	(調整) 残存部は、平瓦部と丸瓦部の先端部が横ナデ。 他は、縦方向のナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
186	桟瓦	(平瓦部) 厚さ 1.8cm。 (丸瓦部) 長さ16.5cm。厚さ 2.0cm。 幅は先端で 7.5cm、後端で 6.5cm。 (色　調) 灰白色。	(調整) 平瓦部の凹面は、中途まで丁寧な縦方向のナデ中途から後端にかけては、丁寧な横ナデ。 凸面は側面を含めて、全面粗い縦方向のナデ。 丸瓦部は側面から裏面にかけて丁寧なナデ。裏面は粗い縦方向のナデ。先端は横ナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。

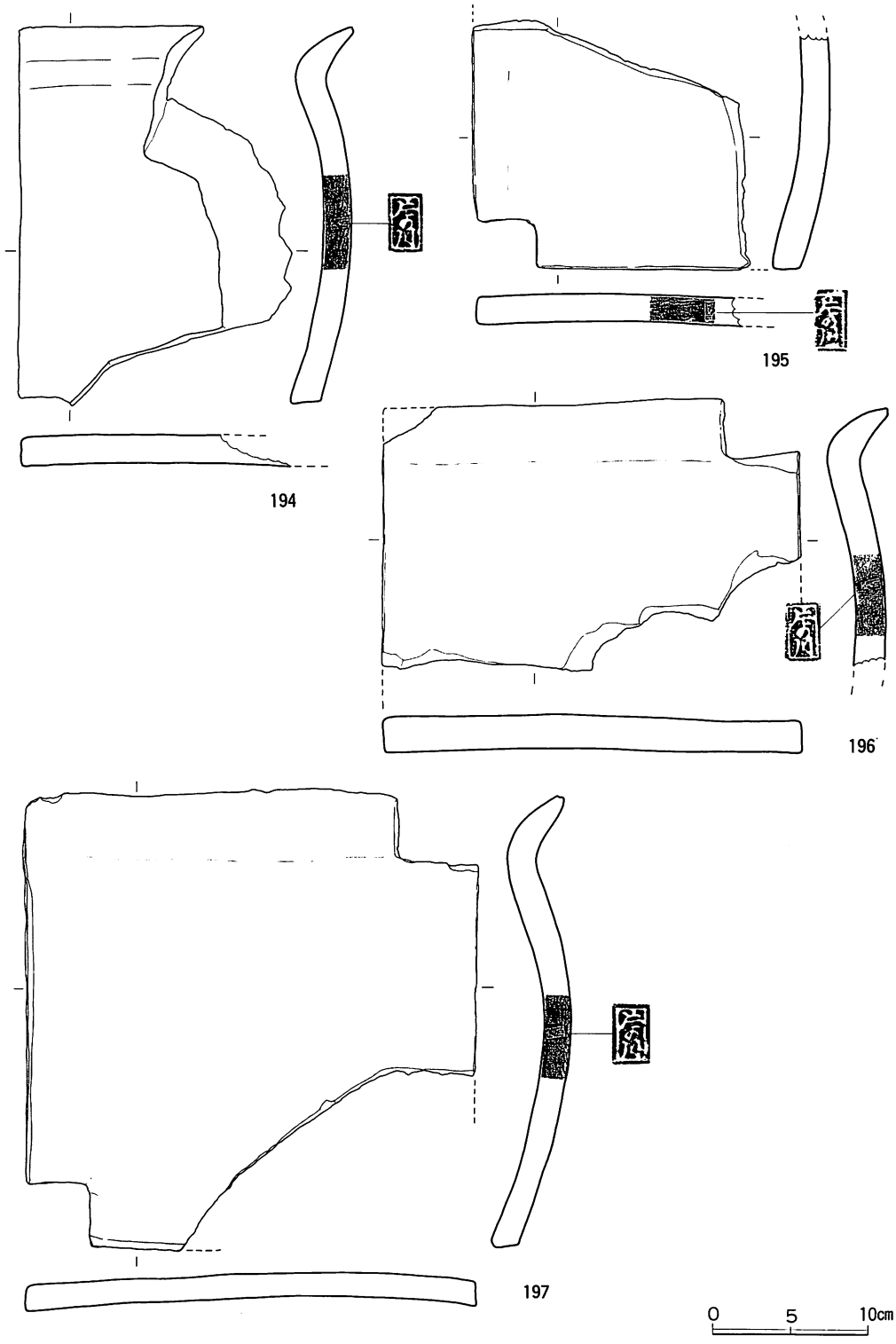
第26表　出土遺物観察表 ⑳



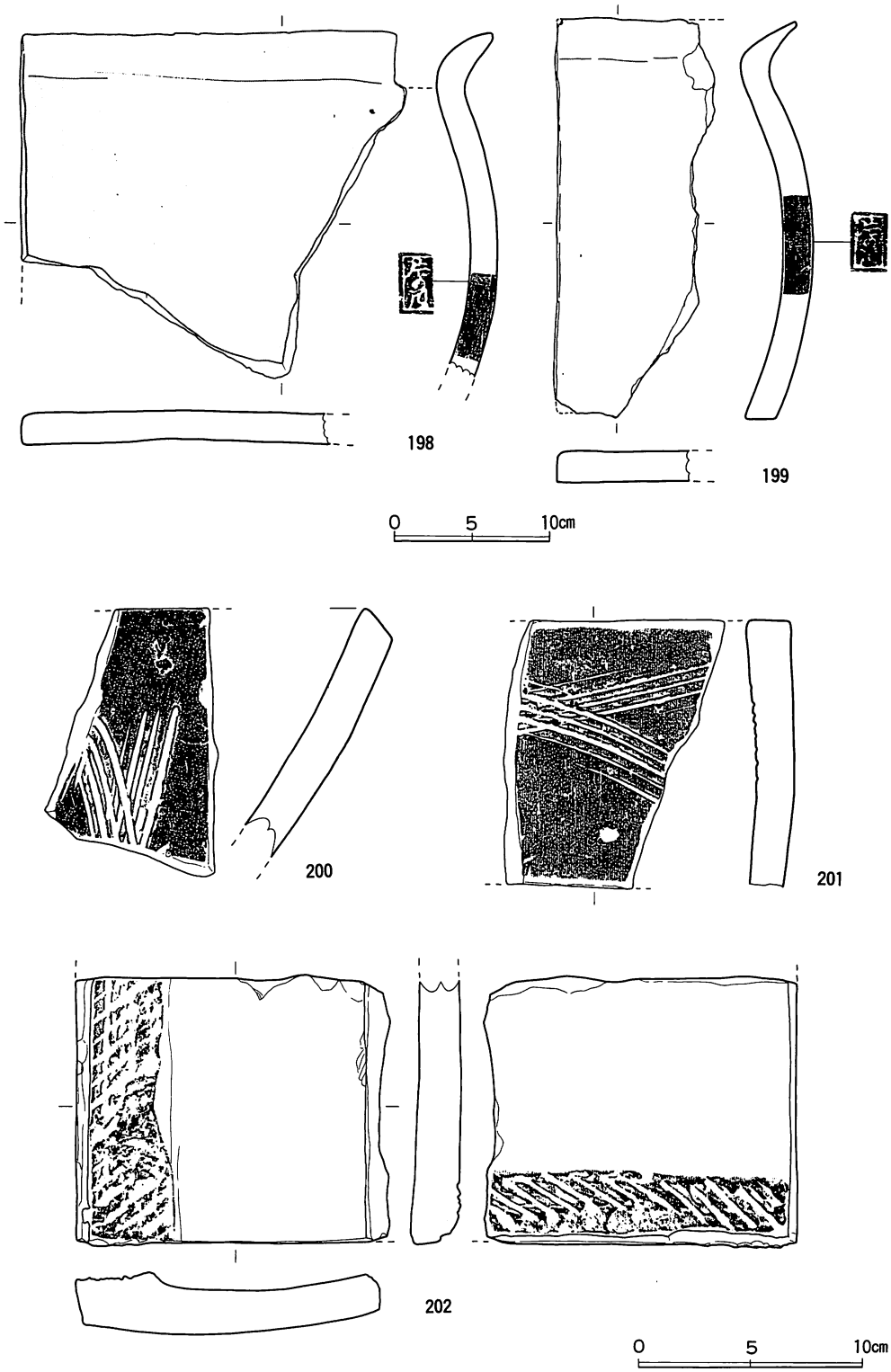
第36図　出土遺物実測図　㉑

NO	器　種	形態の特徴と色調	手法・調整・文様
187	桟　瓦	(平瓦部) 厚さ 2.0cm。 (丸瓦部) 長さ17.0cm。厚さ 1.3cm。 幅は先端で 7.7cm、後端で 7.2cm。 (色　調) 黒色。	(調整) 平瓦部の側面から凹面の中途にかけて、丁寧な縦方向のナデ。中途から後端にかけては丁寧な横ナデ。凸面は粗い横ナデ。先端部は横ナデ。 丸瓦部は側面から表面にかけて、丁寧な縦方向のナデ。裏面は粗い縦方向ナデ。先端部は横ナデ。 (文様) 平瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
188	桟　瓦	(平瓦部) 厚さ 2.1cm。 平瓦は中途より後端にかけて、やや歪む。 (丸瓦部) 長さ15.7cm。厚さ 1.9cm。 幅は先端で 7.2cm、後端で 6.5cm。 (色　調) 灰白色。	(調整) 丸瓦部の表面と平瓦部の凹面は縦方向のナデ。 丸瓦部の先端・側面と、平瓦部の両端・側面は粗い横ナデ。 平瓦部の凸面は横ナデ。但し、ナデ以前に刷け状工具よる縦方向の器面調整が行われている。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
189	桟　瓦	(平瓦部) 厚さ　1.8cm。 幅　25.1cm。 谷の深さ 1.8cm。 (色　調) 灰白色。	(調整) 平瓦部の側面と先端部は、丁寧な横ナデ。 凹面は極めて丁寧なナデ。凸面は比較して、やや粗いナデ。 (文様) 平瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
190	桟　瓦	(平瓦部) 厚さ 2.1cm。 (丸瓦部) 幅は先端で 8.6cm。 長さ16.9cm。 厚さ 1.9cm。 (色　調) 灰黒色。	(調整) 平瓦部は、側面が若干粗い縦方向のナデで、端部は丁寧な横ナデ。 凹面については、側面部より中途までが、丁寧な縦方向のナデ。中途より後端にかけては、丁寧な横ナデ。 凸面はヘラによる、かなり粗い縦方向のナデ。 丸瓦部の側面から表面にかけて、丁寧な縦方向のナデ。先端部は丁寧な横ナデ。裏面の側面寄りが無調整で、他は若干、粗い縦方向のナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
191	桟　瓦	(平瓦部) 厚さ 1.9cm。 (丸瓦部) 長さ17.2cm。厚さ 2.0cm。 幅　先端で 7.5cm。後端で 6.0cm。 (色　調) 灰黒色。	(調整) 残存部は平瓦部と、丸瓦部の先端部が横ナデ。 他は、縦方向のナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
192	桟　瓦	(平瓦部) 長さ 24.3 cm。 厚さ　1.8 cm。 (色　調) 凹面は灰褐色。 凸面は灰黒色。	(調整) 平瓦部の凹面は、粗い縦方向のナデ。側面は丁寧な縦方向のナデ。 凹面と丸瓦部との接合部には、縦や斜めに密な凹線が刻まれている。 凸面は粗い縦方向のナデ。 先端部は、丁寧なナデ。
193	桟　瓦	(平瓦部) 厚さ 1.9cm。 (丸瓦部) 長さ16.5cm。厚さ 1.9cm。 幅　先端で 7.8cm、後端で 6.6cm。 (色　調) 灰色。	(調整) 平瓦部は側面から凹面にかけて、丁寧な縦方向ナデ。凹面は若干、粗い縦方向のナデ。先端は若干、粗い横ナデ。 丸瓦部は側面の下位に幅 2 mmの面取りがある。側面から表面にかけて、丁寧な縦方向のナデ。裏面は粗い縦方向のナデ。先端部は丁寧な横ナデ。 (文様) 丸瓦部の先端に「片の川」のスタンプ。
194	平　瓦	厚さ　1.8～1.9cm 幅　24.0cm (色調) 凸面は灰色。凹面は黒色。	(調整) 凹面と側面は丁寧な横ナデ 凸面は粗い縦方向のナデ。
195	平　瓦	厚さ　1.7～1.9cm (色調) 褐灰色。	(調整) 凹面と側面はヘラ状工具による、丁寧な縦方向のナデ。 凸面はヘラ状工具による縦方向のナデ。後端部は丁寧な横ナデ。
196	平　瓦	厚さ　2.0～2.2cm 長さ　27.0cm (色調) 褐灰色。	(調整) 凹面の大部分は、丁寧な縦方向のナデ。凹面の一部と、それに連続する先端部は、丁寧な横ナデ。 凸面と後端部は粗い横ナデ。 (文様) 先端部に「片の川」のスタンプ。

第27表　出土遺物観察表 ㉑



第37図　出土遺物実測図　㉒



第38図　出土遺物実測図　㉓

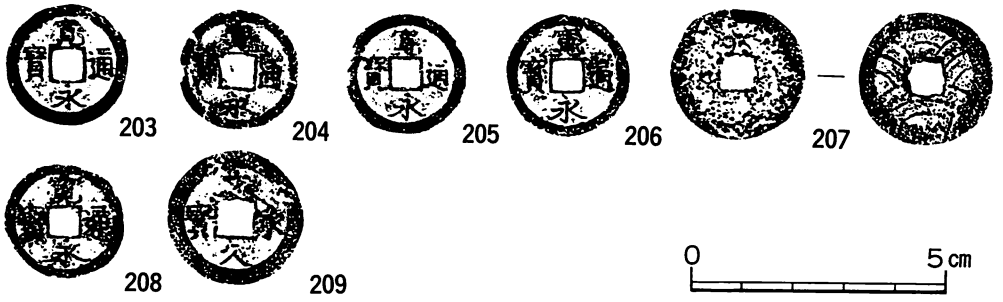
NO	器　種	形態の特徴と色調	手法・調整・文様
197	平　瓦	厚さ　1.7～1.9cm 幅　29.4cm 長さ　28.8cm (色調) 灰白色。	(調整) 凹面は非常に丁寧な横ナデ。凸面は、やや粗い横ナデ。 側面と両端部は、やや粗い横ナデ。 (文様) 先端部に「片の川」のスタンプ。
198	平　瓦	厚さ 1.9cm (色調) 灰白色。	(調整) 凹面と先端部は、丁寧な横ナデ。 凸面は粗い横ナデ。 (文様) 先端部に「片の川」のスタンプ。
199	平　瓦	厚さ　1.8～2.0cm 幅　25.4cm (色調) 灰色。	(調整) 凹面は丁寧な縦方向のナデ。 凸面と側面はヘラ状工具による縦方向のナデ。 先端部は、やや粗い横ナデ。 (文様) 先端部に「片の川」のスタンプ。
200	平　瓦	厚さ　1.9cm (色調) 凹面は灰白黒色。 凸面は灰黒色。	(調整) 凹面は丁寧なナデ。器面に4本を一単位とする2組の条線が交差している。 側面は非常に丁寧なナデ。 凸面はナデ。
201	平　瓦	厚さ　1.5～2.0cm (色調) 凸面は大部分が灰白色。一部のみ灰黒色。 凹面は黒灰色。	(調整) 凹面はナデ。器面に4本を一単位とする直線と5本を一単位とする弧状の条線が交差している。 側面はナデ。 凸面は丁寧なナデと、刷け状工具による粗い横ナデ。
202	平　瓦	厚さ　1.8～2.0cm (色調) 灰黒色。	(調整) 凹面はナデと指押え痕が残る。側面寄りに 3.6～3.9 cm幅の刻みがある。側面は横ナデ。 凸面はやや粗い横ナデで、一部に刷け状工具による、縦方向の粗いナデ。 先端部寄りに 2.3～2.6 mm幅の刻みがある。先端部は非常に丁寧な横ナデ。 側面に残る刻みは接合の為で、幅2～3mmの棒状工具で施されている。

第28表　出土遺物観察表　㉒

第3節　埋没水田址及び瓦粘土採掘穴から出土の古銭

埋没水田址から6枚の寛永通宝(203～208)が出土した。この中で 207の表面は風化が非常に激しい。埋没水田址そのものは、時間的な制約から掘削しなかったが、一部、調査の経過で深掘となった所からの出土である。5枚(203～206・208) は同一タイプであるが、 207のみが、裏面に青海波文の文様がある。

瓦粘土採掘穴（ＳＥ－１０）から文久永宝 (209)が出土した。この事により瓦粘土採掘穴の年代がわかる。



第39図　出土遺物実測図　㉔

第Ⅴ章　「片の川」刻印瓦と旧片野川村について

1．刻印瓦について

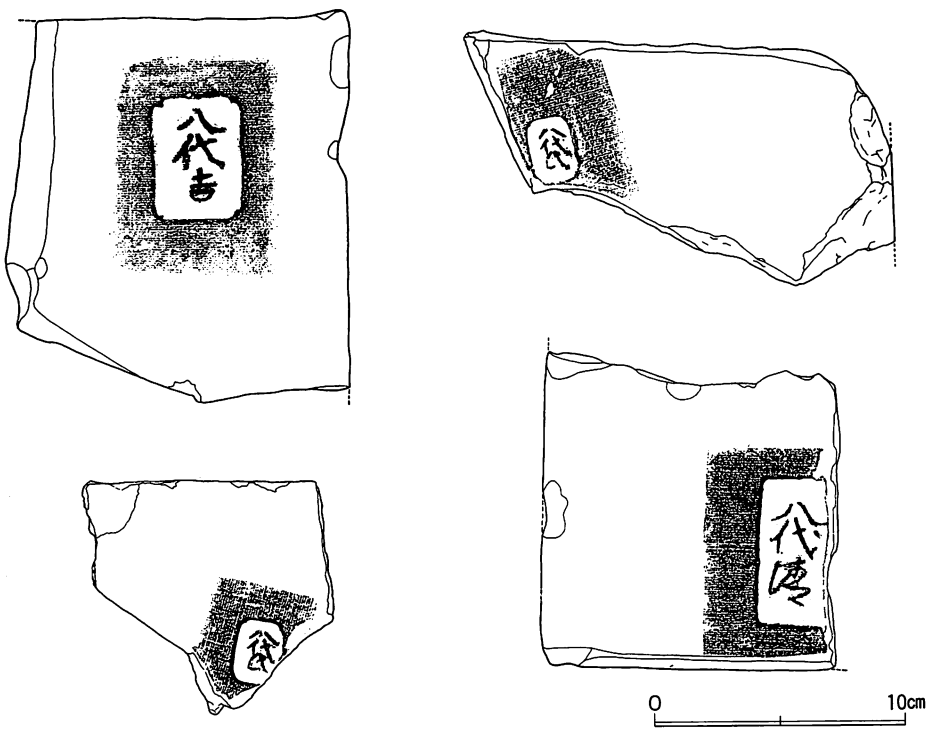
八代で江戸時代に用いられた瓦の刻印は、今日まで「片の川」を含めて「八代氏」「八代吉」「八代清」「井」の計５種類が確認されている。

「片の川」以外は、いずれも八代・松江城跡からの出土で、御用瓦師によって焼かれたものである。刻印名の「八代」は八代の瓦師という意味で、後に続く氏・吉・清は屋号の一種と考えられる。「八代吉」は、同市日奈久町からの出土例があり、この事から同地周辺に松井氏・御用瓦師（八代・松江城）の工房跡を比定できる。

刻印の位置は「片の川」が瓦の先端部であるのに対し、城跡内からのものは瓦の凹面部で異なっている。

一方、「片の川」は、江戸時代末期から明治時代の初期まで製造されており、窯では瓦のみならず、火舎・盤・人面瓦・大黒瓦の製品も焼かれている事が、今回の発掘調査で明らかとなった。また、昭和55年に発掘調査が行われた東片町の方見堂遺跡からも出土している。

刻印名の「片の川」は旧片野川村の村名であり、片野川村の瓦師との意味であろう。



第40図　〔参考〕八代松江城跡出土の瓦

2．片野川村の変遷

遺跡所在地の「字辺田の前」の地名は、文書・文献等に記載がなく、字図による字名である。

周辺一帯を含めた旧村の事については、慶長十年(1605)の肥後国絵図と慶長十二年の検地帳に、上片野川・北片野川・下片野川の三村があり、17世紀末の元禄肥後国絵図では下片野川村から分村して四村に増えている。18世紀後半の「肥後国誌」には、上片野川村に高取という小村の記載があり、この事により、辺田の前の地は江戸時代に上片野川村の高取という小村に属していた事がわかる。

これらの小村が今日では、「上片町」「東片町」「西片町」「中片町」に変遷している。

慶長肥後国絵図	慶長12年検地帳	元禄肥後国絵図	肥後国誌	備考（比定地）	現　在
上片野川村	上片野川村	上片野川村	一ノ門 黒竹 鴨牟田 高取 上一丁田 茶臼塚	字高取 字一町田 茶臼山古墳	上片町
北片野川村	北片野川村	北片野川村	成願寺 門前 田平 岡神	成願寺跡 字岡神	東片町
下片野川村	下片野川村	下片野川村	閑清 広間 乙田 十楽 泉丸 妙楽寺 稲 朴ノ花	「立間」か？ 「乙田」か？ 「明楽寺」か？ 字稲村	西片町
		中片野川村	木下 弥永 一町田 岩道 稲木 リウサン 西蓮 畑中 松丸 木屋敷	字一町田 「西林寺」か？ 字松丸	中片町

第29表　片野川村の変遷一覧表

第Ⅵ章　総　　括

（1）　埋没水田址について

埋没水田と現水田の畦畔は、同一方位のN50°Wを示し、今回検出された15本の長軸畦畔の内、５本までが現畦畔とほぼ重なり合い、残りについても、１本を除いて、南北間のズレが大体 0.5～1.5 m前後に留まった。現水田の造りは、埋没水田のものを踏襲している事が明らかで、新旧水田の間に時間的な差異は考えられない。

洪水時に東方の山腹より流れ出した土砂が、調査区一帯（現在も、周辺地よりやや低地である）を埋め尽くしたため廃田状態となり、結果として、後日の復旧工事により水田の嵩上げが行われたのであろう。新旧畦畔のズレは、その際に生じた工事の誤差とも考えられる。

埋没水田の時期は、間層（洪水層）からの出土遺物により、江戸時代の中期に存在した事が確実である。上限については、一部、深掘した埋没水田層から寛永通宝が出土しており、他に、この古銭より古い遺物が出土していない所から、江戸時代を遡る水田とは考えにくい。第Ⅱ章の遺跡の概要で述べた様に、江戸時代には八代城代の松井氏が、寛永十年(1633)に領内支配を郷組制から手永制に改め、開墾や海辺の干拓を奨励している事から、この頃の開田と見るのが妥当であろう。

（2）　瓦粘土採掘穴について

粘土採掘穴の異なる二つのタイプについては、蛸壺状に掘り窪めて、切り込み面が円形と楕円形を有するものが古く、他に一区域を一括的に採掘した穴は、比較的新しいとの見方ができる。採掘方法からして前者は小規模経営で、後者はある程度大きい経営規模である事が連想される。両者間に繋がりの無い事は採掘方法や埋め戻し用の客土の違いに加えて、前者のタイプに入るＳＥ－２２・２５が一部で、後者から切り込まれている事からも明らかである。以上の事から、後者は片の川瓦窯の廃業後に開かれた、別の瓦窯のものであるとの推論が出来る。

片の川瓦については、埋土の中から鋳造期間の短い文久通宝（1861～1863年）が出土しており、同時に出土した陶磁器の上限が幕末である事から、創業を文久年間と見る。下限については、出土遺物の中に明治10年(1878)頃に下るものがある所から、同時期を片の川瓦の終末期と見なす事が出来る。

（3）　間層（洪水層）及び埋没水田址からの出土遺物

図示した陶磁器類で、最も多いのは18世紀年代のものが33点で、次いで17世紀年代のものが15点となる。さらに、年代幅の限定を試みれば、17世紀後半から18世紀初頭にかけてのものが目立つ（14点）事から、洪水の発生時期をこの頃に比定する事が可能である。

出土遺物は大半が肥前磁器であり、（74・80・86）については内野山窯産のものと限定出来る。唐津は(54)の天目釉碗、(77)の象嵌大皿、（90・92・95）の擂鉢、(91)の二彩唐津、(93)

の片口ものなどが、主たるものとして取り上げられる。(107) は小代窯と思われる。

19世紀年代と考えられるものも4点 (50・57・60・66) 程出土しているが、これは現水田層の掘り残し部分からの出土を誤って取り上げたものであろう。なお、この外に青磁・白磁・古瀬戸など、かなりの中世遺物が出土している。これらの出土は、調査区周辺の歴史的な環境に関連するものである。

(4) 瓦粘土採掘穴からの出土遺物

19世紀年代のものが9点で最も多く、次で18世紀年代のものが5点を数える。19世紀年代のものでは、幕末のものが7点(121・127 ・130 ・132 ・135 ・141 ・144)で大半を占める所から、粘土採掘開始時期をこの頃と考えたい。出土遺物は肥前磁器をはじめ、唐津・瀬戸・美濃が大半を占める。

出土遺物の下限は(129・131)の肥前の磁器碗で、外器面の呉須文様が型刷りされており、明治10年頃と限定出来る。

以上の事と文久永宝の出土により、片の川瓦の創業は1861年以降で、1870年頃までの稼動が考古学的に実証される。

(5) 文献からのアプローチ

17世紀末から18世紀の初頭に埋没水田が形成されたとする考古学的所見と、八代地方の災害年表 (名和達夫氏作成) との唯一、合一点は正徳二年(1712)の事項である。7月8日に宮地の山鹿町で未曾有の大洪水が発生し、御茶屋等も床上2尺の水がきたとの記述がある。

同所は上片町の南側隣接地で、距離的にも妥当である。

正徳二年の洪水によって埋没水田が形成された可能性は極めて高い。

八代地方災害年表（抜粋）　編集　名和達夫

名和達夫氏（八代史談会員）が編集された『八代地方災害年表』（昭和54年11月20日発行）より、水害関係のものを同氏の許可を得て抜粋・編集したものである。

西　暦	年　号	事　項
1658	万治　元	5月12日、大雨洪水、6月6日より12日まで大雨続く。
1660	万治　3	1月17日、是夜、非常の大雷雨。
1662	寛文　2	5月8日　大雨洪水。
1664	寛文　4	4月大雨折々洪水、5月3日、大雨大水。
1667	寛文　7	是月、下旬より5月初旬にかけ大雨出水。
1673	延宝　元	5月中旬、是頃より6月にかけ折々洪水。
1676	延宝　4	4月5日、大雨洪水。
1677	延宝　5	6月9日、八代の萩原塘がきれ、松が流る。八代、球磨死者 432人。
1678	延宝　6	8月5日、九州地方大風雨、大に頽破す。本藩水損田畑76,570石余、塘61,895間、船大小 232艘破損、潰家13,039軒、溺死3人その他あり。
1687	貞享　4	9月8・9日、球磨川大雨のため洪水となる。
1695	元禄　8	5月、昨年11月より是月まで雨天多し。
1697	元禄　10	3月26日、大水出で大風。 5月29日より6月1日まで大水。 7月4日、七つ時（午後4時）よりそろそろ雷電あり、大雨夜半まで降続き、猫谷川大洪水、砥崎の土手破れ田地大分荒れ、新牟田まで洪水にひたり、当寺庭水長じて8、9寸余あり、谷宗覚寺堂の上に堂下薮6間ほど崩れ、居間等危うき事なり。紙すきの居宅いたみ家財等悉く流水、千仏堂仏共流れ、宗覚寺道心庵等悉く流る。松求磨四浦、鹿島、宮ノ原等破損記しがたし。
1699	元禄　12	6月9日洪水。
1702	元禄　15	是歳御国中水損洪水、大変あり。
1712	正徳　2	7月8日、未曽有の大洪水あり、山鹿町（宮地の）御茶屋等も床の上に2尺の水長なり。
1718	享保　3	7月大雨乞。
1722	享保　7	5月24日球磨川大洪水。
1729	享保　14	8月3日、球磨川、甚雨、洪水となる。
1732	享保　17	閏5月7日、是日より洪水、13日まで減水せず、ために田くされ、害虫発生被害甚大となる。
1733	享保　18	5月球磨川大洪水。
1734	享保　19	5月10日、是日より15日迄肥後強雨洪水。
1737	元文　2	7月、諸国大雨洪水、本藩にては、田畑6万74石損毛、相良藩にては8月7・8両日及び9月4・5日大雨洪水。
1739	元文　4	6月17日、甚雨のため球磨川洪水。
1740	元文　5	7月8日、水無月川洪水、砥崎土手破損す。紙すき小畑等いたみ家財等悉く流る。宗覚寺同前也。
1745	延享　2	6月14日、洪水。
1748	延享　5	6月11日より大日にて8月14日よりしけになり、16日雨大いに降る。
	寛延　元	9月2日、数10年来の大風雨にて倒家、倒木多し。俗に岩起という。 10月、八代地方に暴風おそう。
1752	宝歴　2	6月9日、球磨川大洪水、山鹿町春光寺馬場先より当村御番所の下迄土手切る、当村溺死の人数49人、福正原1人、其の外諸方の死人は書れ申さず、前代未聞の次第筆段に尽せざる事に候。
1756	宝歴　6	4月17日、この日より翌18日まで強雨出水、球磨川一丈二尺、芦北川一丈。
1759	宝歴　10	9月2日、この夜、大雨、倒家、寺社等32,990軒、男女死人49人、破損船 250艘、汐塘破損 280か所、田畑水損11,400町。
1765	明和　2	この年、大雨により球磨川洪水（田畑損毛90余石）
1766	明和　3	5月25日、強雨洪水、球磨川1丈9尺、萩原塘等破損1255間（水俣川を含むか？）
1772	安永　元	5月より雨降りつづき7月22日、球磨川洪水、損毛 8,100余石。

西　暦	年　号	事　項
1779	安永　8	夏中、天候不順、８月大雨。
1786	天明　6	夏中、度々大雨洪水、８月大雨。
1794	寛政　6	夏中旱ばつ、秋季雨多し。
1796	寛政　8	６月11日、９日より大雨にて諸川洪水。
		５月６日、球磨川大洪水。
1800	寛政　12	夏末雨降り続き秋に至り洪水あり。
1802	享和　2	５月10日、この日より29日まで雨続きにて諸川満水。
		８月５日、強雨大水、田畑荒地1899丁３反、塘破損 212か所。
1803	享和　3	４月22日より５月23日まで、降雨続き諸川増水。
1810	文化　7	３月７日、強雨、諸川満水、白川１丈５尺、球磨川１丈８尺、佐敷川１丈７尺。
1811	文化　8	４月30日より５月９日まで強雨大水
		５月６日、球磨川洪水。
1815	文化　12	７月６日、この日より８月まで強雨、諸川満水、球磨川１丈１尺。
		８月12日、強雨にて球磨川１丈１尺。
1816	文化　13	６月、球磨川も大満水。
1826	文政　9	５月21日、前日より大雨にて洪水、高瀬川、球磨川共に１丈２尺出水。
1828	文政　11	５月５日、大雨洪水、球磨川増水１丈４尺。
		５月20日、是夜雷雨、翌日大雨、保川１丈２尺、球磨川１丈６尺出水。
		６月17日、昨夜より大雨にて洪水、球磨川１丈７尺余。
1830	天保　元	７月８日、昨夜より北の大風雨、八代洪水。
1831	天保　2	５月19日、５月上旬以来、梅雨しきりに降り、この日大雨のため球磨川１丈８尺出水。
		６月１日、球磨川出水。
1834	天保　5	５月８日、是日及翌９日大雨洪水、球磨川１丈５尺５寸。
1835	天保　6	７月17日、是日より21日迄、東の大風吹き、21日は大雨加わる。
1836	天保　7	５月、この月より７月初旬にかけ、諸方降雨、出水多し。
		７月６日、この日より８日まで大雨、７日より昼より大風。
1837	天保　8	正月23日、大雨洪水にて麦作数百丁水浸し。
		３月、行倒れ死亡するもの多く、生死不明27名あり。この頃凶作のため、物もらいおびただし、３分の１は他国者なり。４月以後も行倒れ、ものもらい多し。
		５月27日、球磨川洪水、２丈余出水。
1838	天保　9	７月23日、八代方面前夜より大風所々風損、此の日夕刻大雨、翌24日夕刻より大雨雷鳴。
1839	天保　10	４月20日、大雨洪水。
1840	天保　11	５月17日、大雨洪水。
		６月15日、昼夜３～４度地震あり、八代、芦北方面強し、（八代ノ城崩ル）
		６月、数回大雨洪水。
1841	天保　12	４月24日、強雨諸川満水、八代方面殊に烈し。
1842	天保　13	夏秋旱損、水害等にて損毛。
1843	天保　14	５月30日、球磨川出水１丈９尺。
1847	弘化　4	６月24日、球磨川大洪水、水新馬場にのぼる。
1848	嘉永　元	当夏水害、秋に至り虫入、穂枯。
1849	嘉永　2	11月、初夏の長雨、度々の洪水、田方虫入。
1850	嘉永　3	７月11日、早朝より風出で、昼頃より大風となり、８つ時分より風雨共に烈しく、七つ半此風弱る。家中市在倒家、田畑被害甚大。
		７月14日より20日まで日々雷鳴続き在中諸所落雷。
1851	嘉永　4	11月、当年春以来雨繁く、水害等。
1858	安政　5	５月３日、是日より降雨、同20日より25日まで度々降雨にて田畑8231丁余水浸。
		６月29日、近年になき強風雨にて被害多し。
1860	万延　元	４月７日、この日より９日まで強雨、洪水、田畑7189丁１反余浸水、家屋3056軒浸水　その他被害者多し。
1862	文久　2	６月５日、この日より７月まで強風にて田畑浸水5276丁反余、家屋浸水3654軒。
		９月、夏以来追々洪水、秋に至り虫害風災等。

参 考 文 献

（1）片の川瓦の記述に関して

熊本県教育委員会『方見堂遺跡』　熊本県文化財調査報告　第52集　1981年

（2）近世埋没水田址の記述に関して

熊本県教育委員会『川田京坪遺跡』熊本県文化財調査報告　第46集　1980年

熊本県教育委員会『七地水田遺跡』熊本県文化財調査報告　第 101集　1989年

（3）条里の記述に関して

熊本県教育委員会『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告　第25集　1977年

（4）近世出土遺物の記述に関して

健康保険八代総合病院『八代城跡』　1981年

九州陶磁文化会館『国内出土の肥前陶磁器』　1984年

（5）周辺遺跡の記述に関して

八代市教育委員会『八代市遺跡地図』　1983年

八代市教育委員会『八代市の文化財』　1980年

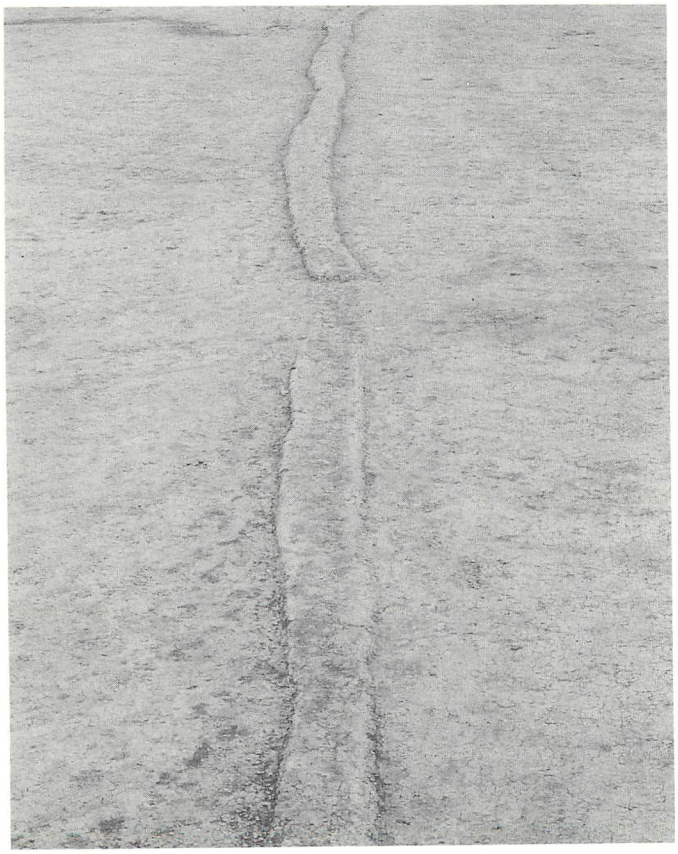
写　真　図　版

(1)　調査区基本土層

(2)　畦畔G検出状況

図版２

（1） 水田０５検出状況

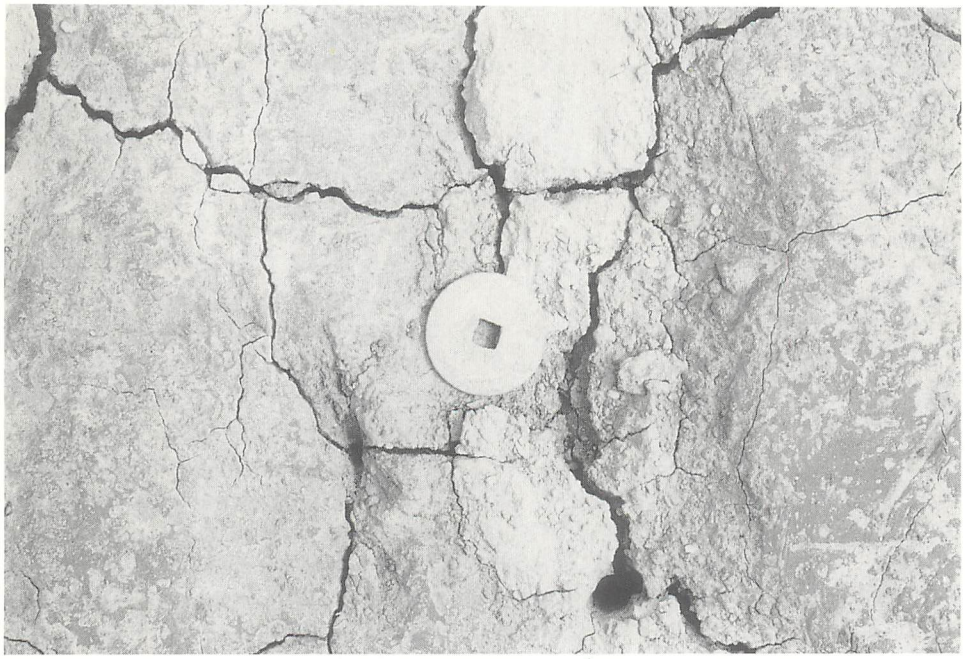


（2） 畦畔Ｏ検出状況

（1） 畦畔Ｓ検出状況

（2） 畦畔Ｅ検出調査風景

図版4



(1) 埋没水田址出土の寛永通宝

(2) 水田０４より検出の瓦粘土採掘穴

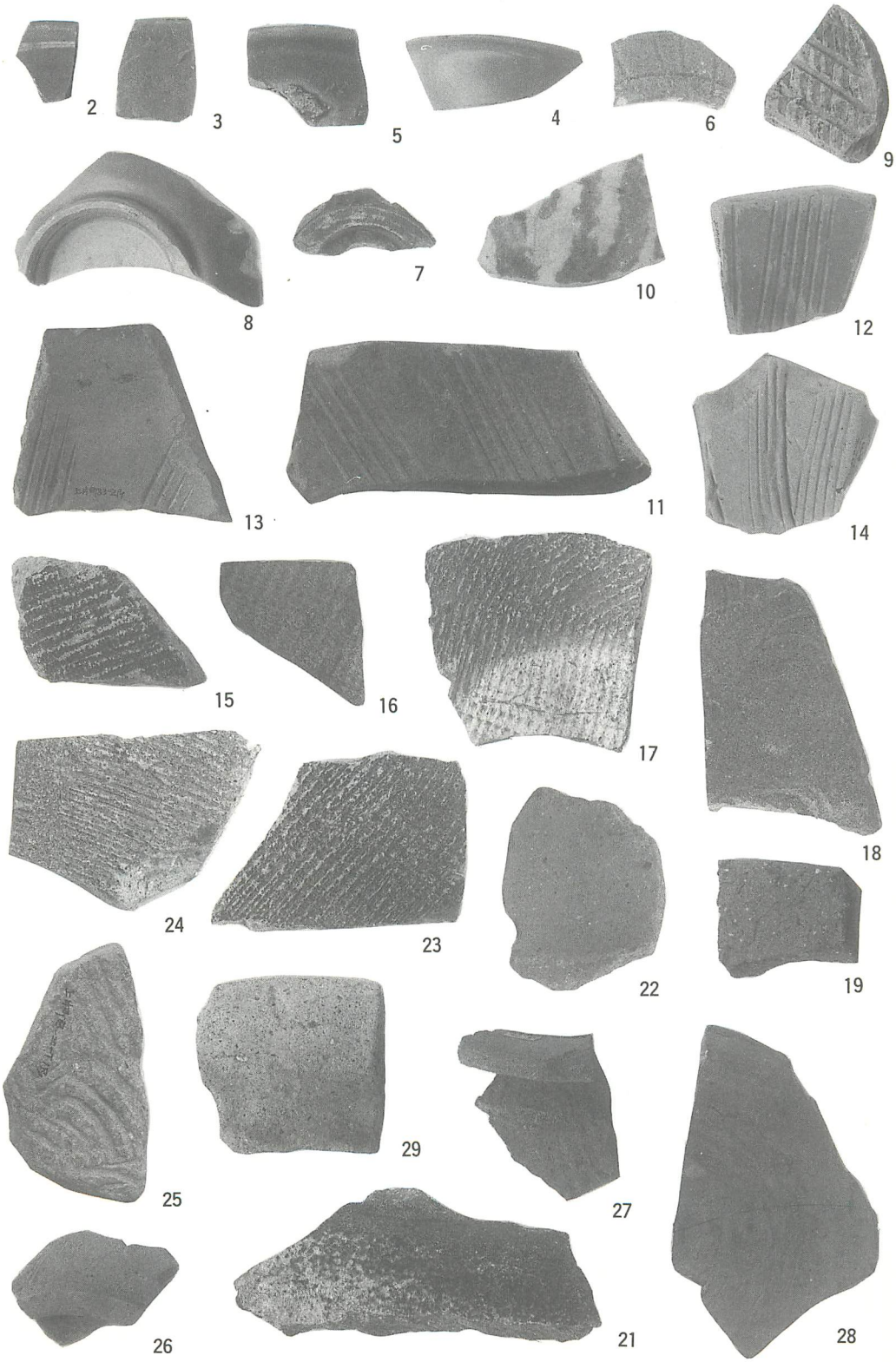
(1) 瓦粘土採掘穴の半裁状況

(2) 瓦粘土採掘穴出土の瓦層

図版６

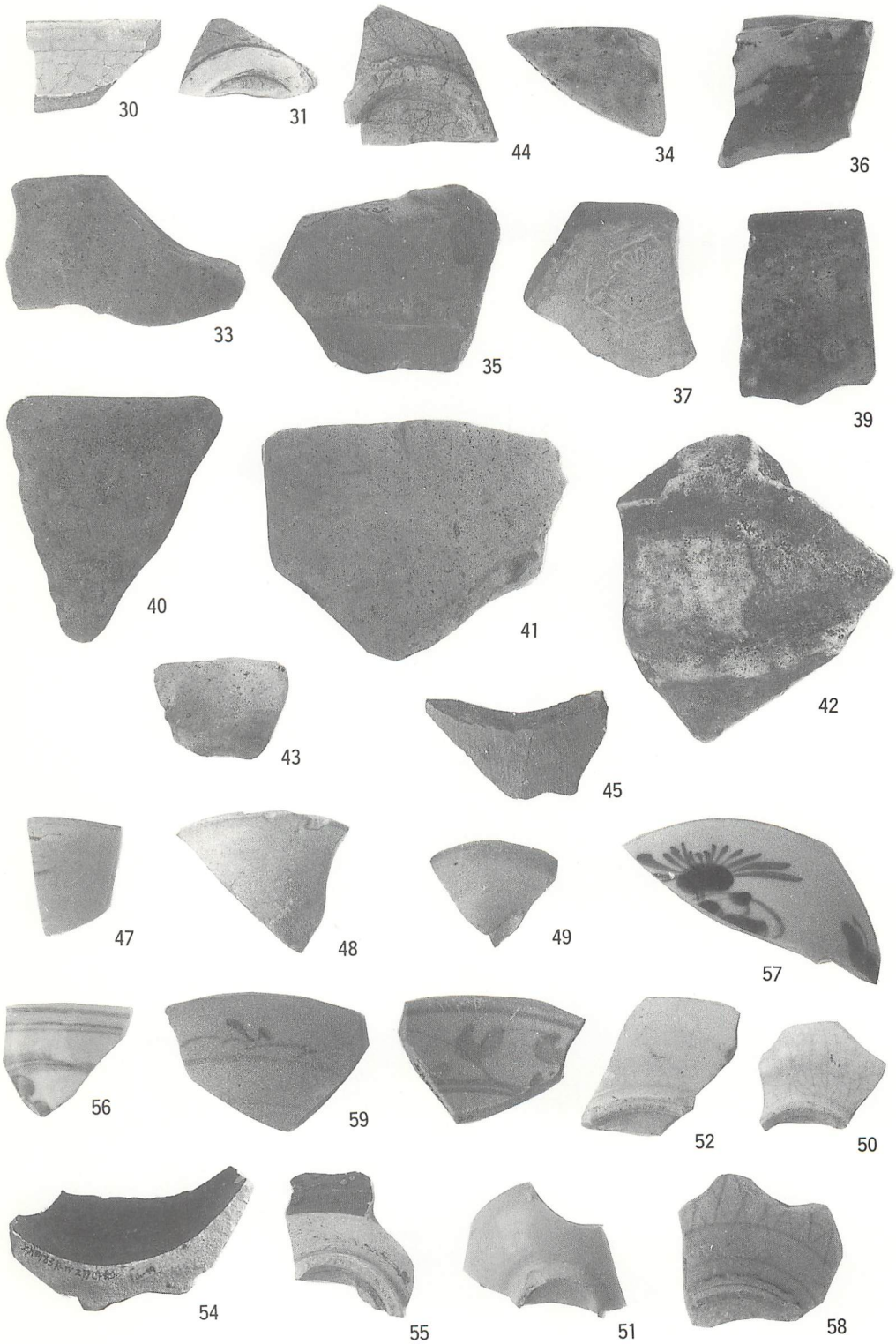
(1)　瓦粘土採掘穴の検出調査風景

(2)　瓦粘土採掘穴（ＳＥ－１０）･出土の文久永宝

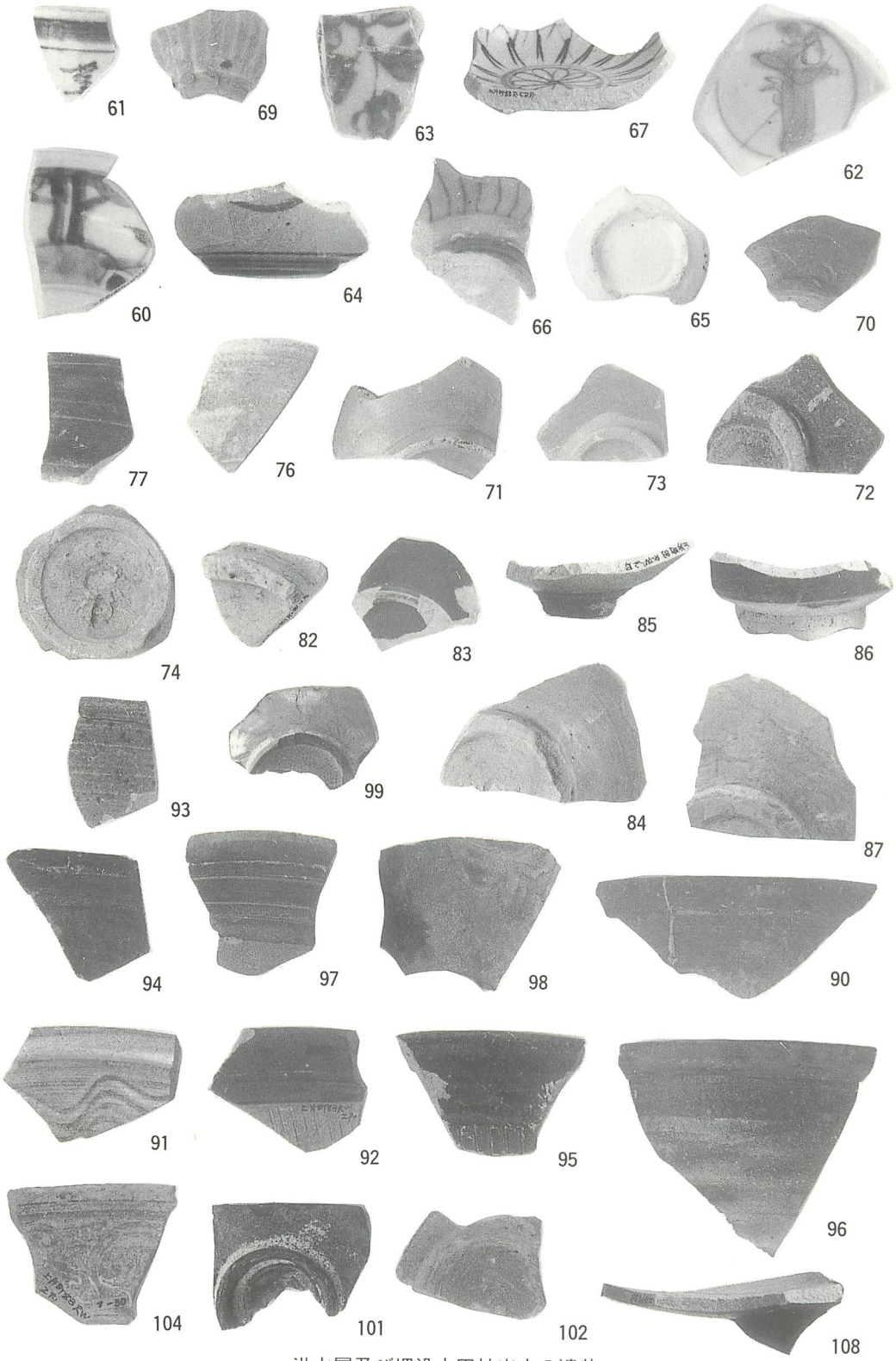


洪水層及び埋没水田址出土の遺物

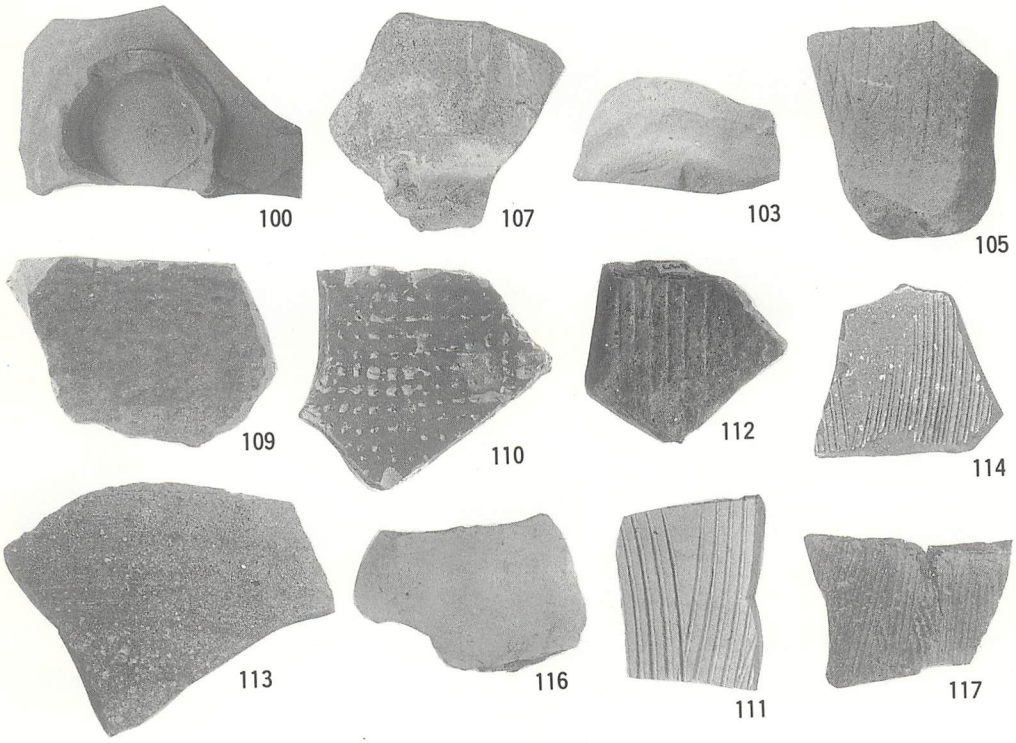
図版8



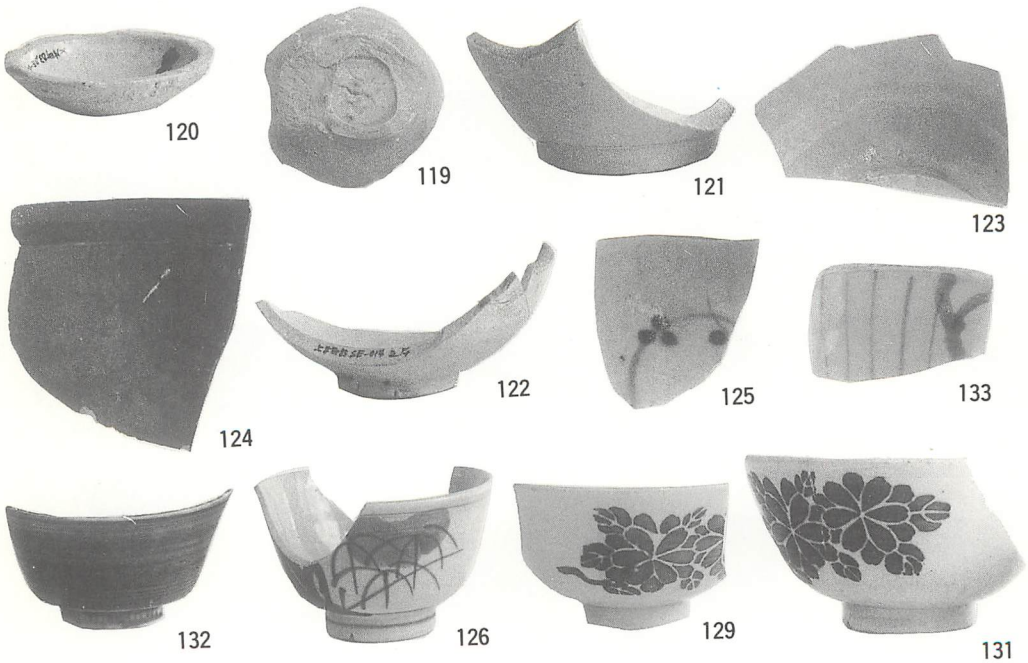
洪水層及び埋没水田址出土の遺物



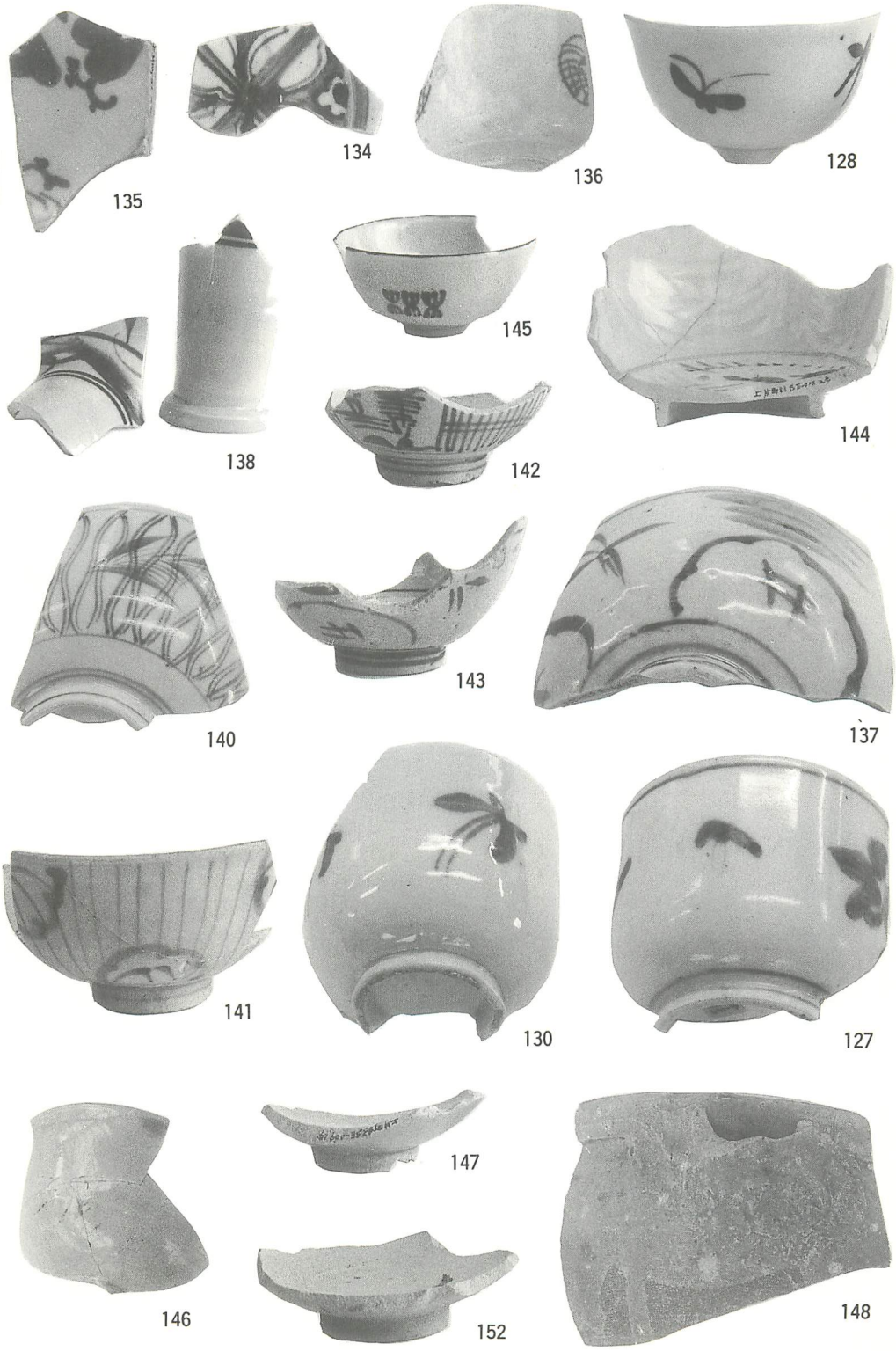
洪水層及び埋没水田址出土の遺物



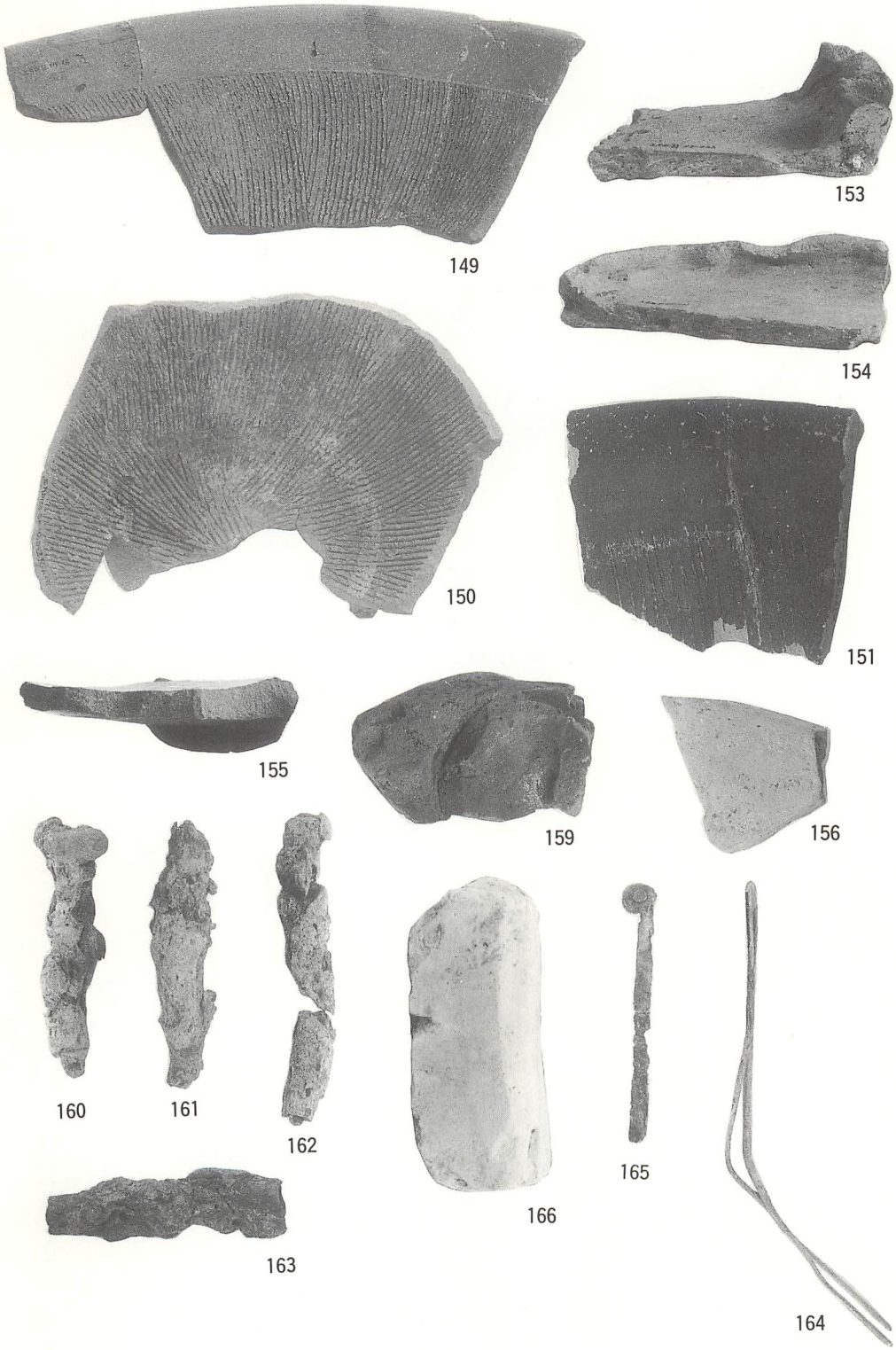
(1) 洪水層及び埋没水田址出土の遺物



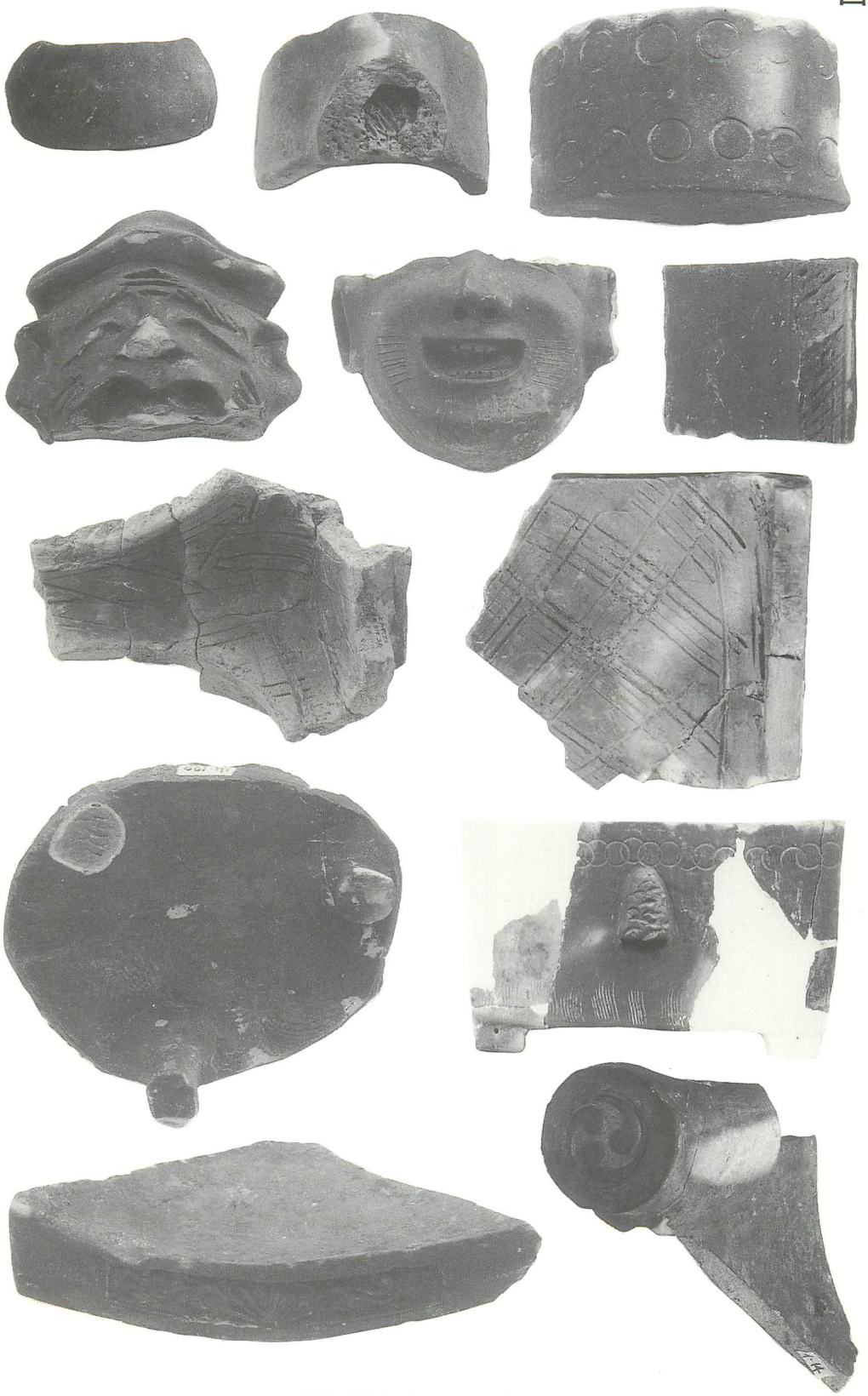
(2) 瓦粘土採掘跡出土の遺物



瓦粘土採掘跡出土の遺物



瓦粘土採掘跡出土の遺物



瓦粘土採掘跡出土の遺物

熊本県文化財調査報告　第109集

上片町水田遺跡

（かみかたまち）

平成元年10月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒860 熊本市水前寺6丁目18－1
TEL(096)383－1111(代)
文化財調査第2係(内)6715

印刷　中央印刷紙工株式会社
〒860 熊本市田崎2丁目5－38
TEL(096)354－4191
FAX(096)354－4165

01 教委 教文
② 001

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 109 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上片町水田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日